



JCCK
Junior College Consortium Kyushu

短期大学コンソーシアム九州 紀要

Vol. 1

2011(平成23)年3月
短期大学コンソーシアム九州

巻 頭 言

3.11の災禍のなか、研究紀要第1号を発刊する。これは2009年10月に発足した短期大学コンソーシアム九州の研究センターにおける最初の活動成果である。ここには、論文も報告も、明確な文脈ないし焦点がある。短期大学のアイデンティティへの旅である。専門学校と比較すれば見えやすそうで、大学と比較すれば見えにくくなる。大学とは異なる、専門学校とは異なる、もちろん高校とも異なる、短期大学の固有性を探究することがその学術的な問いであり、それに対する九州の短期大学の実践を分析することでの応用解を提示し、その実践的適用可能性を考量するものである。

われわれの仮説は、地域を愛する短期大学、地域に愛される短期大学が存在するということにつきる。これは、いまこそ日本に問われる命題である。2002年9月からの短期大学の将来構想に関する研究会では、短大の様々の事例や政策、また海外の非大学型高等教育機関や教育制度を検討し、また卒業生や各種の地域ステークホルダーの調査を行い、原石を磨き込むようにその存在の核を探究しつづけている。この探究は無窮である。そしていま、いくつかの確からしさをもとに、2009年度からの先導的・大学連携事業を通して、その核により大きな形を与えようとしている。一定のコンセンサスを持ってその応用解を示し、その実践的適用可能性を検証するという目標への、第一歩を標したのである。

短期大学は、法的に、設置基準を満たし、第三者評価基準に準拠した輪郭と活動を有することが期待されている。そしてすべてがそれを満たしている。しかし、それだけで社会的に認知されるわけではない。直接には卒業生の社会での活躍の実績を通して、またそれらを生み出した短期大学の固有性を示し、それらをより高い水準へと引き上げるポテンシャルと行動を社会に示すことを通してである。短期大学コンソーシアム九州は、そのための連携であり、現在北部九州地域の9短大が加盟している。卓越した短期大学がもつべき標準を「コンソーシアム・スタンダード」として設定すること、そこに向けて各加盟短大の活動を点検・評価し、相互に学習し、そこからの充実・向上・革新への努力を焦点化し相互に支援していくこと、さらにその実現に必要な共同事業を組織し、実践していくことを目指している。われわれが示す答えは各論文、報告のなかにある。

なお、本研究紀要は多くの地域ステークホルダーのご協力を得て実現した活動の成果を振り返るものです。個々にお名前を掲載できませんが、関係者への感謝を申し上げます。またコンソーシアムにおいては、研究センターの石原好宏研究員が編集を担当し、コンソーシアム事務局の相戸晴子さんに編集事務を担っていただいたのでご報告させていただきます。

2011年3月 被災者の悲しみに想いを寄せ被災地と日本の復興への志を込めて

短期大学コンソーシアム九州
研究センター長 吉本 圭一

目 次

巻頭言	吉本 圭一	1
論文		
高校－短大連携活動・事業の全国調査について	田尻由美子 武部 幸世	5
地域との協同による人材養成プログラムの開発に向けた短期大学における役割・機能に関する研究	川邊 浩史 永田 誠	13
在学生調査におけるライフプランニング総合学科の学生の特徴について	中濱雄一郎	21
アメリカのグレート・ティーチャーズ・セミナーは決して一様ではない	石原 好宏	27
報告		
短期大学教育の到達目標の設定と学生調査	安部恵美子 小嶋 栄子	35
東海大学福岡短期大学「2010年度リーダーズ研修会」－初年次教育に向けて－	神山 高行 真下 仁	45
中学－高校－短大の連携事業を通じたキャリア教育に関するシンポジウム報告	田尻由美子 武部 幸世	51
合同 FD/SD 研修会「地域に愛される魅力ある短期大学」	武藤 玲路	57
地域人材養成フォーラム「短期大学から発信する地域との協働」	川邊 浩史 永田 誠	65
社会人基礎講座合同宿泊研修会 実践報告	秋好 晴彦 横山 卓	73
編集後記	石原 好宏	

Contents

foreword	Keiichi YOSHIMOTO	1
Articles		
Results of Nationwide Survey on Cooperation between High Schools and Junior Colleges	Yumiko TAJIRI Sachise TAKEBE	5
A Study of Role and Function in Junior College for Development of the Training and Education Program with Cooperation of Community and Company	Hirofumi KAWABE Makoto NAGATA	13
Features of the Students in the Department of Comprehensive Studies for Life Planning: Evidence from Research of Students	Yuichiro NAKAHAMA	21
Great Teachers Seminars spread all over the United States are by no means Conducted Uniformly	Yoshihiro ISHIHARA	27
Reports		
A Survey of Current Students' Views on the Quality of Education at Junior College	Emiko ABE Eiko KOJIMA	35
A Report on 2010 Seminar for Student Leaders at Tokai University Fukuoka Junior College – A Step toward Education for the First Year Students –	Takayuki KAMIYAMA Shinobu MASHIMO	45
Report of Symposium on Career Education through Partnership among Junior High and Senior High Schools and Junior Colleges	Yumiko TAJIRI Sachise TAKEBE	51
Joint FD/SD Seminar “Attractive Junior College loved by the Community”	Ryoji MUTO	57
A Forum for Cultivation of Community Human Resources “Cooperation of Community and Junior College, proposed by the Junior College”	Hirofumi KAWABE Makoto NAGATA	65
Report of the Training Program for being a Member of Society	Haruhiko AKIYOSHI Takashi YOKOYAMA	73

【論文】

高校一短大連携活動・事業の全国調査について

Results of Nationwide Survey on Cooperation between High Schools and Junior Colleges

田尻由美子*¹ 武部 幸世*²

Yumiko TAJIRI Sachise TAKEBE

要旨 高校と短期大学の連携事業の実態を把握するために、2010年3月に全国の私立短期大学に対してアンケート調査を実施した。205校より回答を得、76.8%の短期大学が高校一短大の連携事業を実施しているということがわかった。出前授業や講座、短大での体験授業、公開講座の実施率が高く、短大生と高校生の交流会や短大教員と高校教員の連絡会などの実施率が低かった。協定を結ぶことの意義が認められ、また、高校と短大との教育課程での連結についても、短大教育の理解を深め関心を高めるといった可能性が指摘できた。連携事業を継続していくためには学長以下の全学的取り組みの必要性や高校と良好な関係を構築していくことなどが求められる。

キーワード 高等学校、連携事業、接続教育、協定、キャリア形成支援

1. 目的

精華女子短期大学はコンソーシアムの事業の中で主担当として「高校一短大連携事業」を担っており、今回、全国の私立短期大学に対し調査を実施し、連携事業の実態を明らかにすることとした。これは、湘北短期大学³⁾の事例があるものの、短期大学での高大連携事業実践事例がほとんど公になっておらず、実態が不明であったからである。また、実態を明らかにすることによって、短期大学で実施可能な連携事業のモデルを探るとともに、高校から短期大学への有用な接続教育プログラムの開発が可能となると思われる。高校一短大の連携事業によって高校生のキャリア形成に寄与するとともに、入学後の早期に目的意識や学習意欲を喚起し、短期大学2年間での充実した学びを実現することが期待できる。

* 著者紹介

- * 1 精華女子短期大学幼児保育学科教授
 - * 2 精華女子短期大学生活科学科食物栄養専攻講師
- 〒812-0886 福岡市博多区南八幡町2-12-1
tel: 092-591-6331
* 1 e-mail: tajiri@seika.ac.jp
* 2 e-mail: takebe@seika.ac.jp

2. 方法

(1) 実施期間

2010年3月～5月に実施した。また、8年以上の長期継続事例に対しては、その理由について同年8～9月に再調査を実施した。

(2) 対象校

日本私立短期大学協会会員校361校（2010年3月時点）を対象に実施した。

(3) 調査方法

郵送による質問紙法で依頼し、紙面による回答とホームページに直接回答するWebアンケートを併用した。Webアンケートは短期大学コンソーシアム九州のホームページ（<http://www.kyushu-ccc.jp/koutan-enq>）で行った。事業種および調査内容については、最終ページの表12、表13に示す。

3. 結果および考察

(1) 単純集計結果

表1の通り回収率は56.8%であった。

表1. 回収率

	短大数 (校)
アンケート送付校	361
回答校	205
回収率	56.8%

表2. 高一短大連携事業の実施について

	短大数	% ^{※2}
実施している ^{※1}	159	76.8
実施していない	26	12.6
検討中	8	3.9
その他	2	1
閉学・学生募集停止	12	5.8
計	207	100.0

※1 H22年4月より学生募集停止2校を含む
 ※2 割合は回答207校に対する%

表4. 全事業に対する協定の割合 (問4)

協定の有無	事業数	%
結んでいる	73	24.1
結んでいない	199	65.7
無回答	31	10.2
計	303	100.0

- 1) 連携事業を実施している短大は76.8%で検討中もあわせると8割の短大で実施されている。実施していない短大も12.6%はあるものの、多くの短大で連携事業が実施されている(表2)。
- 2) 事業種としては、「A. 出前授業・講座」、「B. 短大での体験授業・公開講座」が全事業に対して36.6%、31.7%を占め、一方、「短大生と高校生の交流」などは2.0%と少なかった。「出前授業や短大での体験授業」などの質的な充実と「高校生と短大生の交流事業」などの量的な拡充の検討が必要であることがわかった(表3)。
- 3) 65.7%の事業が協定を結んでいなかった(表4)。協定を結ぶ意義については、併設校との関連でまとめた「校種別の協定の有無と得られた成果」において検討した(後述(2). ③参照、表10)。
- 4) 全事業のうち、併設校との連携は30.7%、グループ内高校5.6%、その他の一般高校が43.6%であった(表5)。
- 5) 校種(併設校・一般校)ごとの協定の有無について表6に示す。併設校を対象とする連携事業での協定の有無

表3. 事業種別事業数

活動・事業	事業数	% ^{※2}
A. 出前授業や講座	111	36.6
B. 短大での体験授業、公開講座	96	31.7
C. 入学前の接続教育プログラム	45	14.9
D. 上記A～C以外の短大教員-高校生対象の事業	10	3.3
E. 短大生と高校生の交流会など	6	2.0
F. 高校教員による短大生のリメディアル教育など	2	0.7
G. 短大教員と高校教員の連絡会など	19	6.3
H. 短大教員と高校教員の相互の公開授業、国内留学など	0	0.0
I. 上記E～H以外の事業	14	4.6
計	303 ^{※1}	100.0

※1 複数回答を含む
 ※2 割合は回答303事業に対する%

表5. 全事業に対する併設校の割合 (問13)

連携校	事業数	%
併設する高校	93	30.7
グループ内高校	17	5.6
その他の高校	132	43.6
無回答	61	20.1
計	303	100.0

- の割合は、おおよそ1:2で、一般校を対象とする連携事業での協定の有無の割合もおおよそ1:2であることから大きな差はないと考えられる。しかし、事業別で見ると一般校は「B. 短大での体験授業」において、協定の有無の割合がおおよそ1:1.3となっており、協定を結んでいる事例の割合が高くなっている。
- 6) 教育課程との関連では、全事業に対しては46事業(15.2%)が科目等履修生制度や単位認定などを行っているが、A～Cの事業では1～2割の事業が入学後の教育課程での単位認定などを行っている。今後はさらに教育課程への位置づけなど、制度上の関連を検討することも必要ではないかと考えられる(表7)。
 - 7) 事業の実施目的は、進路への関心を高める、入学後の教育へのスムーズな移行をあげた事業が多いが、「A. 出前授業」や「B. 短大での体験授業」などでは生徒の進路への関心を高める目的が多く、「C. 入学前接続教育」では入学後のスムーズな移行を目的ととらえている事業が多い(表8)。

表6. 校種別協定の有無について (問4、問13)

	A. 出前授業や講座	B. 短大での体験授業	C. 入学前の接続教育	D. A～C以外の事業	E. 短大の学生交流	F. リメディアル教育等	G. 短大高教員の交流会	H. 短大高教員の相互の公開授業等	I. E～H以外の事業	計	%
併設校	協定あり	9	6	1	0	0	0	0	2	18	26.1
	協定なし	17	12	5	2	1	0	2	2	41	59.4
	無回答	4	5	1	0	0	0	0	0	10	14.5
グループ	協定あり	4	1	1	0	0	1	0	0	7	38.9
	協定なし	2	5	2	0	0	1	0	0	10	55.6
	無回答	1	0	0	0	0	0	0	0	1	5.6
一般	協定あり	13	18	2	3	0	0	0	3	39	31.2
	協定なし	39	23	11	2	1	5	0	1	82	65.6
	無回答	1	1	0	2	0	0	0	0	4	3.2
無回答	協定あり	2	1	1	0	0	0	0	0	4	7.8
	協定なし	15	6	9	0	0	2	0	2	35	68.6
	無回答	2	3	3	0	0	1	0	3	12	23.5
複数回答	2	15	9	1	4	1	7	0	1	40	
計	111	96	45	10	6	2	19	0	14	303	

表7. 教育課程との関連について (問8)

	A. 出前授業や講座	B. 短大での体験授業	C. 入学前の接続教育	D. A～C以外の事業	E. 短大の学生交流	F. リメディアル教育等	G. 短大高教員の交流会	H. 短大高教員の相互の公開授業等	I. E～H以外の事業	計	%
科目等履修生、単位認定等	21	12	10	1	0	0	0	0	2	46	15.2
関連なし	59	40	9	5	0	0	1	0	1	115	38.0
その他	15	12	14	2	0	0	0	0	0	43	14.2
無回答	14	17	3	1	2	1	11	0	10	59	19.5
複数回答	2	15	9	1	4	1	7	0	1	40	13.2
計	111	96	45	10	6	2	19	0	14	303	100.0

表8. 事業ごとの実施目的について (複数回答、問11)

	A. 出前授業や講座	B. 短大での体験授業	C. 入学前の接続教育	D. A～C以外の事業	E. 短大の学生交流	F. リメディアル教育等	G. 短大高教員の交流会	H. 短大高教員の相互の公開授業等	I. E～H以外の事業	計	%
1. 高校生の進路への関心を高め、選択の機会を広げる	95	57	7	9	1	0	4	0	5	178	46.6
2. 短大教育への関心を高め、入学後の学習へのスムーズな移行を図る	59	43	29	5	1	1	3	0	2	143	37.4
3. 学生・生徒の実態把握と双方の教員の教育指導力の向上を図る	22	11	2	3	0	0	5	0	4	47	12.3
4. その他	5	2	2	2	0	0	3	0	0	14	3.7
計	181	113	40	19	2	1	15	0	11	382	100.0

表11. ピックアップデータ

事業番号	事業名	実施主体	事業内容	実施時期	対象年齢	対象人数	教育内容との関連	力をいれている点	連携目的	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	連携対象
4-1	新入生オリエンテーション	短期大学	本校前編において、旧暦から新暦まで、目的共有する一連の行事を実施する。	有	6 h 2	20名	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
17-1	入学前教育	全学(キャリア教育センター、地域教育(有)等)	入学前教育(有)等	無	6 h 2 6 h 3	40-60人程度	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
17-3	入学前教育	全学(キャリア教育センター、地域教育(有)等)	入学前教育(有)等	無	6 h 3	高校 200名、AO入試 100名	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
20-3	高大連携授業・出前講座	全学(生涯学習センター)	高大連携授業・出前講座	無	6 h 3	入学予定者約100名	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
22-2	オリエンテーション(新入生)	全学(有)等	オリエンテーション(新入生)	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
23-1	子どもとの触れ合いを通して教育の重要性を知る(イイトロイ)	児童福祉センター	子どもとの触れ合いを通して教育の重要性を知る(イイトロイ)	無	6 h 3	児童福祉センター職員、児童	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
23-2	高大連携による総合型連携プログラムの実施	全学(有)等	高大連携による総合型連携プログラムの実施	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
31-1	高大連携による総合型連携プログラムの実施	全学(有)等	高大連携による総合型連携プログラムの実施	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
65-2	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
67-1	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
73-1	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
79-3	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
88-1	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
92-1	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
118-3	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
120-1	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
123-1	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
134-3	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
134-5	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
138-2	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他
146-5	入学前教育	全学(有)等	入学前教育	無	6 h 3	約300人	無し	無し	1 新入生の不安を解消し、高校生の生活環境に慣れさせること。2 新入生の生活環境に慣れさせること。	連携することで得られた成果をどう受け止めているか	その他

定的に受け止める割合が64.1%と、一般校では協定を結ぶことで成果を肯定的に受け止める割合が増えることから、一般校では「協定を結ぶこと」に意義があると言える。また、併設校が協定を結んだ場合、成果を肯定的に受け止める割合が低くなるのは、併設校であるがゆえに過度の期待を持ち、そのため思ったほど成果が上がらないと感ずるケースが多い可能性があるが、今後さらに検討する必要がある。

④ピックアップデータ「特色ある事業例」

表11に事業例を示す。県教育委員会との連携事業、戦略的連携支援事業「教育ネットワーク中国」の事業(124

表12. 活動・事業種

活動・事業	連携対象
(1) A 短大教員による高校での出前授業や講座	短大教員-高校生
B 短大教員による短大での体験授業、公開講座	〃
C 短期大学入学前の接続教育プログラムの実施	〃
D 上記A~C以外の活動・事業	〃
(2) E 交流会など	短大生-高校生
F 高校教員による短大生のリメディアル教育など	高校教員-短大生
G 連絡会など	短大教員-高校教員
H 相互の公開授業の機会・国内留学の機会など	〃
I 上記E~H以外の事業	〃

表13. 質問内容

設問番号	質問内容
1	実施している活動・事業名
2	実施学科名
3	具体的実施内容
4	協定の有無
5	実施時期及び期間・継続年数
6	実施対象学年
7	対象人数
8	教育課程との関連について(科目等履修制度との関連など)
9	一貫教育として力を入れている点、あるいは今後力を入れたい点
10	実施しているうえで、課題だと思うこと、改善する方向にある事項・問題点など
11	貴学が高校と連携する目的について
12	連携することで得られた成果をどう受け止めているかについて
13	連携校について

-1、128-1)、入学前に対面指導や学内に「入学前教育委員会」を設置している例(17-3)など、また、入学予定者への短大独自の「ドリル」(22-2)や「キャリアデザインシート」などによる学習(146-5)、高校生と短大生による「子どもとの触れ合いイベント」(24-1)を開催しているなど、連携事業の例や接続教育の例が多数あった。

4. まとめ

18歳人口の激減とユニバーサル化の段階を迎え、大学教育は大きな変革が求められている。特に短期大学は、学生だけでなく地域が求める教育機関としてのあり方を、的確にそして早期に探ることが存続の明暗を分けるといってもよい。そういう意味で本コンソーシアムが取り組んでいる種々の連携事業の成果に大きな期待が寄せられている。

高校-短期大学連携事業は従来から広報・学生募集の視点で、自校の紹介を大きな目的に行われてきた。このような事業が高校生のキャリア形成支援の一翼を担い進路選択の幅を広げるといふ、高校と短大双方の目的に沿う形での連携事業へと進化した。さらに入学予定者が短大教育に早期に触れることで、スムーズに短大教育へ移行できるという、接続教育の役割も担うこととなってきた。このように高校-短大連携事業はこれからの短期大学にとって必要な事業であることが再認識された。連携事業の活用により、高校から短期大学に至る接続教育や短期大学におけるキャリア教育が充実し、優秀な人材養成に貢献できると思われる。

大学での高校-短大連携事業はかなり活発に行われているが、今回の調査で、短期大学の高校-短大連携事業の実施率も高いことがわかった。しかし、回答がなかった短期大学の連携事業の実施状況は未確認であることから、高校-短大連携事業の重要性への啓発が必要である。一般校との連携では「協定を結ぶ」ことの意義が認められたことから、できるだけ密な関係を築くことの重要性が指摘できる。また、高校教員と短大教員との連絡会などの実施によって、双方の教育内容やキャリア教育の共通理解、あるいは生徒・学生の実態についての把握などを行うことが有効である。さらに、短大生と高校生の交流会などの実施率が低いことから、プログラム開発を行い、事業を推進することの必要性が指摘できる。短期大学教育への理解を深め、関

心を高めるといふ高校生へのキャリア形成支援として有効ではないかと思われる。

科目等履修生制度など、教育課程との連結では短大教育への関心を高めスムーズな移行を促進する可能性がある。連携事業の実施に当たってはそれぞれの短期大学の特色を高校生に伝えるような内容の工夫と、負担の少ない方法を他短大の事例から学ぶ必要がある。

連携事業の充実や長期にわたる継続を可能にするには、学長以下全学的な取り組みとして目的意識を一つにした協力体制が必要であることが言える。また、地域の大学・高等学校・中学校、あるいは教育委員会などとともに子ども達のキャリア形成の一翼を担う短期大学として、存在意義を明確に示す連携事業の取り組みが望まれる。このことにより、地域の人材養成に大きな貢献が期待できる。

謝 辞

本調査を実施するにあたり、全国の多数の私立短期大学にご協力いただき、貴重なご意見・ご回答をお寄せいただきましたことに深く感謝の意を表します。

本調査結果は、今回割愛いたしました部分のデータも含め、別途冊子にまとめております。若干の残部がございますので、希望の場合はご連絡いただきましようお願いいたします。

参 考 文 献

- 1) 平成21年度文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム選定2)「現代型社会人育成を俯瞰する入学前教育構築」
- 2) 大学と学生、独立行政法人日本学生支援機構編、9 第72号 2009年

【論文】

地域との協同による人材養成プログラムの開発に向けた短期大学における役割・機能に関する研究

A Study of Role and Function in Junior College for Development of the Training and Education Program with Cooperation of Community and Company

川邊 浩史*¹ 永田 誠*²

Hirofumi KAWABE Makoto NAGATA

要旨 本調査は短期大学及び短期大学生に対する地域からの評価と潜在的ニーズを把握することを目的とした。1938の事業所を対象として質問紙調査を配布した。回収率は12.8% (249件) だった。調査の結果、a) 短期大学と事業所との間には雇用に関する需要-供給の関係があることが分かった。b) 一般職は内部の研修に満足している傾向があり、専門職では外部研修への参加を勧めている。c) 四年制大学卒と比べて短期大学卒は人間関係を形成する能力に長けている。d) 一般職は短大の施設利用へのニーズが高く、反対に専門職では短大の人材や知識へのニーズが高い。e) 事業所の施設利用に関して、専門職は一般職に比べて寛容である。という5つの示唆が得られた。

キーワード 短期大学教育 社会貢献 地域と短期大学の協同

1. 研究の目的

本研究の目的は、これまでの短期大学教育の独自性に鑑み、地域に定着し地域を支える中堅人材としての短大卒業生の具体像とそこにおける短期大学に対する地域からの評価と潜在的ニーズを把握することにある。それにより、地域に貢献する短期大学教育の独自性を具体的なデータから明らかにし、今後の短期大学と地域・企業との新たな地(産)学連携の方策、特に、「地(産)学協同での人材養成プログラムの開発」の在り方を探ることを目指すものである。

本調査研究は、北部九州の9つの短期大学間で、これまで培ってきた緊密なネットワークのもとに形成した「短期

大学コンソーシアム九州」における「地域の人材育成に貢献する短期大学の役割と機能の強化のための戦略的短大連携事業」の一環として行ったものである¹⁾。その中の一つの柱である「地域に求められる人材養成プログラムの開発」についての具体的な事業内容としては、平成21年3月～5月に「短期大学コンソーシアム九州」に加盟した9短大の過去3年間における卒業生就職先事業所に対して「地域・企業との協同による人材養成プログラムの開発に向けた短期大学における役割・機能に関する調査」を実施した。本稿では、この調査結果に分析・考察を加えたものである。

本調査における着目点と独自性としては、以下の3点である。

まず、第1に、卒業生の就職先事業所に対する質問紙調査により、中堅人材としての短大卒業生の具体像とそこにおける短期大学に対する地域からの評価と潜在的ニーズを量的に把握する点である。詳細については後述するが、本

* 著者紹介

*¹ 西九州大学短期大学部准教授

*² 西九州大学短期大学部講師

〒850-0806 佐賀市神園3-18-15

tel: 0952-31-3003

e-mail: kawabeh@nisikyu-u.ac.jp

調査と同様の意図をもった調査研究としては、これまで「短期大学コンソーシアム九州」における前身であるCC研において取り組まれたステークホルダー調査がある²。調査の成果及び先進性については後述するものの、この調査研究は短大卒業生が就職・進学している企業・大学へのインタビュー調査であり、限られた調査対象者の意見をもとに考察されたものであるという点も有している。その点において、量的に短期大学卒業生の具体像と地域・事業所の短期大学に対する評価・ニーズを把握することの意義は決して小さくない。

第2に、本調査では、短期大学卒業生個人に対するニーズの把握ではなく、卒業生の総体的イメージを通じた具体像を把握しようとした点である。今回の調査においては、量的調査であり、調査対象となる事業においては異なる短期大学より複数の卒業生を受け入れている事業所も少なくない。そのため、本調査においては個別の卒業生に対する評価ではなく、これまでの短期大学教育全体の評価を総体的に把握することに着目し、特にその対抗軸として4年制大学卒業生を設定し、知識技能及び業務遂行において期待される具体的能力等について比較検討を行った。これにより、地域コミュニティの高等教育機関として飛躍する基礎条件を明らかにし、戦略的パートナーシップに基づいた互恵関係による次なる短期大学教育を構想することにつながるものであろう。

第3に、卒業生を介さない短期大学と地域・事業所との関係についての評価も視野に入れ分析を試みた点である。これまで、地域及び事業所は短期大学教育のステークホルダーとして位置づけられてはいたものの、内実は学生を介した関係への着目を中心であったといつてよい。しかし、短期大学の地域コミュニティにおける高等教育機関としての発展には、学生教育以外の地学連携の在り方も含めた検討も求められる。つまり、卒業生の就職事業所だけでなく、短期大学が存在する地域における事業所及び団体・住民、そして自治体などのすべてがその範疇にあるべきであり、それらを対象とした協同関係の構築と存在意義の確立が構想されるべきである。したがって、本調査では、事業所における職員研修の頻度・内容や事業所職員・短期大学教員の派遣の必要性、そして事業所・短期大学双方の施設利用についてなどについても明らかにすることを試みた。そこには、卒業生の就職先事業所以外の事業所においても、短

期大学が貢献する、または事業所と協働する可能性を秘めたものであると言えよう。

2. これまでのステークホルダー調査にみる短期大学生に求められる資質・能力

短期大学教育の成果を考える際、「何をもって教育の成果とするのか」「成果をどのように把握、点検、評価するのか」という大きな問いがある。これまで行われてきた代表的な評価法の一つに「学生による授業評価」があるが、これは学生自身が授業を評価するものであり、授業の評価で短期大学生への教育成果が測れるものではない。そこで、教育の成果は卒業生のキャリアに体现されるという考えに基づき、CC研において取り組まれたのが「短期大学ステークホルダー調査³」である。

一般的には、ステークホルダー (stakeholder) とは、企業の「利害関係者」のことを指し、社会や消費者や株主はもちろんであるが、近年はCSRの関係から地域住民・地域社会をまでも含めていう場合が多い。つまり、この調査における「短期大学ステークホルダー」とは、短期大学の利害や関心をもつ関係者のことを指している。したがって、調査では、卒業生を受け入れる就職先の企業や事務所、施設、進学先である四年制大学等の採用や指導担当者を調査対象に設定し、彼らに対するインタビュー調査法を開発、実施している。

調査項目は、①採用に当たって重視するポイントについて、②職場で必要とされる知識技能能力について、③本学の卒業生の知識技能能力、職業人社会人としての評価、④本学の教育カリキュラムに望むこと、⑤短大卒の早期退職、結婚退職、今後の雇用計画、の5項目である。調査結果からは短期大学教育に対する理解と期待、教育改善への示唆が読みとれる。

まず、どの質問項目をとっても共通して職場が必要としている特性は「人間性」であり、「コミュニケーション能力」であった。採用に当たって重視しているポイントは、「人間性」として括ることが可能な特性であり、成熟した人格人間性を求められている。職場に必要な能力についても、「人間性」「コミュニケーション能力」が強調されており、それに加えて専門知識や技能が求められるという順である。仕事をこなす能力というよりも仕事をこなしていくために良好な人間関係を保つ能力が重視されていることが

理解できる。ただし、「人間性」や「コミュニケーション能力」の具体的な内容が不明確であり、その職場が強調する「人間性」や「コミュニケーション能力」が何かを理解しておく必要がある。

次に、卒業生の肯定的な評価の中に、短期大学の教育理念が卒業生の肯定的評価として現れていることから、短期大学への教育理念の理解が読みとれる。具体的には、「誠実さ」であった。短期大学の教育理念が卒業生の資質としてステークホルダーに理解されることは、卒業生の大多数が地元就職する傾向をもち、強い地域密着性がある短期大学において、価値を高めることに繋がると考えられる。教育理念を具体的実践につなげ、教育効果として発揮、もしくは企業に周知できていることについて、今後の発展の可能性があるのでないだろうか。

3. 調査の概要

3.1 調査内容

本調査は「地域（事業所）と短期大学生」、「地域（事業所）と短期大学」という2つの軸に基づき構成された探索的な質問紙調査である。その構成要素は以下に示すように5つに分けられる。それぞれの構成要素に対応した設問には事業所が短期大学（短期大学生）をどのように捉えているか、また両者に関わる今後の課題あるいは事業所からの要望を問う内容が含まれている。

3.2 質問紙の構成

- a) 事業所と短期大学生（実習生）
 - ・事業所の実習（インターンシップ）の受け入れ状況とその内容
 - ・事業所の実習（インターンシップ）受け入れについての考え
- b) 事業所における職員研修
 - ・事業所における職員研修の現状と課題
- c) 事業所における短期大学生像

- ・事業所の短期大学卒業生に対する評価（四年制大学卒業生との比較から）
- d) 事業所及び短期大学の地域貢献活動
 - ・事業所が行っている地域貢献活動
 - ・事業所と短期大学が連携した地域貢献活動
 - ・事業所と短期大学との連携
- e) 事業所から短期大学（生）へ提供できること
 - ・事業所が考える短期大学生教育

3.3 調査方法

コンソーシアムを組む連携9短期大学の過去3年間（平成19年度～平成21年度）の就職先データを基に、短期大学卒業生就業先リストを作成した。その中から、地域的な偏りが生じないように、また短大間で重複する就職先について精査し、1938件の事業所を、調査対象として選定した。平成22年3月17日に調査対象に郵送にて発送し、回答の督促依頼を5月17日に未回収の事業所宛に発送した。回収期限は6月末日とした。

質問紙の回収率は12.8%（249件回収）であった。

4. 調査結果の考察

今回は就業職種という軸を中心に「短期大学卒業生が専門職として就業している職種」と「短期大学卒業生が一般職として就業している職種」に分けて設問ごとに分析した。なお、これ以降は前者を「専門職」、後者を「一般職」と表記する。

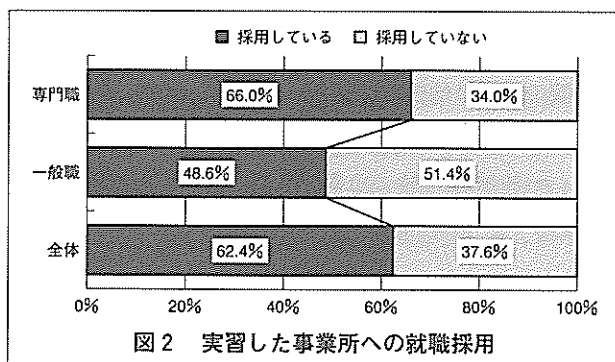
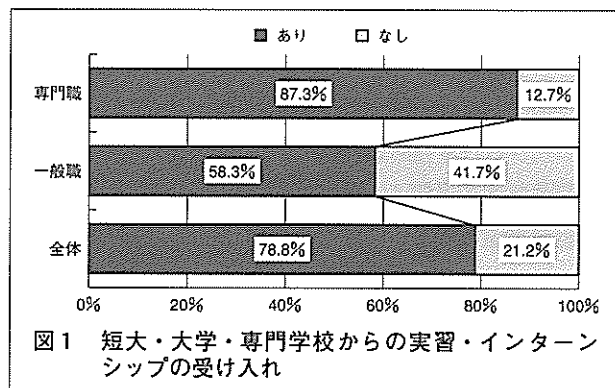
今回の調査における専門職と一般職の割合を表1に示す。専門職の内訳は幼児教育関係（幼稚園・保育所等）132件、児童福祉・障害者福祉14件、高齢者福祉31件であった。一方、一般職は一般（営業、事務）51件、その他21件であった。

表1 回答のあった業種別の事業所数

職種	専門職			一般職	
	幼児教育関係 (幼稚園・保育所等)	児童福祉・ 障害者福祉関係	高齢者 福祉関係	一般職 (営業・事務等)	その他
事業所数	132	14	31	51	21
%	53.0%	5.6%	12.4%	20.5%	8.4%

4.1 事業所と短期大学生（実習生）

(1) 事業所の実習（インターンシップ）の受け入れ状況
 短大・大学・専門学校からの実習及びインターンシップの受け入れ状況について回答を求めたところ、多くの事業所で実習あるいはインターンシップを受け入れていることが分かった（図1）。また、実習に受け入れた学生の積極的な就職採用について、専門職では「採用している」が66.0%、「採用していない」が34.0%、一般職では「採用している」が48.6%、「採用していない」が51.4%であった。専門職が一般職に比べ、実習に受け入れた学生を積極的に就職採用している割合が高い傾向にあった（図2）。このことから専門職は一般職に比べて、実習を“養成・教育”という意味合いだけでなく、“よりよい人材確保の機会”として捉えていることが分かる。つまり、事業所と養成校との間には雇用に関する需要-供給の関係があるということが推測できる。



(2) 事業所の実習（インターンシップ）受け入れ
 実習（インターンシップ）の受け入れについて事業所がどのように考えているかを把握するため、AとBという対語を各設問の両端に配置し、「Aに近い」「ややAに近い」「ややBに近い」「Bに近い」と4件法のように選択

肢を設け、回答してもらった。

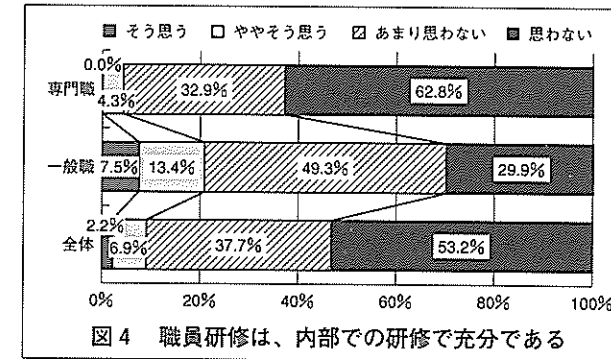
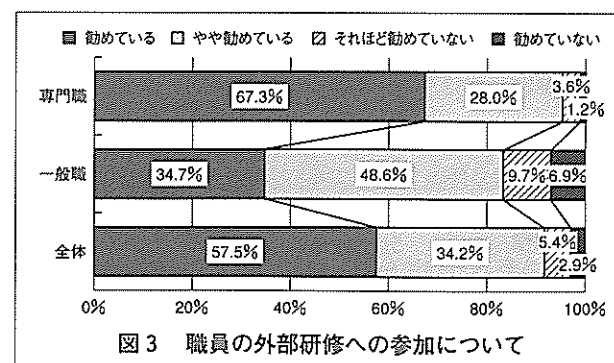
専門職では、実習の受け入れに対する姿勢は積極的であり、実習は学生の専門性・社会性の向上のためのよい機会と認識されている。ところが、一般職では、専門職と同じように専門性・社会性の向上に有効であると回答しているにもかかわらず、その約4割が実習の受け入れに消極的と答えている。また、実習を受け入れる際の業務上の負担について、専門職において51.5%の事業所が負担と感じているが、一般職では67.6%の事業所が負担であると答えている。このことから一般職では実習に対する抵抗感はそれほどないが、実習に対して不慣れな点が多く、消極的になってしまうということが窺える。

ところが、実習中の事故の責任が事業所にあるか、養成校にあるのかという問いに関して、一般職では“責任の所在が事業所にある”と回答している割合が68.6%と多くなっている。これは一般職において専門職とは異なる一般企業としてのリスクマネジメントが確立していることが考えられる。一般職では、事業所独自の管理体制の下で実習を受け入れていることが推測される。

いずれにしても、実習を受け入れる際の事業所の負担感には就業職種に関わらず大きく、今後は、事業所側と短期大学側との協同マニュアルのようなものを構築することが実習受け入れに対する負担感や抵抗感を減らす一つのきっかけになるのではなかろうか。

4.2 事業所における職員研修

職員研修を行っている事業所は全体の91%となっているが、一般職においては19.7%の事業所で研修を行っていない。研修の必要性に関しては概ねほとんどの事業所で必要であると感じている。研修時間の確保の困難さ、研修の成果への評価においては専門職、一般職ともにそれほど



捉え方に違いはない。ところが外部の研修への参加については、一般職は専門職と比べて、積極的な参加を勧めておらず（図3）、事業所内部での研修で満足している事業所が20.9%となっている（図4）。

おそらく、一般職の中には事業所独自の経営方針や経済状況などにより、事業所内部の研修で十分な職員教育が行われていると捉えている事業所があると予想される。それ

に対して専門職では、内部の研修だけでは満たされず、外部の研修へ参加することを勧めている事業所が多くを占めており、一般職との職員研修に対する考え方の違いが示される結果となった。

4.3 事業所における短期大学生像

事業所が短期大学卒業生（以下、「短大卒」と表記する）に対して技能および業務遂行において期待される具体的な能力等を把握するため、四年制大学卒業生（以下、「四大卒」と表記する）との比較を行った。各設問について、短大卒と四大卒を比較し、「短大卒に当てはまる」、「やや短大卒に当てはまる」、「やや四大卒に当てはまる」、「四大卒に当てはまる」のいずれかを選択してもらった（表2）。

この設問では、事業所に求められる技能や業務遂行能力などについて四大卒との比較をすることにより、短大卒に対する評価を明確にしようとした。

表2 事業所における短期大学生像。

設問	職種	短大卒に当てはまる	やや短大卒に当てはまる	やや四大卒に当てはまる	四大卒に当てはまる
		(1) 採用時において即戦力となる	専門職 15.4%	35.8%	39.8%
	一般職 7.4%	29.6%	61.1%	1.9%	
(2) 自らの業務の課題について認識できる	専門職 6.6%	25.6%	57.9%	9.9%	
	一般職 5.2%	13.8%	72.4%	8.6%	
(3) 先輩の業務の様子や姿勢をみて積極的に学ぼうとする	専門職 18.2%	52.1%	22.3%	7.4%	
	一般職 7.0%	54.4%	35.1%	3.5%	
(4) 業務上の課題について他の職員に相談できる	専門職 13.3%	54.2%	27.5%	5.0%	
	一般職 9.1%	47.3%	40.0%	3.6%	
(5) 業務上の課題について自ら解決できる	専門職 5.0%	21.7%	62.5%	10.8%	
	一般職 3.6%	5.4%	83.9%	7.1%	
(6) 後輩の成長や他の職員の困難に対して積極的に手助けできる	専門職 8.6%	34.5%	50.0%	6.9%	
	一般職 3.6%	21.8%	70.9%	3.6%	
(7) 社会的事柄や多分野に対する知識に長けている	専門職 4.0%	15.1%	59.5%	21.4%	
	一般職 3.6%	7.1%	78.6%	10.7%	
(8) 専門的知識や技能の修得に積極的である	専門職 10.0%	31.7%	45.8%	12.5%	
	一般職 9.6%	32.7%	48.1%	9.6%	
(9) チームを組んで段取りよく業務を遂行できる	専門職 13.8%	46.6%	32.8%	6.9%	
	一般職 5.8%	15.4%	69.2%	9.6%	
(10) 自らのライフプランが明確で着実に努力ができる	専門職 8.7%	21.7%	57.4%	12.2%	
	一般職 7.7%	23.1%	59.6%	9.6%	

10の設問のうち、就業職種に関わらず、多くは四大卒に対する評価が高くなっているが、注目すべきは先輩職員の様子から学ぼうとする姿勢、先輩や同僚へ相談する意欲に関して、短大卒は四大卒と比べて高い評価を得ている。これは社会人基礎力の高さを短大卒が獲得していることを示している。

先輩職員から学ぼうとする姿勢、先輩や同僚へ相談する意欲は、平成23年度より導入されるキャリア教育でねらいとしている人間関係形成能力と同一のものである。

キャリア教育における職業観・勤労観は4領域・8能力で構成されており、その領域の1つに人間関係形成能力が掲げられているが、以前、「短期大学ステークホルダー調査」の中でもコミュニケーション能力の重要性が示されており、本調査では、四大卒との比較をすることでより鮮明に短大卒が人間関係形成能力(自他の理解能力、コミュニケーション能力)で有利であることが示されたといえよう。

そしてこのことは、短期大学が2年間という短い就学期間であるものの、資格取得などにより就業へ向けて様々な実践的・社会的経験を積むことが、彼らの人間的成長へともつながっているという教育的成果の証左であろう。

また、チームを組んで業務を遂行する力について一般職と専門職では異なった評価になっている。この設問にはチーム力と業務遂行の合理性の2つの要素が含まれており、

一般職では四大卒の評価が高く、専門職の場合には短大卒が高い評価を得ている。このことは、一般職の業務内容が個人の能力を生かすことが多く、それに比べて専門職はチームアプローチを必要とする業務が多いことが結果につながったと推測される。

4.4 事業所及び短期大学の地域貢献活動

事業所の短期大学との連携の考え方やニーズについて把握するため、AとBという対語を各設問の両端に配置し、「Aに近い」「ややAに近い」「ややBに近い」「Bに近い」と4件法のように選択肢を設け、回答してもらった。

Q12-1を除いた、Q12-2~Q12-12の11項目のうち、Aに近い=4点、ややAに近い=3点、ややBに近い=2点、Bに近い=1点とし、因子分析を用いて、主因子法、バリマックス回転による探索的因子分析を行い、事業所が短大に求める因子について解析を行った。因子分析の結果、スクリープロットから9因子が抽出された。因子数の決定は、固有値>1の次元とし、2因子解とした。抽出された因子の特性の結果、因子1は、教育施設や実習施設などの利用を求める項目で因子負荷量が高かったことから「場所・施設の提供(ハード面)」とつけた。また、因子2は、短大生の行事への参加や短大教員の知識や情報の提供を求める項目で因子負荷量が高かったことから、「人材・知識の提供(ソフト面)」とつけた(表3)。

表3 事業所が短期大学に求める因子の抽出

設問 No	設問内容	因子1： 場所、施設の提供 (ハード面)	因子2： 人材、知識の提供 (ソフト面)
Q12__2	短大生の積極的参加	0.13	0.63
Q12__3	短大教員の派遣	0.19	0.79
Q12__4	短大での研修会	0.27	0.74
Q12__5	短大教員への相談(人間関係)	0.29	0.72
Q12__6	短大教員への相談(専門的知識)	0.21	0.86
Q12__7	全国的な情報の提供	0.26	0.77
Q12__8	図書館の利用	0.73	0.38
Q12__9	スポーツ施設の利用	0.85	0.19
Q12__10	情報施設の利用	0.85	0.27
Q12__11	教育施設の利用	0.89	0.22
Q12__12	実習施設の利用	0.87	0.23

次に、抽出された因子と就業職種との間に関連があるかを検討するため、就業職種別に因子得点係数より求められた因子得点の平均値を算出した。場所、施設の提供の因子得点の平均値は、専門職で-0.12であり負の方向に、一般職で0.22であり正の方向であった。一方、人材、知識の提供の因子得点の平均値は、専門職で0.29と正の方向であり、一般職では-0.56であり負の方向であった。また、就業職種間に因子得点の平均値に有意な差があるかをt-testを行った。その結果、場所・施設の提供(ハード面)は、一般職が専門職に比べ有意に高く(p=0.006)、人材・知識の提供(ソフト面)は、専門職が一般職に比べ有意に高かった(p<0.0001)。

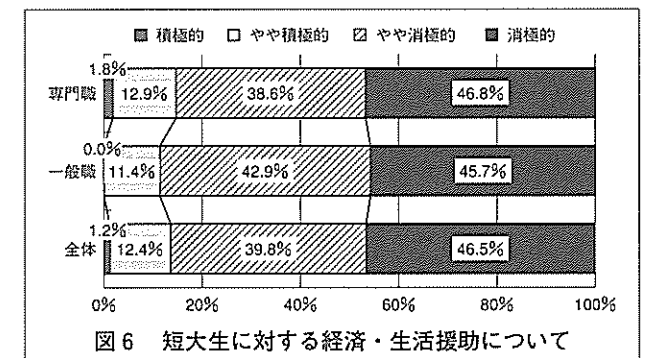
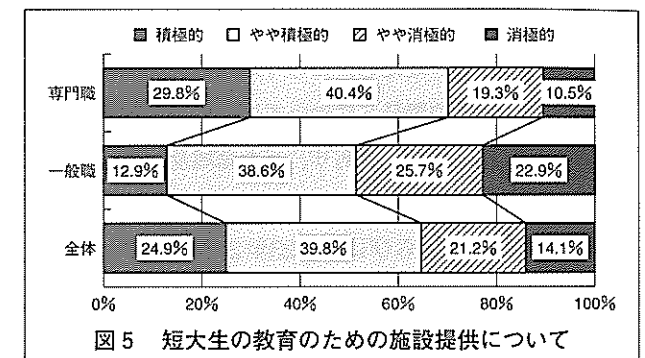
この結果から、本研究の対象となった事業所において、一般職は場所・施設の提供(ハード面)の提供を、専門職は人材・知識の提供ソフト面の提供を短大に求めていることが示唆される。専門職においては業務に関する環境が十分に整っていることから施設利用に対する関心はあまり高くないのではないだろうか。反対に一般職においては短期大学の施設利用に関心が向けられているのは、事業所内の施設の提供に関しては消極的であり、短期大学の施設を利用することで事業所の負担を軽減し、研修などにおいて利便性を図ろうとしているようにも捉えることができる。

4.5 事業所から短期大学(生)へ提供できること

短期大学生に対する教育について事業所がどのように考えているかを把握するため、AとBという対語を各設問の両端に配置し、「Aに近い」「ややAに近い」「ややBに近い」「Bに近い」と4件法のように選択肢を設け、回答してもらった。

専門職では教育のための事業所の施設利用を勤めている割合が多いのに対して、一般職では半数に留まっている(図5)。これは一般職が管理運営上、簡単に学生が施設を利用することが難しい一方、専門職は一般職に比べ、もともと実習等の受け入れ経験があるため、事業所の施設を教育のために活用・協力した経験が豊富であり、そのため受け入れについて寛容であると考えられる。

また、特に気になるのが、短大生への経済的援助に関する回答である。多くの事業所は昨今の経済事情からか援助に関して消極的である。ところが、全体的に約10%の事業所は経済的援助に対して積極的であると答えている(図



6)。このことは少数意見とはいえ、人材養成への強い関心の現れと考えることができる。

5. おわりに

短期大学と事業所、短期大学生と事業所という2つの軸を中心として短期大学へのニーズ、短期大学生へのニーズ、そして地域貢献に対する事業所と短期大学の連携について模索してきた。今回の調査で事業所が求める短期大学生像、事業所が求める短期大学の在り方の一部が明らかとなった。

本調査研究の今後の展開としては、大きく2点である。第1に、より精緻な分析による事業所の短期大学及び短期大学卒業生像と今後の期待を明らかにしていくという点である。本稿においては、調査の全体概要をまず明らかにするという視点に鑑み、就業職種別のクロスにて考察を行った。しかし、本調査結果は調査対象の事業所規模や自由記述による質的分析を加えることにより、短期大学教育の充実の在り方や地域貢献(事業所との協働)について具体的な取り組みを言及することができる。と考える。

第2に、地域人材養成に向けた教育プログラムの具体的な検討についてである。冒頭でも述べたように、本調査研究は、地域に貢献する短期大学教育の独自性を具体的なデータから明らかにし、今後の短期大学と地域・企業との新たな地(産)学連携の方策、特に、「地(産)学協働で

の人材育成プログラムの開発」の在り方を探ることに主眼を置くものである。ただし、この「地（産）学協同での人材育成プログラムの開発」については、短期大学各校の教育活動全体に関わる問題であり、また地域及び事業所との念密な検討なしには実現しえないものである。したがって、本調査研究の結果ならびに平成23年2月に開催した「地域人材養成フォーラム」の成果を議論の材料として、本コンソーシアムの連携校と連携し、具体的な教育プログラムの検討のための体制づくりを、今後の具体的な教育的営為の実現に向けた第一歩として進めていきたい。

参考文献

財団法人短期大学基準協会調査研究委員会「『短期大学ステークホルダー調査』調査研究報告書』2007年3月

*本稿は、川邊浩史・永田誠・南里妃名子・宮本知加子「地域との協同による人材養成プログラムの開発に向けた短期大学における役割・機能に関する研究（その1）」『西九州大学短期大学部紀要』第41号、2010年、平成23年3月（発刊予定）をもとに加筆修正を行った。

¹ 当事業は、平成21年度～23年度に文部科学省大学教育充実のための戦略的連携（総合的連携型）採択され、代表校である佐賀女子短期大学の他、香蘭女子短期大学、精華女子短期大学、東海大学福岡短期大学、福岡工業大学短期大学部、福岡女子短期大学、西九州大学短期大学部、長崎女子短期大学、長崎短期大学の福岡県、佐賀県、長崎県の9短大の共同事業として実施するものであり、本稿で取り上げた調査も、その一環として実施したものである。

² 財団法人短期大学基準協会調査研究委員会「『短期大学ステークホルダー調査』調査研究報告書』2007年3月。

³ 同上。

⁴ 国立教育政策研究所「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」2002年。

<http://www.nier.go.jp/centerhp/sinro/sinro.htm>

⁵ 前掲、3。

【論文】

在学生調査におけるライフプランニング総合学科の学生の特徴について

Features of the Students in the Department of Comprehensive Studies for Life Planning: Evidence from Research of Students

中濱雄一郎*

Yuichiro NAKAHAMA

要旨 筆者が所属している香蘭女子短期大学は、短期大学コンソーシアム九州の推進事業の中で、主に「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援（E部会）」に関する事業を担当している。本稿は、平成22年7月9日に長崎国際大学で行われた「第28回短期大学の将来構想に関する研究会」において筆者が報告した内容を基に、上記の事業を推進していく中で獲得した知見に関する一報告である。

具体的には、今後卒業生に対してどのような支援が必要なのかについて、在学時調査を精査することを通して明らかとなった内容を記載している。また、限られた教育資源の有効活用を上記コンソーシアムに参加する連携校間で行うには何が必要かについても考察を行っている。

キーワード リカレント教育、卒業生へのキャリア支援、在学生調査、地域総合科学科、戦略的パートナーシップ

1. はじめに

筆者が所属している香蘭女子短期大学は、短期大学コンソーシアム九州（JCKK）の推進事業の中で、主に「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援（E部会）」に関する事業を担当している。

この事業の到達目標は、「地域を支える人材として地域で働く卒業生のために、就職やリカレント教育情報に関するネットワーク事業をコンソーシアムホームページ上に立ち上げ、短期大学卒業生のキャリアアップを支援する」ことである。

さて、この事業を進める中で、いくつかの問題が浮上ってきた。まず、短期大学の卒業生たちの現状を十分把握で

きていないことがあげられる。これは各短期大学の取り組みにも違いがあるし、同一短大の中でも学科間のばらつきがあるので一概には言えないのだが、組織的に継続的に卒業生調査に取り組んでいる短大はそれほど多くはないのが現状だ。

次に、リカレント教育の取り組みも各短大間で違いが存在している。また、保育士や栄養士の養成といったかなり専門性の高い教育を行っている学科のリカレント教育と筆者が所属しているような地域総合科学科とではリカレント教育の内容も幅もかなり違いがある。

つまり、具体的な中身の検討に入ろうとすると、様々な要因が混在し、多くの調整が必要で、単純に卒業生にアンケート調査を行い、ニーズを拾い上げ、各短大で連携してリカレント教育や就職斡旋事業を行えばいいということではないと考えるようになった。

そこで本稿ではまず、短期大学に入学してきた学生の特

*著者紹介
香蘭女子短期大学ライフプランニング総合学科准教授
〒811-1311 福岡市南区横手1-2-1
tel: 092-581-1538
e-mail: nakahama@koran.ac.jp

徴および就職支援のニーズがどこにあるのかについて、短期大学コンソーシアム九州の中の研究センターが中心として行っている「短期大学教育と地域ステークホルダーに関する総合的研究」で調査を行った、「短大（学生生活）に関する振り返り調査（以下「在学時調査（2009）」）」のデータから探ることから始める。

また、この抽出作業は、短期大学の学生の全体像を描くことを目的とするのではなく、筆者が所属するライフプランニング総合学科の学生に焦点を当てた報告をしたいと考えている。その理由は第2節で行う予定だが、ここでは、ライフプランニング総合学科が地域総合科学科であり、在学時から地域のニーズに合った柔軟なカリキュラム編成が可能な学科であるからという点を述べておくに留めておくことにする。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では、「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」事業について考察するにあたり、地域総合科学科であるライフプランニング総合学科の学生の分析が有効であると判断した理由を述べる。

第3節では、上記の調査によって明らかとなったライフプランニング総合学科の学生の特徴と入学後半年経過した時点での卒業後の進路の希望について焦点を絞って報告を行う。

続く第4節では、日本私立短期大学協会が発行した「短期大学教育の再構築を目指して—新時代の短期大学の役割と機能—」の第2章を中心に要点整理をし、卒業生に対してどのようなリカレント教育やキャリア支援を行えば良いのかについて、これまでの論考を踏まえながら私見を述べてみたいと思う。第5節は本稿のまとめである。

2. サンプル選択の理由

2.1 ライフプランニング総合学科について

ライフプランニング総合学科は、2003年に地域総合科学科として香蘭女子短期大学に設置された新しい学科である。

文部科学省（HP上に記載）によると地域総合科学科とは、「実際の個々の学科の名称ではなく、従来の学科のように内容を特定分野に限定せず、地域の多様なニーズに柔軟に応じることを目的とした新しいタイプの学科の総称」であり、柔軟なカリキュラム編成にその特徴が見出せる。

本学のライフプランニング総合学科は他の地域総合科学

科の先達として設置され、平成22年度現在、フィールド&ユニット制の下、32ユニット158科目を開講（必修、教養、資格支援を除く）している。

2.2 選択の理由

筆者が、「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」事業の今後の展開を考察する際に、所属学科であるライフプランニング総合学科の学生の分析が有効であろうと考えた理由は、学生の日頃の様子を知悉しているという点も当然あるのだが、その他の理由として大きく二つ挙げられる。

第一の理由は、第3節で使用するデータの基となった「在学時調査（2009）」は、今後JCKK研究センターが行う「卒業時調査（2010）」、「卒業後調査（2011）」と統合され、パネルデータを作成する予定である。この調査が終了すれば、入学時から、2年目、そして卒業後1年目のデータを基に時系列の変化を個々の学生レベルで読み取ることが可能となる。

本学科の学生も同調査に参加しているわけであるが、入学時からどのような職業意識・卒業後のイメージを持っていたかは今後のサポートにも大きく影響するだろうし、そもそもどのような学生が本学科に入学し、何を期待しているのかについてしっかりと把握していくことは、学生支援の観点から非常に重要である。

また、専門学科に所属する学生と何が違うのかについて明らかにすることは、連携校で展開する卒業後のサポートにも大きく影響すると考えたからである。

第二の理由は、地域総合科学科として既に多様な科目を持ち、日々学生に提供しており、もし上記のリカレント教育や卒業生のキャリア支援に転用できるような科目があるのであれば検討してよいのではないかと考えたからである。

別の言い方をすると、先の調査で明らかとなった結果と各短期大学が提供している公開講座やリカレント教育の中身を精査し、連携校とのパートナーシップを組む際、地域総合科学科の特徴が生かせるのではないかと考えたのである。

つまり、本学のライフプランニング総合学科の学生をサンプルとして取り上げることで、卒業生に対するキャリア支援やリカレント教育、更には新しい講座や事業の開発に役立てられるのではないかと考えたわけである。

3. データおよび分析結果

在学時調査（2009）の質問項目は多岐に渡り、非常に多くの示唆を含む。様々な観点から興味深い知見を数多く見出せるが、紙幅の関係もあるので、本節では、本稿の趣旨に従い、ライフプランニング総合学科の学生の入学時の特徴と将来の考えに関する項目に着目し、概略を述べるにとどめたい。

3.1 入学前の特徴

第4節の中でも触れるとおり、21世紀は「知識基盤社会」だという一応のコンセンサスは教育界で得られているようである。¹

そうすると、この社会で生活を営むあるいは仕事を行う人にとって重要な能力は、「学習能力」ではないだろうか。そうだとすれば、大学入学前にどれだけの学習習慣が身に付いたかというのは、授業運営をする上で、また学生指導を行う上で非常に大きな前提条件になると考えられる。

	香蘭全体	FA総合	食栄養	保育	LP総合	短大全体	
1週間の合計勉強時間(概数)	全くしなかった	27.13	20.56	17.07	28.00	32.95	19.65
	0～2時間	37.00	36.45	36.59	38.40	36.42	37.45
	2～6時間未満	21.52	25.23	24.39	20.00	19.65	24.27
	6～11時間未満	7.85	10.28	12.20	8.00	5.20	9.87
	11～21時間未満	4.93	5.61	7.32	4.80	4.05	5.51
	21～31時間未満	1.35	1.87	0.00	0.80	1.73	2.08
	31時間以上	0.22	0.00	2.44	0.00	0.00	1.16
合計		100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

表1²

まず、表1をご覧いただきたい。表1は、在学時調査（2009）の中の入学前に関する質問で、「高校在籍時代の授業期間中、授業以外で勉強に費やした1週間の合計時間はどのくらいでしたか」という問いに対する一覧である。

一番右端の列に今回の調査に協力して頂いた短大全体の値を載せている。まず目に留まるのが、ライフプランニング総合学科の学生の中で、高校時代に授業外で勉強した時間が皆無の学生が3割を超えているという事実である。全

国平均が2割弱なので、かなり高いと言えるのではないだろうか。

また、0～2時間という層はほぼ全国平均とほぼ変わらないが、それ以降の数は一貫して全国平均を下回っている。

このことは、高校時代までに学習習慣があまり身につけていない学生が多く入学して来ていると言えるだろう。

	香蘭全体	FA総合	食栄養	保育	LP総合	短大全体	
高校の勉強はおもしろかった	全くそう思わなかった	7.59	7.41	2.44	4.80	10.92	7.50
	2	13.39	11.11	12.20	11.20	16.67	14.25
	3	37.28	28.70	36.59	42.40	39.08	40.09
	4	27.68	26.85	24.39	31.20	26.44	28.38
	非常にそう思った	14.06	25.93	24.39	10.40	6.90	9.77
合計		100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00

表2

次に表2をご覧いただきたい。この表2は、「高校在籍時代の学習内容について」、「高校の勉強はおもしろかった」かどうかを尋ねた質問に対する答えである。

ライフプランニング総合学科の学生は、全く思わなかったという層が一割と、短大全体や香蘭女子短期大学の他の学科と比較しても高校の勉強が面白かったと評価していない層が多いことが分かる。また、非常に楽しかったという層は逆にかなり薄いことも確認できる。

つまり、この高校時代の授業外の学習時間と勉強が楽しかったかどうかという指標によって、かなり学習意欲が低い学生が数多く含まれていることが分かる。

3.2 将来の考え

前項で確認したのは高校時代の話であるが、今度は入学後半年が経過した時点で、自分の将来についてどのように考えているかについての質問項目を見てみることにしよう。

表3は、「あなたは将来についてどのように考えていますか」という質問に対する学生の答えである。この項目は特に、在学時点での学生支援や卒業後の支援に大きくかわると思われるので注目すべき指標だと考えている。

表3をご覧いただくとうすぐにご理解いただける通りに、ライフプランニング総合学科の学生は、卒業後正規社員として就職を考える学生の比率が、短大全体や同じ大学の他学科と比較してもかなり高い。この点は特筆すべき特徴で

		香蘭全体	FA 総合	食栄	保育	LP 総合	短大全体
短大卒業後の希望進路	正規の職員として就職	88.37	79.63	88.10	88.80	93.60	85.75
	自営業・家業	1.79	3.70	2.38	1.60	0.58	0.52
	契約・派遣などの社員として就職	2.01	3.70	4.76	0.00	1.74	1.29
	パートタイム・臨時の仕事	0.89	1.85	0.00	1.60	0.00	0.90
	短大専攻科に進学	1.12	1.85	0.00	2.40	0.00	1.71
	四年制大学に編入・進学	2.91	2.78	4.76	2.40	2.91	6.56
	専門学校に進学	1.12	2.78	0.00	0.00	1.16	1.34
その他	1.79	3.70	0.00	3.20	0.00	1.94	
合計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	

表 3

		香蘭全体	FA 総合	食栄	保育	LP 総合	短大全体
人生で重視していること	仕事での成功	6.76	10.28	4.76	6.50	5.23	7.75
	豊かな経済力	8.33	3.74	9.52	5.69	12.79	8.21
	家族や身近な人との生活	12.39	13.08	11.90	11.38	12.79	13.65
	社会や他人への奉仕	0.45	0.00	2.38	0.00	0.58	1.05
	社会的な地位	0.90	0.93	0.00	0.00	1.74	0.44
	趣味やスポーツ活動	4.28	4.67	7.14	6.50	1.74	5.16
	楽しい毎日の生活	56.98	51.21	54.76	56.91	59.30	53.35
	健康であること	7.88	8.41	9.52	11.38	4.65	8.44
その他	2.03	4.67	0.00	1.63	1.16	1.95	
合計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	

表 4

あると考えている。

また筆者にとって意外だったのは、4年制大学や専門学校への進学はそれほど高くはない点である。例年進学・編入学を希望する学生が1割程度存在しているのだが、今回の調査では4大、専門学校を足しても4%程度と低い数値が出た。

次に表4をご覧いただきたい。こちらは、「あなたが、いま人生において最も重視していることは何ですか」という項目に対する答えである。

ライフプランニング総合学科の学生が短期大学全体や同じ短大の他学科と比べて突出して何かが高いという訳ではないが、仕事での成功をそれほど高くは考えていないのに、豊かな経済力を求める学生の比率が比較的高いと言えよう。しかし、これは誤差の範囲かもしれないので、あまり特徴的なことだとは言いきれない。ところが、本学科のみならず、他学科でも短大全体の指標でも「楽しい毎日の生活」

を重視している学生が多数在籍していることは、短大関係者がよく理解しておくべきことではないだろうか。

筆者のこれまでの経験を考えると、この「楽しい毎日の生活」を重視する学生が、将来、就職活動を実施する時に、社会の厳しさにしり込みし、一社のみ受験して失敗した後はもう受験しないような学生となるのではないかと危惧している。

4. 今後の支援課題

第3節で検討した特徴を持つ学生が、本学あるいは他学も含めて在学期間中にどのように変化したのかについて我々現場の教員は確認をする必要がある。そういう意味において、今後行われる「卒業時調査(2010)」および「卒業後調査(2011)」の成果に大きな期待を寄せているのは筆者だけではないだろう。

しかしながら、データの分析結果が出るまで事業運営を行わないわけにはいかないのが、現時点で公表されている資料やこれまでの経験を生かしてある程度予測を立てて行動するのは無駄ではないと判断し、今後の事業運営の見通しを立てたいと思う。

そこで本節ではまず、日本私立短期大学協会が平成21年1月に発行した「短期大学教育の再構築を目指して—新時代の短期大学の役割と機能—」を手掛かりとして、今日の短大を取り巻く環境と社会から何を期待されているのかについて整理をしてみる。その上で、再度私どもが担当している「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」事業についてどのように今後展開して行けばいいのかについて、現時点での見解を述べることにする。

4.1 「短期大学教育の再構築を目指して」の要約

「短期大学教育の再構築を目指して—新時代の短期大学の役割と機能—」は全132ページからなる報告書であるが、本項では、報告書の中でも第2章の「新時代の短期大学像」に注目し、大まかな短期大学をめぐる議論を整理してみた。

現時点において、高等学校へ進学する学生の比率は、中学卒業者の98%（平成22年度学校基本調査速報より）となり、「高校全入」が定着したと言える。また、高校卒業者の半数以上が大学・短大へ進学し、専修学校の進学率を含めると、「7割近い高校卒業者が現役で高等教育進学を

果たして」いる。³

また、社会へ目を転じると、「産業構造の変化や雇用の流動化」といった社会の急激な変化を背景に、「知識や技術、技能を習得するための学習需要」は高まっている。

このような変化を受けて、現代社会は、「知識基盤社会」の時代を迎えたと言える訳であるが、短期大学は社会から何を期待されているのかが重要となる。

短期大学の特徴として、「多種多様な教育分野、少人数制、短期完結型、あるいは地方分散型、地域密着型」をあげることができる。⁵

また、短期大学のそもそもの設置目的は、学校教育法によって、「職業又は实际生活に必要な能力を育成する」と定められており、在学中のみならず、「卒業後、さらに専門性をブラッシュアップし、より高度な知識・技能を習得するために再教育を受ける、いわゆるリカレント教育の場としても活用」されてきている。短期間での完結・集中型の教育機関だからこそ、「キャリア教育」を積極的に担うことが可能である、と「短期大学教育の再構築を目指して」では述べられている。⁶

このように多くの期待を受けた短期大学が、「知識基盤社会」の中で、高等教育を求め既に在籍している学生や地域の住民にどのような教育サービスを提供すればよいのか、特に卒業生に対する支援をどうすればいいのかが問われてくるはずである。

4.2 現段階でのまとめ

短期大学コンソーシアム九州を立ち上げ、まもなく2年目を終えようとしている。そうした中で、「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」事業が今後どのような方向へ進むかについて、本学のみならず多くの関係者が期待しているところであろう。

当初の目論みとしては、卒業生調査を行い、卒業生のニーズを把握し、適切な教育プログラムを用意し、コンソーシアムのホームページ (<http://www.kyushu-ccc.jp/>) や各校のHPや公開講座のパフレットなどを利用して広報活動を行えばいいのではないかと考えていた。

ところが、JCKKとして行ってきたその他の事業に参加し、他の短期大学の教職員と対話をする中で感じたことは、各校の人材を配置する余力がそれほど大きくはないということだ。また、使用できる教育資源に限られている以上、

かなり用意周到に準備をし、学内外の関係者に尽力を要請しないと成功する可能性が上がらないと強く感じるようになってきた。

では、今後どこに教育資源を集中し、この「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」を成功させる鍵があるのかと言うと、一つは、推進していく事業の「有効性を見極め」だと考えている。ここでいう「有効性を見極め」とは、リカレント教育やキャリア支援プログラムの実施可能性ではなく、事業として成り立っていくかどうかの見極めが重要なことを指している。

各短期大学が持つ有限な教育資源を活用する以上、しっかりと結果を出し、事業として成立しなければ、単なる絵に書いた餅に終わるであろう。どんな事業でも実施しないよりは行った方がよいという判断もあるかもしれない。しかしながら、短期大学をめぐる環境は激変しており、成功する可能性の低い事業に多くの資源を割くことは経営判断として正しいとは言えないだろう。

だからこそ、きちんとしたデータに裏付けされた事業計画と具体的な組織運営を同時に考えていく必要がある。

次に重要な点は、「学生の社会の理解と社会の要請の不一致の間隙を埋める作業」ではないかと考えている。

第3節で筆者が所属するライフプランニング総合学科の学生の平均像を示したが、社会変動が大きくなり、「知識基盤社会」が到来したと言われる中、十分な学習意欲も、社会に対する理解も備わっていない学生たちに対し、何を2年間で学んでもらい、何を卒業後支援するのかの見極めが重要ではないだろうか。

つまり、卒業後の支援を色々企画したとしても、その前提となる学習習慣や社会認識が不足していたのでは、どんなに素晴らしい教育プログラムを提供したとしても、宝の持ち腐れに終わってしまうだろう。

結局は、在学時の教育内容をもう一度点検し、今現在実施している公開講座やリカレント教育を精査し、JCKKに参加している連携校で情報の共有化を行い、やれるところから成功体験を積んでいくほか道はなさそうである。

5. おわりに

筆者は高等教育の領域を研究する研究者ではない。その意味において、本稿の学術的価値がどこにあるのか筆者には判断ができない。

しかしながら、JCKKの推進事業に係る中で、様々な知見を得ることができ、研究レポートとも事業報告書とも言い難い内容であるが、一応記録として本稿を残す機会を与えられたことに感謝を申し上げたい。

同時に、激変する社会構造や産業構造を目の当たりにして、正直戸惑うことの方が多き日々を過ごしているのだが、今後どのような形で短期大学の教育現場の一翼を担えば良いのかということについて、JCKKの2年間の経験は様々なアイデアを提供して頂けたと感じている。

本稿は、JCKKの推進事業の中の「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」事業についてあれこれ思いを巡らし、悪戦苦闘している一人の短大教員の記録である。同じ思いを分かち合いながら少しずつ歩みを進めているJCKKの関係者に深く敬意を表すとともに、何か一つでも参考になれば幸いである。

本稿について一応筆者のまとめをしておく、どの短期大学も生き残りのために必死に日々研鑽に励み、新しい事業を興し、少しでも多くの学生たちにより教育を届けることができるように努力を重ねている。

しかしながら、4年制大学と比べて、教育資源が十分でない短大が大半で、意欲はあっても手付かずの問題が多くあるように思われる。そうした中で、北部九州の9つの短期大学がコンソーシアムを形成し、戦略的パートナーシップの旗の下様々な事業を展開し、今日に至っているのは大いに評価されるべきことだと考えている。

本稿の冒頭でも述べたが、筆者は現在「卒業生の職業キャリアや生涯学習支援」事業にかかわり、過去2年間は主に調査研究に携わってきた。今後は第4節で述べたような指針の元、手がつけられそうな事業を見出し、有効性を見極め、早めに連携校間で事業が始められるよう努力したいと考えている。

まだ道は遠く険しいかもしれないが、夜明け前が一番暗いと言われているそうだから、今がその時であると前向きに捉え、今回はきちんとした形で事業報告ができればと考えている。

参考文献

- 1) 日本私立短期大学協会, 短期大学の再構築を目指して—新時代の短期大学の役割と機能—, (2009).
- 2) 中央教育審議会, 我が国の高等教育の将来像, (2005).

¹ 参考文献2), p. 1 参照。

² 香蘭女子短期大学には4つの学科があり、表中ではそれぞれファッション総合学科 (FA 総合)、食物栄養学科 (食物栄養)、保育学科 (保育)、ライフプランニング総合学科 (LP 総合) と表記している。

³ 参考文献1), p. 25 参照。

⁴ 参考文献2), p. 3 参照。

⁵ 参考文献1), p. 28 参照。

⁶ 参考文献1), p. 31 参照。

【論文】

アメリカのグレート・ティーチャーズ・セミナーは決して一様ではない

Great Teachers Seminars spread all over the United States
are by no means Conducted Uniformly

石原 好宏

Yoshihiro ISHIHARA

要旨 北米大陸を中心としながらハワイ州や東アジアにも広がって、この40年余り続いてきた教員研修の一形態がグレート・ティーチャーズ・セミナーである。筆者はこのセミナーにこれまで3回ほど参加する機会を得た。一つはノースカロライナ州で開催された研修会指導者向けのもので、残る二つがハワイ州とオレゴン州で開催された一般教員向けのものであった。そうした経験を通して筆者は一つの重要な点に気付いた。それは、各地で開催されてきたセミナーを比べてみると、その基本理念は共通であったが、実施された内容や方法にはかなりの違いが見られたことである。本稿では、まずその基本理念を整理し、その後で、セミナー間に見られる違いを比較対照すると共に、日本で開催されている各種の教員研修との本質的な違いを探って、グレート・ティーチャーズ・セミナーの本質に迫ってみたい。

キーワード 教員研修、グレート・ティーチャーズ・セミナー、教員研修における日米の違い

1. はじめに

最近、我が国でも高等教育機関に対する外部評価が定着してきた。そうした中で教育活動の主要な一翼を担う教師達が、自ら行う、彼らの所属する教育機関が行う、あるいは外部の各種団体が行う、様々な教員研修に如何に効果的に参加するかは極めて重要な課題である。この問題を考える時、北米大陸を中心にしてこの約40年間に亘って実施されてきたグレート・ティーチャーズ・セミナー¹⁾ (Great Teachers Seminar、以下GTSと略称)は、我々にも教員研修の在り方について極めて重要な示唆を与えてくれる。

GTSは、参加した全教員が“Great Teacher”となることを目指して、各自が持つ教育経験の中から成功事例や懸案

事項を披瀝し合い、十分な議論を重ねて、お互いの教育力を高めていこうとする教員研修の一形態である。このセミナーは米国イリノイ州にあるCollege of DupageのDavid B. Gottshallが1969年に立ち上げたNational Great Teachers Seminar (当初の名称はIllinois Great Teachers Seminar)が発端であった。なお、その源流は故Roger H. Garrisonがそれ以前に何度か試みたStaff Developmentの実験であった^{2),3)}。その後、グレート・ティーチャーズ運動(Great Teachers Movement、以後GTMと略称)は、燎原の火の如く、北米大陸(米国本土とカナダ)だけでなく、太平洋を隔てたハワイ州や東アジアにも広がり、今日に至っている。

このような背景を持つGTSに筆者は、次に示すように合計3回ほど参加する機会を得た。

1) 2004年8月: 16th Hawaii National Great Teachers Seminar (HNGTS, Big Island, Hawaii)

2) 2005年6月: 4th National Great Teachers Leadership

* 著者紹介

短期大学コンソーシアム九州研究センター 研究員
〒840-8550 佐賀市本庄町大字本庄1313番地
phone: 0952-23-5145
e-mail: hiro-stein@hotmail.co.jp

Colloquium (NGTLC, Salter Path, North Carolina)

3) 2010年6月: 31st Pacific Northwest Great Teachers Seminar (PNGTS, Menucha, Oregon)

本稿では、こうした一連のGTSの研修内容は、基本理念を共通にしながらも、決して一様でなく、様々な違いがあることを具体的に示していきたい。

2. GTSの基本理念

ここでは、すべてのGTSに共通している基本理念を概観しておきたい。

2.1 GTSの目的

GTSを実施するための準備の一つとして、参加を勧誘するためのチラシの配布がある。そこに書かれるセミナーの目的は、1969年に開催された最初のIllinois Great Teachers Seminarのために書かれた勧誘チラシのものと基本的に同じであり、次の5項目から成る^{2),3)}：

- 1) 良い授業を褒め称えること。
- 2) 教師達に、彼らの専門分野や環境の枠を超えて、教えることに関する移転可能な着想 (idea) と普遍概念 (universals) を探求するための冒険をさせること。
- 3) 教師としての態度・方法・振る舞いを参加者達が真剣に振り返って熟考できるような、寛いだ環境 (a relaxed setting) と分かりやすい手順 (straight-forward process) を提供して、内省し自己評価する態度を促すこと。
- 4) 教育に関する諸問題を合理的に分析し、それらを解決するための現実的で創造的な解決法を開発すること。
- 5) 高等教育に携わる教師達の間に広がるコミュニケーションのネットワークを構築することによって、情報や着想を交換するように刺激を与えること。

2.2 GTSの前提

このようなGTSの目的を達成するために、GTSは、次に挙げる4つの前提に立って、実施されてきた^{2),3)}：

- 1) 長い目で見れば、教師と呼ばれる人々は教えることについてお互いからもっとも良く学ぶものである。適切な手助けを受けた (properly facilitated) 仕事の話 (shop talk) は、教員研修 (staff development, SD) の最高の形 (the highest form) である。

2) 教えることに関する創造性は、多様な分野や経験の程度・関心を持っている教師達を一堂に会させることで一段と強化される。

3) もし適切な動機付けがあれば (if properly tapped)、どんなグループの現役教師達が持つ集団的な知恵・経験・創造性であっても、それらはどのような能力や名声を持つと言われている個人の専門家を遥かに凌駕する。

4) 教育を成功させるカギは単純化である (less is more)。

2.3 GTSの狙い

D. B. Gottshall は、GTSの狙いについて、次のように述べている^{2),3)}。それは特定の領域を教えることではない。そうした教え方のコツ自体 (the art of teaching as such) を教えることであり、素晴らしい教師の本質 (the nature of a great teacher) に重点がある。それは素晴らしい教師の像を探求すること (a quest for The Great Teacher) である。何を探求する場合もそうだが、探求する者は多くのことを自分達自身から学ぶものである。

さらに D. B. Gottshall は、GTMについて次のように述べている³⁾。GTMを“運動”と呼ぶのは、それがいかなる組織とも関係を持っていないからである。GTMには活動本部もなければ住所もない。職員、所有者、使用人、政策などもない。マニュアルやハンドブックもない。ごく僅かの簡単なガイドラインがあるだけである。書かれたものは文献2)と文献3)以外には何もなく、すべてが口承で伝えられてきた。それは、もし指導書等があれば一字一句に拘る追従になり兼ねず、教育の専門家がすぐに飽きてしまふ、どんな形の真の信奉者 (true-believership) や固定の手順 (fixed procedure) の成長も回避するためであった。

3. GTMとして実施される研修の種類

GTM³⁾として実施される研修には次の2種類がある。

- 1) 一般教員を対象としたもの：このタイプの研修は1969年以来、北米大陸の各地に加えてハワイ州等でも毎年繰り返し開催されてきた。筆者が参加した3回のセミナー (1. を参照) のうち1)と3)はこれに属する。
- 2) GTSの指導者を対象としたもの：GTSの指導者はGTSの責任者 (director) と、一般教員向けの研修で

よく行われるグループ討論の進行役 (facilitator) から成る。本稿では彼らを“セミナーのスタッフ”とも呼ぶ。筆者が参加した3回の研修のうち2)はこのタイプである。なお、このタイプの研修会を表す用語としてセミナーの主催者達は当初から“seminar”ではなく“colloquium”を使ってきた。以下に掲げるように、このタイプの研修は、1998年に初回が開催された後、3年経った2001年からは2年に1回ずつ1箇所だけで開催されてきた。

- (1) 1998年：Wisconsin州、米国
- (2) 2001年：Texas州、米国
- (3) 2003年：Alberta州、カナダ
- (4) 2005年：North Carolina州、米国
- (5) 2007年：California州、米国
- (6) 2009年：Nova Scotia州、カナダ
- (7) 2011年：North Dakota州、米国 (予定)

4. 一般教員向けGTS同士の比較対照

1. で述べたように筆者は、一般教員向けのGTSには、16th HNGTS (2004年8月開催) と31st PNGTS (2010年6月開催) の2つに参加した。ここではその2つを対比させながら、両者の共通点と相違点を探ってみよう。

4.1 両者に共通する事項

- 1) 時間的な余裕を十分に確保した会期設定：参加者同士が自由に活発な議論を行うのに十分な時間を確保するべく、会期は両者共に4泊5日が確保された。因みに、ハワイ州で2010年8月に開催された22nd HNGTSの会期はさらに1日増やされて、5泊6日となったようだ。
- 2) 事前に配布された日程の中味は極めて粗い：会期中の研修日程 (付録1と付録2を参照) は、概略だけを事前に決めて配布するのが常で、詳細な中味が事前に決められることはない。どのようなテーマをどんなメンバー構成で議論するかは、セミナーへの参加者が確定した後で、各セッションが開催される当日のセッション直前かその前日までにセミナーのスタッフが決めている。
- 3) 参加者に求められる事前準備 (宿題)：各参加者が教師や学習者として出合った本の中から、興味を覚え

たり価値ありと認めたりしたもの1~2冊を、セミナーに持参すること。また、A4版で各1枚のエッセイを、次の2つのテーマの下に書いて来ること。その一つは“うまくいった教育上の新しい着想 (successful instructional innovation)”であり、もう一つが“これまで遭遇した教育上の問題点 (instructional problem)”である。

- 4) 参加者一人ひとりの貴重な知恵や経験を全員で共有しようとする志向が顕著：参加者一人ひとりの考え方や経験を重視し、それに基づいた議論を参加者同士が徹底的に行い、お互いの知恵や経験を交換して共有化しようとする志向が極めて強い。それを実現した一例が、参加者達が書いてきたエッセイの内容を10人以下から成る各グループの中で一人ずつ紹介し合い、じっくり議論する、というセッションの開設である。
- 5) 参加者間の親睦を図るための配慮：毎日リクリエーションや小旅行 (excursion) を行うための自由時間が設けられた。その他にも様々なゲームや魅力的なイベントが幾つも用意された。
- 6) 各セッションへの参加者のグループ分け、及び検討する課題の割り振り：これはセミナーのスタッフの専決事項で、各セッションが始まる直前に発表された。

4.2 両者の間で異なる事項

- 1) 創設者 D. B. Gottshall の参加の有無：HNGTSでは創設者の参加があったが、PNGTSではなかった。ただ、この違いが恒久的か否かは確認できていない。
- 2) 研修期間中の参加者の寝室の割り当て：HNGTSでは、事前にセミナーのスタッフが決めたものがチェックイン時に受付で提示されて、参加者はそれに従うだけであった。しかし、PNGTSでは、チェックイン時に参加者本人が決める方式であった。つまり、各寝室の出入口ドアの外側にその部屋の収容定員数と利用者の氏名を書き込む用紙が貼られている。自分がその部屋を使いたい場合、定員が未充足であることを確かめた上で自分の氏名を書き込めば、登録は完了となる。
- 3) 参加者の緊張を解きほぐすための工夫 (ice-breaker)：セミナー初日の夕食前に一定の時間を割いてこのイベントを行う。この点だけは共通であったが、実施内容は両者で大きく異なっていた。

- (1) HNGTS の場合：参加者の中から任意の一人とペアを組んでお互いに各5分間程度の取材を行い、相手のプロフィールを聴き出す。そして、その後の全体会議で、取材した相手の他者紹介を行う。このイベントをハワイでは“informal pappy hour”と呼んでいた。
- (2) PNGTS の場合：各参加者は、なるべく多くの参加者にインタビューし、それぞれのプロフィールを聴き取る。そして、その後の全体会議で、取材した一人ひとりのプロフィールを他者紹介する。このイベントをオレゴンでは“Work on pre-dinner tasks”と呼んでいた。
- 4) 各セッションで取り上げられたテーマやイベント：
- (1) HNGTS の場合：
- a) 事前にスタッフが選んだ全部で11件のテーマ（“教師達が共通に抱えている関心事”一付録3を参照）の中から参加者の関心が高い6件を全参加者の挙手で選び、それらの1件ずつを、7人程度から成る各グループの中で議論した。なお、グループのメンバー構成はセミナーのスタッフが事前に行った。
- b) “グレート・ティーチャーとは一体何か？”が最終試験のテーマに指定され、最後のセッションでグループに分かれて議論した。そこでの結論は、その直後の全体会議で、各グループの代表から口頭発表した。
- c) 参加者全員が持参した“これまでに出合った大切な一冊の本”の選定理由を、一つのセッションで、その本を持参した本人が説明した。ただし、全員が説明する時間はないので、予定時間が来たら、その時点でそのセッションは打ち切られた。
- d) セミナーを締め括る最後のセッションで、参加者全員が一人ずつ、GTSに参加して感じたことを手短かに発表し合った。
- e) セミナーの最後のセレモニーでは、参加者一人ひとりに修了証が手渡された後“Canadian (or Indian) handshake”が行われた。これは、車座に着席した全参加者が時計回りに順次一人ずつ立ち上がり、着席中の一人ひとりと握手を交わしながら進む。そして、一周したら自分の席に戻る。なお、

着席中の人と握手を受けた時、その人の右側が空席であれば、その人も立ち上がって、握手する人の列に加わる。こうすれば、座っている時と立っている時の2回、同じ人と握手することになるが、このイベントは実に感動的で、参加者間の一体感是一段と増したことを実感できる。

(2) PNGTS の場合：

- a) 参加者全員が持ち寄った2種類のエッセイは、初日の夕食後の全体会議の際に互いに交換し、その後の討論で重要な資料として利用された。つまり、これらのエッセイは、9人程度から成る各グループのセッションで全員がそれぞれの概要を発表し、質疑応答と討論を行った。なお、このために設けられたセッションの数は innovation 用が2つ、problem 用が1つであった。
- b) 最終のセッションで行ったグループ討論のテーマは「良い教師とは？ 悪い教師とは？」であった。また、各グループで討論した結果は、グループ別の寸劇にまとめて、その直後の全体会議で発表することが課題に指定された。ここで筆者が感心したのは、こうした課題でも、米国の教師達は戸惑いや気後れを見せることなく、実に淡々と議論に加わり、見事な寸劇を作り上げていたことである。日本では、おそらくこれほどうまく事が運ぶとは到底思えない。
- c) 参加者全員がそれぞれ持参した本を、全員で紹介してもらおう意図などはなかったらしい。事前に責任者の Jan Woodcock 女史 (Umpqua Community College、心理学教員) に申し出たごく数人の参加者が、全体会議の際に自分の本を紹介していた。

5) 夕食後のセッション等：

- (1) HNGTS の場合：毎日、通常の全体討論が終わった後に“social hour”と称する時間帯が設けられて、アルコール類やつまみ等を豊富に準備した“飲み会”が催された。この会はいつも流れ解散であり、話し相手や飲み相手がいれば、かなり夜遅くまで語り合ったり飲んだりすることができた。なお、最終日の前夜の夕食時から夜にかけては参加者全員が参加して、お互いに多彩な隠し芸を披露し合う“Aloha Night”と銘打った本格的な懇親会が開かれた。そ

こでは、普段の議論等では見られない参加者一人ひとりの意外な側面を垣間見ることができて、実に楽しかった。

- (2) PNGTS の場合：毎日、通常の全体討論やゲーム等を行うセッションが夕食後に設けられて、その後はいつも流れ解散となった。そこで、参加者達は三々五々集まってさらに議論を続けたり、自分の寝室に戻って一人で読書を楽しんだり、シャワーを浴びた後で床に就いたり様々であった。
- 6) 新入教員へのアドバイス：このイベントでは、教育経験が1～2年と短い教員を4人程度スタッフが選り出して置き、最前列に正対で着席してもらう。そして、フロアにいる経験豊かな参加者達が彼らに“教育実践のコツや知恵”を披瀝したり、新入教員が出した質問にフロアの参加者達から回答や参考意見を述べたり、という“知恵の交換”を行う。HNGTS ではこのためのセッションが設けられたが、PNGTS では設けられなかった。その理由が何かは、今のところ確認していない。
- 7) 同一のGTSに続けて参加することの制限：この種の制限があるという話をHNGTSでは聴かなかったが、PNGTSでは以前からあったという。つまり、従来は「同じ人間が再びこのセミナーに参加するのはすべて不可」であったようだ。これは毎年セミナーへの参加希望者が多いことの証であろう。しかし、「2011年からは前回の参加から3年以上経ていれば再び参加してよい」ことにした、というアナウンスが、最後のセッションで責任者のJanさんからあった。なお、蛇足だが、日本から参加した筆者には、「希望するならば来年も参加してよい」というお話を彼女からいただいた。

5. GTSに見られる特徴、日本の教員研修との違い

ここで、北米大陸を中心に開かれてきた一連のGTSについて、筆者の限られた体験によるものではあるが、感じたことや気付いたことをまず列挙したい。続いて、日本で行われている教員研修との大きな違いの幾つかを指摘する。

5.1 GTSに参加して気付いたこと

2. ～4. に述べたことで、GTSが持つ大きな特徴が

かなり浮き彫りにできたと思う。しかし、なお書き残したGTSに関する気付きの幾つかをここでまとめておきたい。

- 1) GTSへの参加はcommunity collegeの教員にとって義務的：31st PNGTSに参加した約40人中の2割程度の方に、このセミナーに参加した動機は何か、また参加費用は誰が（ないし、どの機関が）負担したかを訊ねてみた。彼ら/彼女らからの返事はすべて、今回の参加が上司（学長や学科長等）からの業務命令であり、参加経費（参加費、交通費等）はそれぞれの勤務先が公費で負担してくれた、というものであった。さらに、GTSへの参加は、単なる業務命令でなく、昇進の条件であったり、非常勤から常勤に切り替える条件であったりと、非常に現実的な特典が付いている点が印象的であった。
- 2) GTSの研修期間：米国のcommunity collegeに勤務する教師達にとって、研修期間が4泊5日であることは少しも負担であったり違和感を覚えたりすることではなさそうで、深い感銘を受けた。日本でこのような研修を企画する場合、2泊3日という会期でも極めて難しく、それ以上の期間を設定することなどほとんど考えられないという実感を筆者は持っている。また、研修期間を長くすれば参加経費（宿泊費、食費等の総計）が増えるが、この点も米国の教師達にとっては、余り問題ではないようである。なお参考までに、筆者が2010年に参加した31st PNGTSへの払込み費用は600 US\$（56,820円、当時の為替相場：94.82円/US\$）であった。
- 3) GTSへの参加資格等：教師としての資質を向上させたいという旺盛な意欲さえあれば、国籍・勤務先・所属先等が問われることは一切ない。今やGTSは北米大陸の各地で毎年開催されている⁴⁾。その発祥がcommunity collegeであったことから、参加者の大半は開催地周辺のcommunity collegeに勤務する教師達である。しかし、数は少ないながら、4年制大学や初等・中等教育機関に勤める教師達や、日本を含む東アジアの短期大学等に勤める教師達も時折参加している。このように、GTSに参加することへの障害はまったくなくと言ってよい。
- 4) 参加者の一人ひとりが主役：GTSの基本姿勢は、誰か高名な専門家のご高説を承って、それを大切に持

ち帰るというのではない。参加者一人ひとりが持つ貴重な発想や経験から何かを互いに学び取ろうとする姿勢であり、それを最高の学びと考えていることである。筆者は3つのセミナーに参加して、この趣旨が参加者全員に浸透していることを強く感じた。どのセミナーでも参加者達は実によく発言するし、身体もよく動かし、したがって、“寸劇”などが課題であっても、何の抵抗もせず、見事なパフォーマンスを披露してくれる。

5) 参加者達の熱心さの背景にあるもの：GTSに参加する教師達の熱心さを支えているものが何かを考えてみると、彼らが community college で教えていることが一因だと思えてならない。community college は、入学する意思さえ示せば、誰でも入学することが取り敢えず許される。そうすると、学生達の中には想像すらできないような多様で複雑な背景を持つ者がいくらかでも入り込んで来る。31st PNGTS で実際に一人の女性教師から提示された問題は次のようなものであった。レポートの締切日を守らなかった学生が、後日、レポートを書いたので受け取ってほしいと言って研究室を訪ねて来た。しかし、受け取りを拒否した。すると、その学生はピストルをチラつかせて受け取りを強要したという。こうした事態に直面した場合、どう対処するのが適切だろうか、という問い掛けである。こんな問題を日々突き付けられると、命を懸けた真剣な対処が不可欠で、毎日の教育活動に熱心に取り組まざるを得ないからである。

5.2 日本の教員研修との違い

1) 研修会の会期と研修内容：5.1の2)で指摘したように、米国で行われる GTS の会期は、4泊5日ほぼ標準であり、中には5泊6日という例さえある。長期の研修を行う狙いは、参加者同士ができる限り打ち解け、日頃抱えている教育上の悩み等を率直に語り合って、解決の糸口を探り出すことにある。そこには、高名な学者先生の講演を参加者に聴かせて、何らかのエッセンスを吸い取ってもらい、今後の教育活動に活かしてもらおう、という発想はまったくない。このような研修で欠かせないのは、参加者同士がより深く知り合って語り合う機会を作ることだ、と GTS の主催者

達は考える。そのため、野外で行うエクササイズ（テニス、ゲートボール、近くの山野の散策等）や小旅行（ワイナリーの見学、近くの町への買い物、溶岩流の見学バスツアー等）の行事が毎日のように続くことになる。

一方、日本で行われる教育研修では、高名な先達の高遠な話を聴くような企画が柱に据えられることが少なくない。さらに、米国で行われる GTS で定番のリクリエーションやエクササイズ、小旅行といった行事はほとんど組み込まれない。そして、研修会への参加者同士がそれぞれの経験を語り合い、教育談議に耽る、等の機会はほとんど設けられない。

さらに、日本で行われる研修会の会期がせいぜい2泊3日程度である理由の一つと考えられるのは、長期の研修に馴染みが薄く、参加を希望する教員が極めて少ないことである。その他に、日本の教員が日頃から余りに多忙なこともあるのではなかろうか。

2) 学校当局の FD 研修に対する取り組み、支援体制：最近是我が国でも、FD 研修を行うことが義務付けられている。しかし、何をどうするのが適切で効果的な FD 研修であるかについてのノウハウは未だ確立されていない。したがって、少ないテーマについて参加者同士がじっくり話し合うタイプの教員研修は、我が国で成立させることが極めて難しい。かつて CC 研（“短期大学の将来構想研究会”の略称）が2004年度と2005年度に KGTS（九州グレート・ティーチャーズ・セミナー）を主催した時、参加者を集めるのに大変苦労した⁹⁾。また、研修日程の中身等が確定していない GTS のようなタイプの研修会への参加経費を公費で負担することは認められないようである。こうした事情から、GTS のスタイルを持つ研修会は育ち難いではなかろうか。

4) 個々の教員の研修に対する心構え：従来から日本人は他人の中に飛び込んで自らをさらけ出し、本音で議論を戦わす文化には馴染めなかった。そのため、参加者同士がとことん議論し合うような研修会に積極的に参加するという意識も習慣も身に付いていない。しかし、よく考えてみると、他人の話を聴くだけで自分の短所や欠点を修復し改善していくことなど本来できるはずがない。まず自分がこれまでしてきたことを他人

に率直に語り、他人からの反応を聴かせてもらって自分を高めていくことが重要であることを忘れてはいけないと思う。

5) 教育文化の違い：米国と日本の教育事情を対比した時、その歴史的社会的な背景が大きく違うことは明らかである。したがって、一つの教育的な試みが米国ではうまく機能しても、そのままを日本に持ち込んでうまく機能する保証はない。今回注目した GTM のセミナーもそうした一例となるのだろうか。米国内の全然異なる3箇所で開催したセミナーのすべてが極めて順調に運営されているのに、なぜそれを日本にはうまく移転できないか、と歯がゆく思うことしきりである。しかし、こうした研修会の底流には、歴史や社会的な背景が違って、共通する何かがあるはずである。

それが何かを今すぐ答えることはできない。しかしながら、いつか必ず日本により適合した研修スタイルを確立できる日が来る、と確信している。

6. おわりに

本稿では、筆者が米国で3度経験したグレート・ティーチャーズ・セミナーの基本理念をまず押さえ、それらの研修会で行われた様々なイベントに共通する部分と異なる部分を整理した。その上で、日本で行われている教員研修との違いの検討を試みた。この試論が一つの手掛かりとなつて、米国における GTM に対する理解が少しでも深まり、さらには我が国における教員研修の実施方法や内容が、より本質に迫り深化していくことになれば幸いである。

謝 辞

本文で述べた2つの研修会、16th HNGTS と 4th NGTLC、に筆者が参加するに当たり、経費の一部を、短期大学コンソーシアム九州の前身“短期大学の将来構想に関する研究会”（世話役：安部 直樹・長崎短期大学学長、及び吉本圭一・九州大学助教授：いずれも当時）が文部科学省から獲得した、研究課題「短期大学卒業生のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究」に対する平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(BX1)）から支出していただいた。ここに記して深く謝意を表す。

次に、16th HNGTS の実質的な責任者であった Larry Fuji-

naka 氏（当時、ハワイ大学機構のリーワード・コミュニティ・カレッジ (Leeward community college) 教授) には大変なお世話になった。さらに Fujinaka 氏は筆者が4th NGTLC に参加する契機を与えてくださった以外に、その研修に自らも参加し、現地での研修中も大変なお世話になった。この一連の御厚意に対して深く感謝を申し上げたい。

最後に、31st PNGTS の責任者 Jan Woodcock 女史にもそのセミナーに参加する機会を与えてくださった。深く感謝したい。彼女からセミナーへの参加の勧誘が、ある日突然、筆者の手許に電子メールで舞い込んだ。偶然に彼女も4th NGTLC に参加しておられて、その時の参加者名簿から私の電子メール・アドレスを見付けてお誘いくださったという。なお、PNGTS がオレゴン州で30年以上続く全米で3番目に長寿の GTS であることを私は当初まったく知らなかったが、伝統の重みは十分に実感できた。また、実際に参加し、ハワイ州やノースカロライナ州における各研修を対比してみることができて、いろいろと気付く機会を与えていただいた。そのことにも深く感謝を申し上げたい。

参 考 文 献

- 1) 石原 好宏：“アメリカにおける Great Teachers Movement”，「短期大学卒業生のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究」，平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(BX1)）研究成果報告書，(2007)，277-282
- 2) David B. Gottshall: “The Spirit and Intent of the National Great Teachers Movement (In observance of its 30th anniversary)”，<http://ngtm.net/pdf/DGSpiritIntent.pdf>, 1999
- 3) David B. Gottshall: “The History and Nature of the National Great Teachers Movement (in observance of its 25th anniversary)”，1993（この文献は4）のサイトから入手できる）
- 4) “Official Web Niche of the National Great Teachers Movement”，<http://ngtm.net/index.html>（このウェブサイトは、北米大陸における GTM の活動拠点やそれらに関する文書にアクセスするための手掛かりを集めている）
- 5) 白川 佳子，藪 敏晴：“日本におけるグレート・ティーチャーズ・セミナーの導入”，「短期大学卒業生のキャリア形成に関するファースト・ステージ論的研究」，平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究(BX1)）研究成果報告書，(2007)，283-293

付録 1

Tentative Agenda (暫定的な日程)
2004 Hawaii National Great Teachers Seminar
Aug 8/12, 2004

Sun 2-4:00 pm	Registration, Cabin Check-in
4:30	Informal Happy Hour
5:30	Dinner
7-9:00	Evening Session
9-10:00	Social Hour

Mon 7:30 am	Breakfast
9-11:30	Morning Session
11:30	Lunch
1-3:00 pm	Afternoon Session
5:30	Dinner
7-9:00	Evening Session
9-10:00	Social Hour
Tue 7:30 am	Breakfast
9-11:30	Morning Session
11:30	Lunch
3:00 pm	Free Time - Optional Field Trip
5-10:00	Optional Lava Tour
10:00	Optional Social Hour
Wed 7:30 am	Breakfast
9-11:30	Morning Session
11:30	Lunch
1:00 pm	Free Time
5-8:00	Aloha Night
9-10:00	Social Hour
Thu 7:30 am	Breakfast
9-11:30	Morning Session
Noon	Lunch/Check-out

付録2

Brief Schedule (日程の概略)

Pacific Northwest Great Teachers Seminar
June 13-17, 2010

Sun 3-4:30	Arrival, Check-in, Settle in
4:30 pm	Conference Begins - Work on "Pre-dinner Tasks"
6:00	Dinner
7:00	Meet in Great Hall: Bring Problem/Innovation papers
7:30	Introduction, Overview of the Seminar Menucha Facilities & Nearby Attractions
Mon 8:00 am	Breakfast (note: meals at same time - except Tuesday dinner)
9:00	Meet in Great Hall: Innovation Papers
Noon	Lunch
1:00 pm	Meet in Great Hall: Innovation Papers (New Groups)
3:30	Recreation Time
6:00	Dinner
7:00	Meet in Great Hall: General Session
Tue 8:00 am	Breakfast
9:00	Meet in Great Hall: Problem Papers
Noon	Lunch
1:00 pm	Meet in Great Hall: Brief General Session, then Ex-cursions, Hikes, Shopping, Sports, Napping, et al.
7:00	Late Dinner
8:00	Meet in Great Hall: General Session
Wed 8:00 am	Breakfast
9:00	Meet in Great Hall: General Session
Noon	Lunch
1:00 pm	Meet in Great Hall: General Session
3:30	Recreation Time
6:00	Dinner
7:00	Meet in Great Hall: General Session
Thu 8:00 am	Breakfast
9:00	Meet in Great Hall: General Session: Closing Activities
Noon	Lunch
1:00 pm+	Farewells, hugs, et al.

付録3

Hot Topics (教師に共通する関心事)

- 11 Universal Concerns of Teachers -

- 1) Class Participation (学生達をより活発に授業に参加させて、教師と学生間、そしてまた学生同士の意見交換を増加させる)
- 2) (Un) covering Materials (教えることが多過ぎる。学習内容を暗記させるのではなく、学生達が率先して学びたいことを掘り起こしていくように仕向ける)
- 3) Getting Through (学生が授業内容を理解しない、又は、理解しているかどうか分からない、といった事態を何とか克服し、乗り越えていく)
- 4) Grades (成績をどのように付けるか。公平な成績の付け方は?)
- 5) Overwork (教師の働き過ぎへの対処法)
- 6) Under-prepared Students (授業を受けて理解する能力を欠いた学生達)
- 7) Students' Lack of Creativity, Quality (学生達の想像力、独創力の欠如)
- 8) Fear of Burnout (永年教えているうちに陥る燃え尽き症候群への恐怖)
- 9) Poor Thinking, Poor Learning (学生に自分で考えて学ぶ力を付けさせる)
- 10) Making It Real (教える内容を実生活に結び付ける)
- 11) Motivating Students (学生達にやる気を出させる)

【報告】

短期大学教育の到達目標の設定と学生調査

A Survey of Current Students' Views on the Quality of Education at Junior College

安部恵美子*1

小嶋 栄子*2

Emiko ABE

Eiko KOJIMA

要旨 本事業では、在学生の入学時から卒業までの学習プロセスと学習モードの特徴の解明のために、連携校の在学生を対象とする量的・質的な調査を実施し、短期大学教育の効果の現状を総合的に把握することが目的である。そのため各々の連携校は、教育成果の現状を十分に把握し自学の教育改善を実施する。さらに、連携校間で、効果の高い教育改善情報を共有し、共同で開催するFD研修などで活用すると同時に、コンソーシアムのホームページ等で逐次公開することとする。また、短期大学卒業の最低条件(ミニマム・リクワイアメント)について検討し、短期大学教育が目指す到達目標を定める。

我々は上記の目的を達するための一手段として、短期大学生の入学後から卒業後にいたる成長・発展の点検と教育指導の充実のためのパネル調査を企画した。このパネル調査は、「入学時/初年次質問紙調査」「卒業時調査」「進学者追跡質問紙調査」「就職者・進学者追跡インタビュー調査」から成り、平成23年度3月31日現在、「入学時/初年次質問紙調査」の企画・実施・分析、「卒業時調査」の企画・実施、「進学者追跡質問紙調査」「就職者・進学者追跡インタビュー調査」の企画までが終了している。

本報告は、「入学時/初年次質問紙調査」の一環として行われた「短期大学の学生調査」(平成21年4月に短期大学に入学した学生に対して、入学前の学習経験や生活、短大への入学理由、短大での学習意欲、学生生活の実態と満足度、短大卒業後の進路希望及び、短大教育に対する評価に関する質問紙調査)についての報告である。

キーワード 短大教育、到達目標、パネル調査、1年生、質問紙調査、キャリア教育・職業教育

1. 「短期大学の学生調査」の概要

本研究では、短期大学の1年生を対象とした質問紙調査「短大生の学びと生活に関する調査」を企画・実施した。

1) 調査実施時期

平成21年9～11月

2) 調査の対象と方法

調査の対象者は、短期大学コンソーシアム九州に加盟す

る9短大を含む、全国48の短期大学の1年生(平成21年4月入学者)である。

調査事務局より送付した調査票を、学内で一斉配布し、記入方法等の説明後に実施した。記入所要時間は40分程度である。各短大で実施後、着払いで調査事務局へ返送することで回収を行なった。

対象者数は、48短期大学の1年生9,637人であり、回収サンプル数は7,859人(回収率81.6%)である。

各短期大学の学科を「人文」「社会」「教養」「工業」「保健」「家政」「教育」「芸術」「地域総合」「その他」といった10の学科分類に分け、主な分析軸としている。

なお、分析に際しては、PASW Statistics 18を用いた。

著者紹介

*1 長崎短期大学学長

*2 長崎短期大学英語科教授

〒858-0925 佐世保市椎木町600番地

tel: 0956-47-5566

*1 e-mail: emiko@njc.ac.jp

*2 e-mail: kojima_eiko@njc.ac.jp

3) 学会報告

1. (発表者) 吉本圭一、安部恵美子、小嶋栄子、末松泰子、吉武利和、河野睦美；短期大学の学生調査—キャリア教育・職業教育の探求、日本高等教育学会第13回大会、2010年5月29～30日、関西国際大学
2. (発表者) 安部恵美子、吉武利和、吉本圭一；「短期大学の学生調査—キャリア教育・職業教育の探求—」その1、大学教育学会第32回大会、2010年6月5～6日、愛媛大学
3. (発表者) 末松泰子、小嶋栄子、河野睦美；「短期大学の学生調査—キャリア教育・職業教育の探求—」その2、大学教育学会第32回大会、2010年6月5～6日、愛媛大学
4. (発表者) 吉本圭一、小嶋栄子；短期大学の学生調査—キャリア教育・職業教育の探求、第28回短期大学の将来構想に関する研究会、2010年7月9日、長崎国際大学
5. (発表者) 中濱雄一郎；『短大生の学びと生活に関する調査』香蘭女子短期大学に関する報告—ライフプランニング総合学科を中心に—、第28回短期大学の将来構想に関する研究会
6. (発表者) 末松泰子；東海大学福岡短期大学の学生像、第28回短期大学の将来構想に関する研究会
7. (発表者) 安部恵美子；「短大在学生調査」からみた自短大の教育（ケース3）長崎短期大学、第28回短期大学の将来構想に関する研究会

4) 研究発表

安部恵美子、小嶋栄子；『在学生調査』からみた長崎短期大学の教育～全国調査との比較から見た本学教育の傾向と対策～、長崎短期大学研究紀要 第22号、(2010)、1-20

以下は、上記「3) 学会報告の1～4」で発表した内容をまとめたものである。

2. 研究の課題と方法

2.1 課題の設定

高等教育ユニバーサル化の進行にともなって、短期大学の入学者の質的な変化・多様化が進展している。入学者の多様化に対応して各短大では、自らの教育理念に基づく「個

性化・特色化」を通して短期大学士の質保証が求められている。そのためには、現在の教育課程や学生支援の全体的な見直しや充実が必要である。

高等教育におけるキャリア教育・職業教育の充実が重要な政策的課題となっている今日、「教養教育と専門教育の適度なバランス」と「人間教育を基本とした実務教育・職業教育」を通して「社会の中心的役割を支える良質で勤勉な社会人」「中堅実務者」の育成を目指す短期大学（注：2008日本私立短期大学協会）は、その最も適切な担い手となりうるはずである。しかしながら、実際に教育の受益者である学生の、職業・実務的な発達やキャリア形成的な観点からの在学中の成長を客観的に測定する方法や、在学中の成果と教育課程の関連性を明らかにした研究は、これまでわが国ではほとんどみられなかった。

本研究は、21年4月に短期大学に入学した学生を対象に、入学前の学習経験や生活、短大への入学理由、短大での学びに対する意欲、学生生活の実態と満足度、短大卒業後の進路希望及び、短大教育に対する評価に関する質問項目で構成された「短大在学生調査」の分析結果を元に、短大生の学習や生活に関する意識や実態をとらえ、短大での学びの実態を規定する要因（入学前の学習経験・短大の学習モードなど）や、短大での学習成果形成プロセスの具体を明らかにすることを目的としている。

本稿は、入学後半年を経過した時点で実施した学生調査に関する一次報告（単純集計結果）である。

今後、本研究プロジェクトでは、同一の対象者（21年度入学生）への「卒業時調査（23年2-3月実施）」と「卒業生調査（23年秋以降に実施）」を予定しているが、それらの調査結果を総合的に分析することを通して、学生調査に基づく短大教育の成果の測定と、教育の到達目標の設定を目指している。

2.2 調査の方法

- 1) 調査の実施：平成21年9月～11月 調査対象短大毎に「質問紙調査」の一斉実施・回収
- 2) 調査の対象：全国48短大（北海道3 東北3 関東6 東京3 中部9 近畿6 大阪2 中四国1 九州沖縄17）の平成21年度入学生 7,859人（女性7,465人 男性374人）

3) 調査対象の属性

調査対象の属性を表2-1に示した。

表2-1 専攻分野別の割合

	人文	社会	教養	工業	農業
N	776	366	99	112	99
%	9.9%	4.7%	1.3%	1.4%	1.3%
保健	家政	教育	芸術	地域総合科学科	不明
320	1947	2778	139	1213	10
4.1%	24.8%	35.3%	1.8%	15.4%	0.1%

※なお、本発表での分野別比較の分析軸としては、「人文・教養」「家政」「教育」「地域総合科学科」「社会」「保健」の6分野を用いることとした。

3. 調査にみる短大での学習・生活と高校までの経験

3.1 入学前の生活や学習

卒業した高校は、普通科が7割（69.1%）を占め、また、全日制出身者が97.3%、年齢は18-19歳が95.5%と、高卒直後に短大へ進学した者がほとんどであった。

高校時代は、授業に出席して試験前には一生懸命勉強するが、予習復習の習慣が確立している者は15%で、1週間の総勉強時間は、2時間に満たない者が半数を超える（57.2%）。専攻分野別では、人文・教養分野の学生は、他の分野に比較して予習復習の習慣が身につけている者が多かった（22.3%）が、地域総合科学科では、6割を超える者が予習復習に熱心に取り組んでいない。

さらに、高校での勉強を「面白くない」「将来役に立たない」「何のために勉強するのかわからない」と感じていた者がそれぞれ、21.8%、22.4%、18.1%で、入学者の2割は、高校の学習に対して否定的な見解を持っているが、その傾向は、地域総合科学科で強い（23.7%、24.3%、23.1%）。逆に、3分の1が高校での学習を肯定的に捉えている。4割の“どちらでもない”を挟んで、短大進学者の学習に対する意識の多様化がみられる。

授業以外の活動に関して、全体では「友達との交際」や「趣味」に特に力を注ぎ、また、「サークル・クラブ・部活動」にも6割近くが熱心に参加していた。また、3分の1の学生が「アルバイト」に熱心に取り組んでいたが、「ボランティア活動」には2割の学生しか取り組んでいない。「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」と「ボランティア活動」は、教育分野が、より経験しており、また、「アルバイト」は、地域総合科学科生の経験率が高い。

3.2 短大生活への期待と志望動機

入学前は、高校とは違う「自由な雰囲気（5段階評価の期待度が4.1以下同じ）」の中で「興味のある分野の勉強（4.2）」や「将来の職業に役立つ勉強（4.3）」をすることや、「新しい友達との出会い（4.3）」を強く期待していた。また、「サークル・クラブ・部活動での活躍（3.0）」「ボランティア活動（2.7）」よりも、「趣味活動（3.7）」「アルバイト（3.6）」といった、学外での活動に対する期待度が高かった。

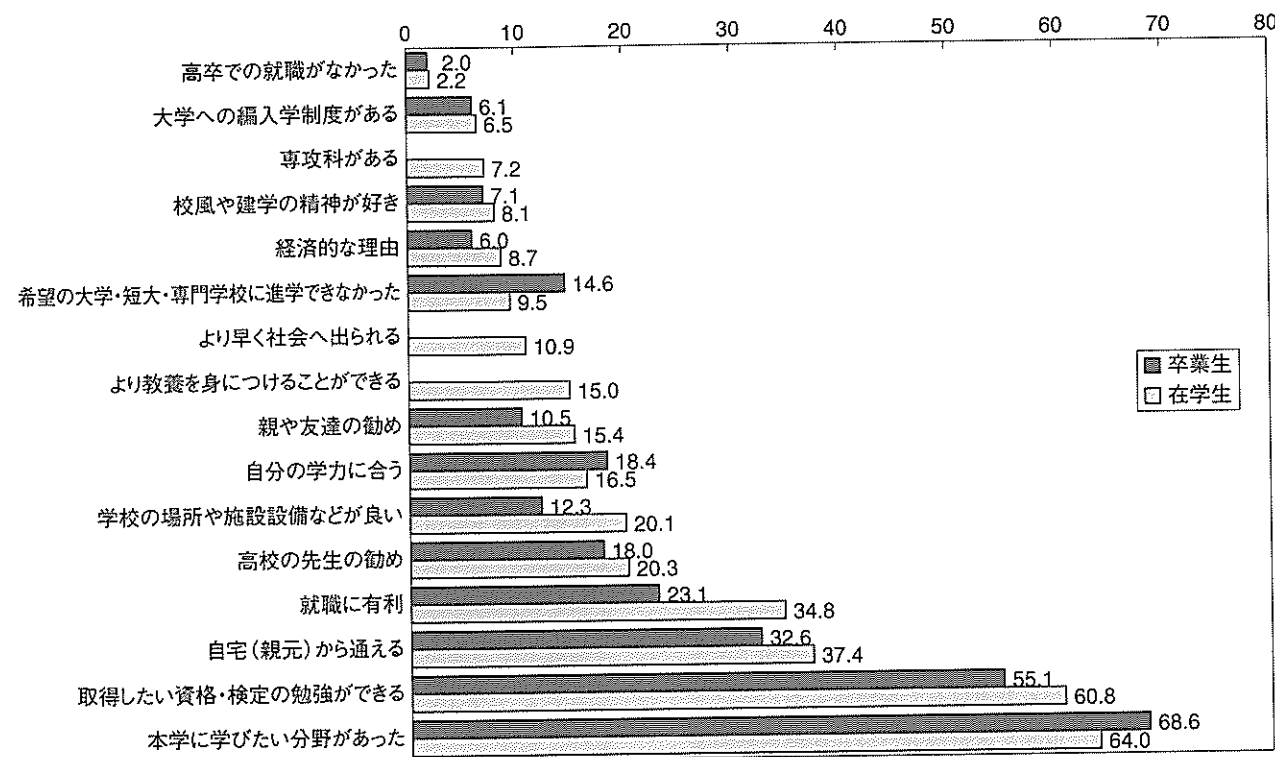
1年前、今在学中の短大が第一志望だった者は約半数で、他の短大を含めて短大を進学先に決めていたのは6割弱であった。その割合は専攻分野間で異なり、「教育（67.0%）」、「保健（64.8%）」で高く、「人文・教養（46.2%）」で低かった。

短大への進学理由は「学びたい分野があった（64.0%）」「資格・検定取得のため（60.8%）」が多いが、「自宅から通える（37.4%）」「就職に有利（34.8%）」も3割を超えている。

短大卒業生調査（注1）と比較すると、在学生の方が「就職に有利」が11.7%、「学校の場所や施設設備などが良い」という理由が7.8%多い。これは短期大学で近年、職業教育や就職支援、また、施設設備面での充実が図られたことを示唆している。また、親や友だち、高校の教師に勧められて進学したという理由も在学生の方が多い。逆に「希望の学校に進学できなかったから」「自分の学力に合っていたから」という理由は卒業生の方が多い。在学生の85%は、推薦・AO入試などで入学している。そのため不本意入学者は減少し、同時に、短大に学力で入学するという意識も低下している。自分の興味関心に合致し将来の職業に役立つかどうかが進学先決定のポイントであり、身近な人々からの意見も参考にして進学していることが分かる。さらに「自宅から通える」と「経済的理由」が卒業生より在学生の割合が高いことは、短大生の進学理由に、家庭の経済状況の影響が強まっていることを示している（図3-1）。

専攻分野別の進学理由を見ると、教育（72.8%）で「資格・検定取得のため」が高く、「編入制度があったから」は、人文・教養（16.3%）で高かった。また、地域総合科学科は「早く社会に出られる」「より教養を身につけられる」「学力に合っていた」以外の理由の選択率は、すべ

図3-1 短大進学理由 (卒業生との比較)



て全体よりも低い。

注1)「短大学生調査」との比較で使用した卒業生のデータは、本研究グループが、全国14短大の卒業後2年目(H15年度卒)4年目(H13年度卒)8年目(平成9年度卒)の卒業生2,835人を対象に、平成17年6~9月に実施した調査結果から抽出している。

3.3 入学後の生活や学習

(1) 力を注いだ生活経験

短大入学前と入学後で、力を注いだ生活経験に関する比較をしたところ、「授業に関する勉強」においては、入学前では41.7%であったが、入学後には64.6%となっていた。これは、5段階評価の4・5を選択したものを高評価群として算出したものである。

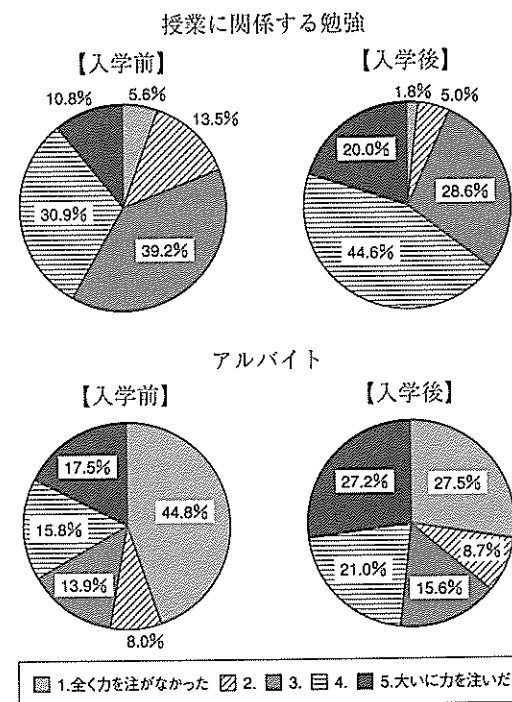
図3-2より入学前のアルバイト経験が33.3%であったのに対し、入学後では48.2%と、約半数が力を注いでいることがわかった。そのほか、「実習やインターンシップ等職場での就業体験」に関しては、入学前後で大きな差はなく、明らかに減少した項目としては「サークル・クラブ・部活動」が挙げられる。これらの結果により、短大は授業数が多いため、サークルや部活に割く時間は高校時代よりも減ったが、家庭の経済状況などからアルバイトには

力を入れているという状況がみてとれる。

(2) 短大生活への満足度

入学後の半年間で、最も高かった満足度は「e. 新しい

図3-2 力を注いだ生活経験 (5段階評価の割合)



友だちとの出会い(4.21)」であり、それに「b. 将来の職業に役立つ勉強(3.81)」「a. 興味ある分野の勉強(3.75)」「f. 自由な雰囲気(3.71)」と続く。

入学前の期待度と短大入学半年時点での満足度を比較すると、11項目中、期待度を満足度が上回ったのは「k:一人暮らし(2.2→3.7)」、「g:ボランティア活動(2.7→2.8)の2項目、同じなのが「d:良い先生との出会い(3.5→3.5)1項目、他はすべて下回った。ただし、「e:新しい友達との出会い(4.3→4.2)は期待度が最も高く、これをやや下回ったとは言え満足度も最も高かった。(図3-3)

3.4 短大での成長

(3) 入学後のアウトカム自己評価

知識・技能・態度の変化に関する自己評価で、“高まった”とする割合が高いのは「b:専門的な知識や技能(75.4%)」、「h:一般的な常識や礼儀・マナー(70.5%)」、「c:幅広い知識や教養(67.3%)」、「i:人とのコミュニケーション能力(67.3%)であり、“変わらない・低下した”とする割合が高いのは「k:リーダーシップ(72.3%)」、「n:自分に対する自信(68.9%)」、「e:ひとつの問題を深く探求する態度(61.1%)である。(表3-1)

(4) 学習や学生生活の実態と職業選択

現在の短大生活や学習に対する評価群を軸として、職業選択要素に差があるかを分析した。

まず、「授業に関する勉強」に力を注いでいると回答した学生は、5,019人と多数派で、その内86.8%が、将来の仕事を選ぶ上で「短大や進学先で得た知識・技能の活用」を重視することが分かった。それに対し、力を注いでいないと回答した学生(530人)で、同項目を重視すると答えた割合は、54.6%に留まった。平均値を比較しても、高評価群の4.4に対し、低評価群では3.6と大きく差が見られる。また、「昇進の見通し」について、低評価群では「重視する」が47.8%、「重視しない」が11.9%と、高評価群に比べて低い傾向にあるが、「余暇のためのゆとり」や「高い収入」に関しては、高評価群との差が現れなかった。

次に、「実習やインターンシップ等、職場での就業体験」に力を注いでいる学生は、職業選択時に「短大での知識・技能(88.4%)」を特に重視する傾向が見られる。これは、重視しないと回答した割合が1.7%と非常に低いことから明らかである。

さらに、アルバイトに力を注いでいる者は、「高い収入(78.6%)」や、「昇進の見通し(63.9%)」を重視し、趣味に力を注いでいる学生は、「余暇のためのゆとり(81.2%)」を重視することが分かった。(表3-2)

図3-3 入学前期待度と入学後満足度の比較

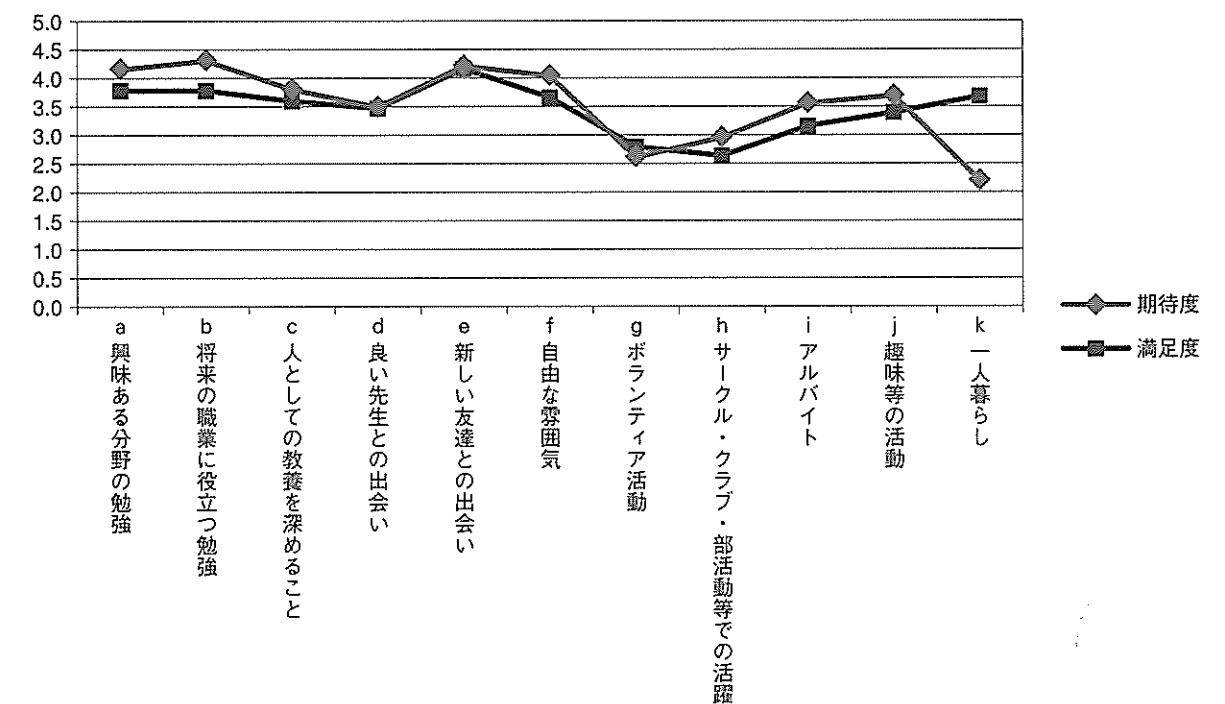


表3-1 知識・技能・態度の変化

		知能・技能・態度の変化								
全体	N	a: 学問に対する興味関心	b: 専門的な知識や技能	c: 幅広い知識や教養	d: 職業や進路選択への方向づけ	e: ひとつの問題を深く探究する態度	f: 多様なものの見方を知って受け入れること	g: 社会の現実的な問題への関心		
		平均	3.7	3.9	3.8	3.7	3.4	3.7	3.7	
	H (%)	61.4	75.4	67.3	62.5	38.9	56.4	60.0		
	L (%)	38.6	24.6	32.7	37.5	61.1	43.6	40.0		
全体	N	h: 一般的な常識や礼儀・マナー	i: 人とのコミュニケーション能力	j: チームで仕事をする力	k: リーダーシップ	l: 自分で考え行動する力	m: 最後までやり抜く力	n: 自分に対する自信		
		平均	3.9	3.8	3.7	3.2	3.7	3.7	3.2	
	H (%)	70.5	67.3	56.6	27.7	58.9	59.3	31.1		
	L (%)	29.5	32.7	43.4	72.3	41.1	40.7	68.9		

平均: 5段階評価の平均、H: 4と5 (高まった)、L: 3と4と5 (変わらない・低下した)

表3-2 短大生活評価別に見た職業選択時の重視内容

	N	E3-a: 短大や進学先で得た知識・技能の活用			E3-f: 余暇のためのゆとりがあること			E3-h: 高い収入			E3-k: 昇進の見通し			
		平均値	重視する (%)	重視しない (%)	平均値	重視する (%)	重視しない (%)	平均値	重視する (%)	重視しない (%)	平均値	重視する (%)	重視しない (%)	
C1-a. 授業に関する勉強	高評価群	5,019	4.4	86.8	2.2	4.2	79.6	3.0	4.1	75.6	3.5	3.8	61.9	5.6
	低評価群	530	3.6	54.6	16.4	4.1	73.3	5.5	4.0	71.3	4.9	3.5	47.8	11.9
C1-c. 実習やインターンシップ等、職場での就業体験	高評価群	2,626	4.4	88.4	1.7	4.2	79.6	3.0	4.1	76.0	3.8	3.8	64.0	5.6
	低評価群	3,150	4.1	76.1	6.1	4.1	76.7	4.1	4.0	73.3	4.3	3.6	53.4	8.2
C1-f. アルバイト	高評価群	3,722	4.2	81.9	3.6	4.2	80.3	3.3	4.1	78.6	3.0	3.8	63.9	5.2
	低評価群	2,797	4.2	81.3	3.9	4.1	77.4	3.1	4.0	70.3	4.5	3.6	53.5	7.9
C1-h. 趣味	高評価群	4,390	4.3	83.4	3.2	4.2	81.2	2.9	4.1	76.6	3.7	3.8	63.2	5.7
	低評価群	1,189	4.2	77.4	6.1	4.1	75.2	4.0	4.0	71.7	3.9	3.6	51.0	9.4

※平均値: 5段階評価の平均 高評価群: 4と5 低評価群: 1と2

3.5 まとめ

短大に入学して来たのは、主体的に勉強する習慣が身につけていないが、資格取得・興味ある分野・職業に役立つ勉強への意欲は強く、新しい短大生活へ大きな期待を抱いた学生たちである。

その彼らの、入学半年時点での自己評価、短大への満足度は若干低くなる傾向がみられた。

高校では勉強に必ずしも意義を見出せず、それでも進学して来た6割の学生を含む彼らに、どんな授業をし、どう教育して、社会あるいは次のステージに送り出すか、が今後の課題である。

4. 学習環境への評価からみる短大のキャリア教育・職業教育

ここでは、「短大の学習環境(教育課程・学生支援)は、学びの中間的な成果を規定する大きな要因である」という視点に立ち、「学習環境」の中でキャリア教育・職業教育

を意図していると考えられる要素(設問項目)に対する満足度の評価を確認し、その方向性を探ることとする。

4.1 教育課程に対する評価

教育課程への満足度をみるため、教育課程の内容を表した各項目を5段階で評価した平均値を表4-1に示した。

このうち、キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる要素は、「a. 選択できる授業の多様性」「b. 豊かな教養を身につける授業」「c. 専門的な知識や技術を身につける授業」「d. 実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」「e. 学外体験(インターンシップ)の機会」の5つである。

全体的に「c: 専門的な知識を身につける授業(3.79)」「d: 実践(職業)で役立つ実学性重視の授業(3.65)」に対する評価が高い。cに関しては、「教育(3.92)」が非常に高い満足度を示しているが、「人文・教養」は3.58、地域総合科学科は3.69となっている。dに関しては、「教育」

表4-1 教育課程に対する評価

学科分類	全体	人文・教養	家政	教育	地域総合科学科
N	7859	875	1597	2778	1407
c: 専門的な知識や技術を身につける授業	3.79	3.58	3.79	3.92	3.69
d: 実践(職業)で役立つ実学性重視の授業	3.65	3.41	3.63	3.87	3.47
b: 豊かな教養を身につける授業	3.46	3.56	3.36	3.54	3.49
a: 選択できる授業の多様性	3.38	3.53	3.29	3.28	3.71
e: 学外体験(実習やインターンシップ)の機会	3.28	3.18	3.17	3.66	2.96
h: 参加意識が持てる授業	3.27	3.36	3.19	3.33	3.23
f: わかりやすい授業	3.26	3.36	3.17	3.35	3.18
g: 授業方法に工夫がある授業	3.25	3.36	3.16	3.35	3.18
i: 私語のない授業	2.88	3.01	2.94	2.84	2.88

が3.87と高評価で答えているが、「人文・教養」「地域総合科学科」はそれぞれ3.41、3.47にとどまっています。学科間の評価のばらつきが大きい。

次に「a: 選択できる授業の多様性(3.46)」「b: 豊かな教養を身につける授業(3.38)」も全体的な評価が比較的高く両者同程度の満足度を示している。しかし内訳を見ると、aでは、「地域総合科学科」が3.71、「人文・教養」が3.53と高評価を示しているのに対し、「教育」は3.28とばらつきが大きい。それに対しbでは、「人文・教養」が3.56、「家政」「教育」「地域総合科学科」も3.36、3.54、3.49を示しており、学科間のばらつきが少なくなっている。

評価が低かったものは「i: 私語の少ない授業(2.88)」「g: 授業方法に工夫がある授業(3.25)」「f: わかりやすい授業(3.26)」「h: 参加意識が持てる授業(3.27)」であった。その内訳をみると、iはすべての学科で評価が低

いが、他の3要素(g, f, h)は、「人文・教養」と「教育」の評価が高く、「家政」と「地域総合科学科」で評価が低くなるという二極化の評価を示している。

4.2 学生支援に対する評価

学生支援への満足度をみるため、学生支援の内容を表した各項目を5段階で評価した平均値を表4-2に示した。

このうち、キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる要素は、「j. 科目履修に関する助言や指導」「k. 就職や編入学など進路選択の励まし」「m. 教員の専門分野に触れる機会」「p. 就職・進路支援の体制」「q. 進路や悩みなどを気軽に相談できる体制」の5つである。

全体的に「s: 図書館や情報設備」「p: 就職・進路支援の体制」「j: 科目履修に関する助言や指導」に対する評価が高い。

表4-2 学生支援に対する評価

学科分類	全体	人文・教養	家政	教育	地域総合科学科
N	7859	875	1597	2778	1407
s: 図書館や情報設備	3.56	3.80	3.56	3.60	3.47
p: 就職・進路支援の体制	3.47	3.61	3.42	3.50	3.45
j: 科目履修に関する助言や指導	3.41	3.46	3.39	3.41	3.47
m: 教員の専門分野に触れる機会	3.31	3.29	3.28	3.38	3.24
l: 学習スキルを向上するための手助け	3.28	3.38	3.24	3.30	3.23
k: 就職や編入学など進路選択の励まし	3.21	3.34	3.18	3.23	3.20
q: 進路や悩みなどを気軽に相談できる体制	3.19	3.30	3.14	3.26	3.15
r: 部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会	3.03	3.08	2.97	3.16	2.94
n: 精神的なケアや励まし	3.02	3.06	2.96	3.10	2.96
o: 授業以外で教員と交流する機会	3.01	3.06	2.98	3.09	2.91

表4-3 分野別短大の学習環境に対する評価

		全体	人文・ 教養	家政	教育	地域総合 科学科	社会	保健	その他	
教育 課程	平均値	3.41	3.41	3.36	3.54	3.35	3.29	3.21	3.32	
	高評価 群	N	3548	396	819	1456	499	138	100	134
		%	46.7	48.1	43.3	53.8	42.6	39.0	32.3	39.6
	低評価 群	N	4054	428	1072	1249	671	216	210	204
%		53.3	51.9	56.7	46.2	57.4	61.0	67.7	60.4	

平均値：5段階評価のa~h項目平均値、高評価>a~h項目合計平均値>低評価

		全体	人文・ 教養	家政	教育	地域総合 科学科	社会	保健	その他	
学生 支援	平均値	3.21	3.28	3.16	3.27	3.18	3.13	3.01	3.21	
	高評価 群	N	3620	445	846	1362	539	166	102	153
		%	47.6	53.9	44.8	50.3	46.1	46.2	32.9	45.3
	低評価 群	N	3987	380	1044	1345	629	193	208	185
%		52.4	46.1	55.2	49.7	53.9	53.8	67.1	54.7	

平均値：5段階評価のj~r項目平均値、高評価>j~r項目合計平均値>低評価

内訳を見ると、pでは、「人文・教養」で60%近く・「教育」「地域総合科学科」で50%近くが「満足」と答えている。sでは、「人文・教養」が60%以上・「家政」「教育」「地域総合科学科」がほぼ50%「満足」と答えている。jでは、「人文・教養」「家政」「教育」「地域総合科学科」とも40%以上が「満足」と答えている。

評価が低かったものは「r：部活・サークル・イベントなど学生同士の交流の機会」「o：授業以外で教員と交流する機会」「n：精神的なケアや励まし」である。これらr・o・nに関して、ほとんどすべての学科で4人に1人が「不満」と答えている。

4.3 分野別にみた学習環境に対する評価

(1) 教育課程に対する評価

a~hの8項目すべての5段階評価の平均値でみると(表4-3)、教育(3.54)、人文・教養(3.41)、家政(3.36)、地域総合科学科(3.35)と続いた。次に、a~hの8項目評価の合計(40点満点)で、全体の平均値27.35よりも高い回答者を高評価群、低い回答者を低評価群として、その割合の違いを分野別にみた(iは、因子分析の結果をもとに除外)。その結果、教育だけが高評価群が5割以上となり、他の分野では低評価群の方が多かった。

(2) 学生支援に対する評価

j~rの9項目すべての5段階評価の平均値でみると、人文・教養(3.28)、教育(3.27)、地域総合科学科(3.18)、

家政(3.16)と続くが、全体的に教育課程に対する評価よりも低かった。

次に、教育課程と同様の手順でj~rの9項目評価の合計(45点満点)と平均値(28.89)より、高評価群・低評価群を分け、その割合の違いを分野別にみた(sは、因子分析の結果をもとに除外)。その結果、人文・教養と教育で高評価群が5割以上であった。

(3) 学習環境に対する評価の各分野の特徴

「人文・教養」は総じて、教育課程でも学生支援でも全体平均よりも高い満足度を示していて、特に「p：就職・進路支援の体制」「s：図書館や情報設備」に対する満足度が高い。

「家政」は逆に、教育課程でも学生支援でも全体平均よりわずかに低い満足度を示しているが、際だった特徴がみられない。

「教育」は、教育課程でも学生支援でもほとんど全体平均よりも高い満足度を示していて、特に「d：実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」「e：学外体験(実習やインターンシップ)の機会」に対しては、突出して高い満足度を示している。

「地域総合科学科」は、「家政」同様、教育課程も学生支援も全体平均より低い満足度を示している項目が多いが、

「a：選択できる授業の多様性」だけに対しては非常に高い満足度を示している。

「社会」は、教育課程も学生支援もほとんどの項目で全

体平均より低い満足度を示しており、特に「a：選択できる授業の多様性」「e：学外体験(実習やインターンシップ)の機会」に対する満足度が低い。

「保健」は、教育課程も学生支援もほとんどの項目で全体平均より非常に低い満足度を示しており、特に「a：選択できる授業の多様性」「k：就職や編入学など進路選択の励まし」「p：就職・進路支援の体制」に対する満足度が低い。

5. まとめ

短大入学後、学生たちは高校時代よりも授業への熱意が高まってきており、短大教育の職業への効用(「専門的な知識や技術を身につける授業」「実践(職業)で役立つ実学性重視の授業」など)は、入学後半年目で学生たちに自覚され始めている。すなわち、キャリア教育・職業教育を意図していると考えられる教育課程は機能し始めていると言っていいただろう。

しかし、このことだけで短大生たちの将来を保障することにはならない。知識・技能・態度の変化でも、「一般的な常識や礼儀・マナー」「専門的な知識や技能」という短期大学卒業生としての二大タイトルを獲得しつつあると自己評価しているが、それを確実に社会的・職業的自立へとつなげていくためには、彼らが高まったと感じている一般常識等が社会が求めているものと一致しているかどうか、また獲得したそれを社会でうまく使うことができるかどうか、短大で得た専門的な知識や技能を、実際の職業的コンピテンシーとすることができるかどうか、あるいはまたその向上につなげることができるかどうか、などの課題がある。

また、教職員への課題として、「専門的な知識や技術を身につける授業」にそれなりの評価を得ていても、その評価のさらなる検証や授業の成果とのギャップの有無しも、どこかで確認する作業が必要である。

そのためには、学生たちからの生の声を積極的に吸い上げる必要がある。このとき「授業以外で教職員と接する機会」と「精神的なケアや励まし」が大きな意味を持つてくる。そのことによって細かいプロセスの途中途中で、教育課程・学生支援などに対する紙の上での「評価5」の意味・「評価2」の意味と、実際の生の評価との擦り合わせをするチャンスが増すからである。

本報告で使用したデータは、平成21年度科学研究費補助金「短期大学教育と地域ステークホルダーに関する総合的研究」(基盤研究B課題番号21330195、研究代表者：安部恵美子)の助成を受けて行った調査のものである。データの数値は2010.4.20現在の速報値である。

また、引用文献、参考文献に関しては、本報告をもとに著す予定の原著論文作成の際、あらためて付記することにした。

【報告】

東海大学福岡短期大学「2010年度リーダーズ研修会」
—初年次教育に向けて—

A Report on 2010 Seminar for Student Leaders at Tokai University Fukuoka Junior College
— A Step toward Education for the First Year Students —

神山 高行*¹ 真下 仁*²

Takayuki KAMIYAMA Shinobu MASHIMO

要旨 本報告は、2011年2月15日～17日、グローバルアリーナ（福岡県宗像市）において行われた東海大学福岡短期大学「2010年度リーダーズ研修会」について報告するものである。報告では、リーダーズ研修会の概要を紹介しながら、本研修が短大教育においてどのような位置付けにあるのか、またその教育的効果とはどのようなものか、について示唆している。同時に報告では、初年次教育に関する講演会の様子や研修に参加した学生及び短期大学コンソーシアム九州連携校の関係教職員に実施したアンケート調査への回答から、短大における初年次教育の現状と可能性も示唆されている。

キーワード 短大教育、初年次教育、リーダー研修

1. はじめに

東海大学福岡短期大学（以下、本文中、本学、と称す）は、短期大学コンソーシアム九州において、「初年次・教養教育の共同開発」事業を主担当校（副担当校：精華女子短期大学、西九州短期大学）として推進している。その事業の一環として、本学では、次年度より新2年生になる1年生を対象に例年実施している「リーダーズ研修会」を学生と教職員がともに初年次教育について考える場として位置づけ、2009年度より、初年次教育に向けてのプログラムを意識した企画を研修に盛り込むこととなった。

今年度の企画は、外部講師による初年次教育に関する講演会を開催し、初年次教育に関するアンケート調査を実施した。参加した学生、教職員、また短期大学コンソーシアム九州連携校の関係者とともに、初年次教育について考える場を設けられたことはたいへん有意義であったと考えている。本報告では、リーダーズ研修会の概要、講演会、アンケート調査の結果を中心に報告する。

2. 研修の概要

2.1 研修日・研修施設・参加者

研修日、研修施設、参加者数については以下のとおりである。

- ・研修日：2011年2月15日～17日（2泊3日）
- ・研修施設：グローバルアリーナ（研修施設 B 棟）
- ・参加者数：57名（内訳は以下のとおり）
- ・本学学生：20名（男子6名、女子14名）
- ・本学教職員：16名（教員11名、職員5名）
- ・外部講師：3名
- ・短期大学コンソーシアム九州関連教職員：18名（精華女子短期大学6名、西九州短期大学部2名、長崎短期大学4名、福岡女子短期大学3名、福岡工業大学短期大学

著者紹介

- * 1 東海大学福岡短期大学国際文化学科准教授
 - * 2 東海大学福岡短期大学国際文化学科教授
- 〒811-4198 福岡県宗像市田久 I-9-1
tel: 0940-33-1177(代)
* 1 e-mail: kamiyama@ftokai-u.ac.jp
* 2 e-mail: mashimo@ftokai-u.ac.jp

部1名、連携GP事務局2名)

参加した20名の学生は、学友会や各クラブ(有志会)の部長もしくは何らかの役職にいる学生であり、学生の所属学科については、国際文化学科の1年生が13名、情報処理学科の1年生が7名であった。なお、学生と研修を指導した本学教職員4名は、施設に宿泊しての研修であったことを注記しておく。

2.2 研修の目的

「リーダーズ研修会」という名称が示すように、本研修の最大の目的は、下級生を指導していく上級生としての自覚の醸成にある。そのためには当然、短大の組織や行事への関心と理解、リーダーシップを発揮するための能力の開発、教職員との信頼関係など様々な要因が関係してくるものと考えられる。本研修に際して学生に配布された冊子「2010年リーダーズ研修会」には次のように研修の目標が掲載されている。

1. 短大組織の理解
2. 初年次教育への理解
3. マネジメント能力の開発
4. 年間行事における学生の役割への自覚
5. 学生・教職員・後援会間の交流

2.3 研修スケジュール・内容

3日間の研修のタイムスケジュールと内容を以下に掲載する。ご参考いただきたい。

・第1日目:

- 09:30 短大集合
- 09:40 短大出発(バスで移動)
- 10:30 開会式
- 10:40 趣旨説明・スケジュールの確認
- 11:00 研修1(校歌斉唱・1分間スピーチ)
- 12:00 昼食
- 13:00 特別企画(外部講師2名による初年次教育に関する講演)
- 15:30 研修2(短大行事・学生組織等に関する説明)
- 18:00 夕食・入浴
- 19:45 研修3(学生による座談会:学生生活について)
- 21:30 自由時間・就寝

・第2日目

- 07:30 起床・朝食・各部屋清掃
- 09:00 研修4(研修3の報告会)
- 09:30 研修5(コミュニケーション能力についてのセミナー)
- 11:00 研修6(外部講師1名によるマネジメント能力についてのセミナー)
- 12:00 昼食
- 13:00 研修7(モチベーションアップに関する講義)
- 14:30 研修8(学友会・各クラブの目標設定)
- 18:00 夕食
- 18:45 親睦会(日帰り温泉旅行)
- 21:00 自由時間・就寝

・第3日目

- 07:30 起床・朝食・各部屋清掃
- 09:30 研修9(研修8の報告)
- 12:00 昼食
- 13:00 研修10(新入生オリエンテーション企画)
- 14:45 研修11(校歌斉唱・研修の感想:1分間スピーチ)
- 15:30 総評・閉会式(アンケート回収)
- 16:00 グローバルアリーナ出発(バスで移動)
- 16:30 短大到着・解散

2.4 特別企画:初年次教育に関する講演会

ここで研修第1日目に実施された特別企画(初年次教育に関する講演会)について報告する。本企画は今回の研修の一つのハイライトとなったものであり、本学学生、教職員、短期大学コンソーシアム九州の関係者から合計で57名が参加した。本企画のタイムスケジュールと内容については以下のとおりである。

- 13:00 開会・学長挨拶
- 13:10 初年次教育とは何か
- 13:25 講演1(韓国と日本の学生事情)
- 14:10 休憩
- 14:20 講演2(企業が短大生に求めるもの)
- 15:05 質疑応答・意見交換・アンケート配布

15:30 閉会

本企画の目的は、短大教育において新入生に対する教育支援の確立が模索される中で、新年度より上級生となる学生たちも交えて、教職員とともに新入生に対する初年次教育について考える機会を持つことにあった。ここで一つお断りしておかなければならない。ここで言う初年次教育とは、いわゆる短大入学後に行われる学習のためのスキルや学生生活に慣れるためのプログラムを意味するのではない。本研修が短大においてあるいは下級生に対して指導的な学生の育成を目的としている以上、それ自身が下級生への初年次教育の一翼を担うことになるというスタンスであることをご理解いただきたい。

2つの講演に関しては、講演1を担当された林鐘大氏(㈱N&H Communications)が「韓国と日本の学生事情」というテーマで、また講演2を担当された沖村大太郎氏(九電工グループ㈱ポータル)が「企業が短大生に求めるもの」というテーマで講演された。講演終了後の意見交換の中で、参加した学生たちからも両講演に対して活発な質疑応答があったことから外国の同世代の学生事情や間近にある就職というテーマは学生にとってもたいへん興味深い内容であったことが推察される。報告者の個人的な感想になるかもしれないが、両氏の講演は、一見立場も内容も異なるようにみえて、実は学生時代になすべき大切なことは、社会的なマナーやエチケットも含めたごく基本的な人間形成がいかに大事であるかということ共通していたように思われる。いずれにせよ、両講演とも学生時代に何をすべきかを考えさせる上で学生にとってもたいへん示唆に富む講演であった。

2.5 研修の成果

研修の成果を数値で示すことは簡単なことである。しかしながら、数値では表せない学生一人ひとりから聞こえてくる生の感想に勝るものはないかもしれない。3日間の様々な研修(コミュニケーション能力、マネジメント能力、新入生オリエンテーション企画、各クラブの年間目標の設定、学生生活についての座談会など)を通じて、最初は緊張していた学生たちも寝食をともにしながら、お互いが徐々に打ち解け合い、研修3日目の最後の1分間スピーチでは、「とても勉強になりました」「参加してよかった」と

いった感想や「がんばります」「これから短大を私たちが盛り上げていきます」といった頼もしい決意表明を聞くことができた。ごく短期間の研修にもかかわらず、学生たちがみみると成長する姿を間近で実感できたことは報告者としても嬉しい限りであった。今後は、彼らの成長を無駄にしないためにも本研修会を教職員が短大の教育の中でどのように生かしていくかが問われることになるだろう。

3. アンケート調査

3.1 アンケートの実施要領

研修に参加した学生及び短期大学コンソーシアム九州連携校の関係者にアンケート調査を実施した。実施数と回収率は、学生20名に対して20名の回収(回収率100%)、コンソーシアム関係者18名に対して10名の回収(回収率62.5%)となった。コンソーシアム関係者の回収率が学生に比べて劣るのは、後日メールでの回答であったことと、同一校で代表者がまとめて提出しているケースがあったことが関係している。またコンソーシアム関係者にアンケート調査の実施を依頼したのは、内輪での評価にならないように、あえて外部評価を意図してのことであった。

アンケートの形態は、学生、コンソーシアム関係者へのアンケートともに無記名式で全ての項目について記述式を採用した。これはアンケートの実施数が多くなく、記述によってより深い問題点が明らかになるためである。以下、アンケートの内容と各項目に対する回答を記載する。

3.2 学生へのアンケート

学生に対して実施したアンケートの質問と各項目、それに対する回答を以下で紹介する。なお、重複している回答については件数を明示している。また、散見された見当違いの回答については除外していることがあることを予めご了承ください。

質問:短大及び上級生から受けたかった支援(具体的に感じた困難や不安とそれに対して可能な支援策について書いてください)

1. 入学前

- ・アパートの紹介をもっと早くしてほしい(2件)
- ・学科の内容についての説明
- ・短大での生活について

- ・進路についての詳細な情報
- ・先輩や同級生について
- 2. オリエンテーション期間中
 - ・もっと上級生や同級生と交流する場がほしかった (7件)
 - ・もっとプログラムを工夫してほしかった (2件)
 - ・履修や授業についての詳しい説明 (2件)
 - ・サークルについての説明 (2件)
- 3. 学生生活に関して
 - ・学生間の交流の場やイベントがほしい (4件)
 - ・学科間の交流が少ない
 - ・上級生と関わる場が少ない
 - ・図書館の利用について説明
- 4. 学習に関して
 - ・上級生の受講態度が悪い・私語がうるさい (3件)
 - ・自宅での学習方法がわからない
 - ・社会で通用する授業をしてほしい
 - ・就職や資格取得についての説明
- 5. 仲間作り・居場所作り
 - ・イベントが少ない (3件)
 - ・学生間の交流の場がほしい
- 6. 自由記述
 - ・もっとみんなが積極的に授業を受けるべきだ
 - ・もう少し編入率を上げてほしい

質問：受けて役立った／良かったと思う支援 (具体的にどのような支援が役に立ったかを書いてください)

1. 入学前
 - ・短大からの連絡や冊子による説明 (4件)
 - ・オープンキャンパスなどでの先輩のアドバイス (4件)
 - ・事務職員との電話での相談
2. オリエンテーション期間中
 - ・友達ができ (5件)
 - ・上級生・先輩との交流 (3件)
 - ・ゼミの先生との距離が縮まった (2件)
 - ・(ゼミの) 先生による学習や学生生活へのアドバイス (2件)
 - ・部活やサークルについての説明
 - ・徐々に短大に慣れることができた

3. 学生生活に関して
 - ・ゼミの仲間や先生と仲良くなった (3件)
 - ・先輩と仲良くなって学校行事に参加し易かった (2件)
 - ・ゼミの先生の指導
 - ・韓国人留学生と仲良くなった
 - ・遠隔地奨学金がありがたかった
 - ・サークルについて
 - ・学内でのアルバイト
4. 学習に関して
 - ・学習習慣が身に付いた
 - ・パソコン実習室の説明が学習に役立った
 - ・ゼミの先生からのアドバイス (3件)
 - ・わからないところはプリントをくれた
 - ・パソコンでのeラーニング学習
5. 仲間作り・居場所作り
 - ・サークルでの活動
 - ・学内でのイベントに参加したこと (3件)
 - ・ゼミで友達ができ (4件)
 - ・沖縄県人会への参加
 - ・オリエンテーションがきっかけとなった
6. 自由記述
 - ・新入生へのイベントがうれしかった

3.3 連携校へのアンケート内容

コンソーシアム連携校関係者に対して実施したアンケートの質問と各項目、それに対する回答を以下に紹介する。但し、紙面の関係で記載されたそのままの回答ではなく、報告者が予め文面を編集している点、特にコンソーシアム関係者の回答は、実際には多くが詳細な内容となっており、報告者によりポイントやキーワードを拾い上げてコンパクトにまとめてあることをお許しいただきたい。また回答者の真摯なご回答にこの場を借りて感謝申し上げたい。

質問：短大として初年次教育で何をすべきだと考えますか？

- ・学ぶ意欲 (ノートテイクなども含む) 作り
- ・学ぶ環境 (人間関係を含む) 作り
- ・学ぶ土台 (社会性を含む) 作り
- ・社会の一員として生きていくための訓練や意識付け

- ・基本的なスタディスキル (漢字、一般教養的な知識、小論文、レポートの書き方、ノートテイクなど) の習得
- ・コミュニケーション能力などを含む人材の育成
- ・高校との教育との違い (学びへの自立性)
- ・参加型学習の実施
- ・社会で役立つ体験学習 (ボランティアなど)

質問：新入生が短大に慣れ、短大生として自立するまでどのような支援ができると考えますか？

1. 入学前
 - ・授業形態の違い (90分授業など) を事前に知らせる
 - ・学びへの興味を持続させる支援 (ネットワーク環境の活用など)
 - ・早期決定者 (推薦入学生) への事前指導 (レポートのやりとりや短大でのプレ授業)
 - ・建学の精神／シラバス配布／模擬授業への参加
 - ・短大の様子 (学生生活や規則) を Web などで事前に知らせる
 - ・事前の学校見学／教職員との交流
 - ・自学自習への習慣づけ
2. オリエンテーション期間中
 - ・図書館などの施設紹介、事務説明など (2件)
 - ・資格取得や履修についての説明
 - ・上級生による学校説明 (授業、学生生活、就職など) (2件)
 - ・オリエンテーションにおける仲間作りと短大生としての自覚
 - ・小グループによる活動 (簡単なコミュニケーション活動)
 - ・教職員／上級生との交流の場の設定
 - ・全体ガイダンスとゼミレベルでのガイダンスの区別
 - ・短大における学び (高校との違い)
3. 学生生活に関して
 - ・教職員の学生支援に対する統一意識
 - ・アパートやアルバイトなどの情報提供
 - ・学生自治活動 (有志会や学友会) を通じての仲間作りと学生生活の充実
 - ・学生としての生活習慣・自己責任 (2件)
 - ・相談事／悩み事に対応できる教職員

4. 学習に関して
 - ・精神的学習習慣 (授業態度、学ぶ喜びなどの説明) への関与とスキルの学習習慣 (ノートの取り方、図書館の利用の仕方など) への関与
 - ・「やればできる」から「やるからできる」への学習支援
 - ・個人の能力差／学力差を考慮しての (グループ・個別) 指導
 - ・卒業に向けての明確な目標を学生自身に設定させる
 - ・施設 (図書館、パソコンなど) の充実 (2件)
 - ・資格試験や地域の講座などの情報提供
 - ・授業 (単位修得までの流れ) と社会との繋がりを認識させる
 - ・授業外での学びへの環境作り (学習会など開催)
5. 仲間作りや居場所作り
 - ・サークル／クラブ活動への積極的な勧誘 (3件)
 - ・友達作りの場 (学生サロンなど) の提供
 - ・学生と教職員のコミュニケーションを活性化するためのイベントやディスカッションなどの実施
 - ・集団の形成が人工的に作り上げた場合、弊害が生じることもあるので教員が介入する際は、慎重に行うべきである
 - ・ゼミ単位での行動を中心に学生に役割を見つけさせる
6. その他、短大がすべきと考える支援について書いてください。
 - ・早い段階で「自分の将来像」をイメージさせ、実現させるための仕組みを用意することが必要である
 - ・支援とは、サポートするだけでなく、自立心を引き出す意味合いも考慮すべきである。
 - ・学生自治 (学校行事や学生生活など) による成長が大きい、学生自治から様々な学び、他大学との交流、地域との連携などへと広げるべきである。
 - ・地域との連携 (ボランティア活動など)
 - ・学業や健康や経済面への支援に対する相談窓口の明確化

3.4 アンケート結果

記述回答であるので、データの分析を完璧に行うことは難しい。紹介した学生のアンケート結果とコンソーシアム関係者のアンケート結果についての判断は読者諸氏に委ね

たいと考える。しかしながら、両者のアンケート結果からいくつかの顕著な特徴もみえてくる。それをここで二つまとめておきたい。まず一つ目として両者に共通した最も顕著な特徴として挙げられるのは、短大が様々な学びの場である以上、学生同士、あるいは学生と教職員といったスムーズで効果的な出会い（コミュニケーション）の場を両者は求めているということである。それがオリエンテーションであったり、クラブであったり、ゼミであったり、あるいは様々な施設であったりするわけである。しかし、学生と教職員では当然立場が違ってくる。前者は求める立場であり、後者は提供する立場ということになるが、コンソーシアム関係者のアンケートの結果が示すように、教職員サイドとしては、そうした出会いの場に何らかの教育的効果を結びつけて学生に提供したいと模索する姿が窺えるのである。

もう一つの特徴は、技術面、精神面も含めて短大レベルへの専門教育にいたる以前の基礎学力の問題に集約されるように思われる。高等教育機関での学力低下が叫ばれて久しいが、基礎学力や学習習慣の欠如は、「わからない」「わからないからやらない」「やらないからわからない」という学びへの悪循環を生み出す最大の要因と言える。無論、基礎学力の問題は、初等教育や中等教育との関連の中で議論されるべき問題かもしれないが、現在のところでは、短大教育の中で独自に解決を迫られているのが現状であろう。

以上の2点が、短大の初年次教育において改革が急がれている部分であると報告者は考えている。

4. おわりに

少子化、大学全入時代、ゆとり教育の弊害と短大を取り巻く環境は厳しい。また四年制大学と専門学校と競合する中で短大の存在理由が現在問われている。教育にメソッドはあっても、ケース・バイ・ケースであれば、結局のところそれぞれの状況でそれぞれのやり方で対応していくしかない。また教育改革には膨大な時間と労力と資金と理解と協力が必要なこともわかっている。本報告では、短大の様々な活動において上級生として学生自らが指導的役割を自覚してもらおうことが、新入生に対する初年次教育に不可欠な要素であるという、ほんの一例を提示したにすぎない。しかし、この小さな取り組みを今後とも初年次教育の中で育んでいきたいと考えている。ご指導、ご鞭撻など頂ければ幸

いに思う次第である。

参 考 資 料

- 1) 東海大学福岡短期大学「2010年度リーダーズ研修会」の冊子

【報告】

中学一高校一短大の連携事業を通じたキャリア教育に関する シンポジウム報告

Report of Symposium on Career Education through Partnership
among Junior High and Senior High Schools and Junior Colleges

田尻由美子*¹ 武部 幸世*²

Yumiko TAJIRI Sachise TAKEBE

要旨 本年度における短期大学コンソーシアム九州の事業の一つとして、「高校一短大連携事業」の全国実態調査に取り組んだ。今回はさらにこの調査結果を深化させ、高大連携事業のさらなる取り組みの推進に寄与するため、「中学一高校一短大の連携事業を通じたキャリア教育に関するシンポジウム」を開催した。高校一短大連携事業の事例や高等学校・中学校での進路選択・進路指導の実態などを報告し、また、パネルディスカッションによって短期大学の課題について提言を行った。

キーワード 高校一短大連携事業、キャリア教育、出前授業、附属高校、専門学校

1. 目的

このシンポジウムによって、高一短大連携事業の短大モデルを提案し、また中学・高校のキャリア教育の実態を知ることによってキャリア教育の課題を共有するとともに、中学一高校一短大連携でできることなどを明確にする。このシンポジウムの結果を踏まえ、平成23年度以降の各短大の高校一短大連携事業の推進に役立てていくことを目的とした。

2. 概要

実施要領は表1のとおり。概要を以下に示す。

第I部では、「学びの継続性の追求」を一つのテーマに掲げて高大連携の取り組みを実施している。「学び」には幅の広さと弾力性と継続性が求められ、これは学びの内容

著者紹介

- * 1 精華女子短期大学幼児保育学科教授
 - * 2 精華女子短期大学生生活科学科食物栄養専攻講師
- 〒812-0886 福岡市博多区南八幡町2-12-1
tel: 092-591-6331
* 1 e-mail: tajiri@seika.ac.jp
* 2 e-mail: takebe@seika.ac.jp

と方法の多様性あるいは国際交流も含めて考えており、幼児教育から高等教育への学びの連続性ということを常にうたっていく。

9年目となる附属高校対象の出前授業は、今年は人間総合科、生活学科、幼児教育保育学科、ビジネスコミュニケーション学科で実施した。

県立高校生を対象とする大学連続講座では、滋賀県の教育委員会との協定に基づき、17年度から参加している。

4月上旬に各提携大学から計画書を県教育委員会に提出し、それに基づき県教育委員会から公立高校に募集をかける。

6月中旬頃締め切り、7月下旬から講座を開始する。これは短大での授業が基本。今年度については「好感の持てるビジネスマナーを身につけよう」「e-mailの本文を英語で作成しましょう」「保存食を作ろう」「保育者になるための学びと就職後の学びについて」など。一応これを終わると修了証を渡すようにしている。受講生の感想としては、「大変興味を持てた」、「よく理解できた」、「大学の講義らしかった」、「講師の先生の話はよく理解できた」など非常に好評だが、高校との授業のつながり、「学びの継続性」という

表1 実施要領

1. 日 時	平成22年12月24日(金) 13:00~16:00
2. 会 場	精華女子短期大学 記念ホール 〒812-0886 福岡県福岡市博多区南八幡町2-12-1 TEL092-591-6331
3. プログラム	司会進行 香蘭女子短期大学 准教授 中濱 雄一郎 氏
13:00~13:05	会場挨拶 精華女子短期大学 学長 井上 雅弘 趣旨説明 精華女子短期大学 教授 田尻由美子
13:05~13:55	第Ⅰ部 高校-短大連携事業の短大モデルを学ぶ ①「高校-短大連携事業の全国実態調査」報告 精華女子短期大学 教 授 田尻由美子 ②「滋賀短期大学における高校-短大連携事業について」 滋賀短期大学 学 長 板倉 安正
13:55~14:05	質疑応答
14:05~14:15	休憩
14:15~15:15	第Ⅱ部 進路指導の実態を知り短期大学の課題を探る ①「高校-短大連携事業から見てきたこと」 福岡工業大学短期大学部 教 授 小田 誠雄 ②「高校生のキャリア教育の実態と短期大学に求めること」 福岡工業大学附属城東高等学校 工業科長 矢野田 篤 ③「中学生のキャリア教育の実態と短期大学に求めること」 中間中学校 教 諭 竹口 幸二
15:15~15:55	第Ⅲ部 パネルディスカッション「中学-高校-短大の連携事業を通じたキャリア教育について」(次年度の進路相談会に向けて) コーディネーター 九州大学教授/コンソーシアム研究センター長 吉本 圭一
15:55~16:00	閉会挨拶 長崎短期大学 学長 安部 恵美子

ことには残念ながらもう一步だったので高校生と短大生が関わりを持つような高大連携を増やしていけたらと思う。

近隣の3短期大学を含む「環びわ湖大学コンソーシアム」が今年度からできあがり、全13大学が加盟してやっている。別に京都と滋賀が一緒になった京滋私立短期大学協会という組織があり、短期大学だけの組織もいいのかという思いをしている。一応、環びわ湖大学コンソーシアムに加入して、できるだけ滋賀県の高校生に関わるようにしたいと思っている。

ミシガン州と滋賀県の高校生相互訪問による環境学習という取り組みをしている。ミシガン州立大学のアジア研究センターから提案があり、本短大で受けて平成20年度は本学の附属高校生との連携が始まった。もう少し滋賀県の県立大学の高校生とも一緒にやりたいという要望で今年ようやく県立大津高校と提携を結んだ。

本学では働くための学び、働きながら学ぶということをキーワードに循環型キャリア教育と呼ぼうとしている。高大連携をこの循環型キャリア教育の中に位置づけて、更に進化、充実を発展させることに努めていきたいなと思って

いる。

質疑応答

全国実態調査で教員の負担を少なくする方法の例があるのか、併設校で協定を肯定的にとらえている割合が少ない理由がわかるかなどの質問が出たが、今回は概観が示されただけにとどまり、具体策を読み取るまでの情報は得られなかったとの回答があった。

滋賀短期大学の事業運営についての質問があったが、日時、回数やテーマの設定などの調整や取りまとめに関しては県教育委員会がやっている。連続講座の方はテーマを高校訪問時に持っていき要望のあった高校と連携をして行っている。附属高校とは高大連携ワーキングを作って毎年初めに話し合いをしているとの回答であった。

第Ⅱ部①の報告では、高校-短大連携事業の紹介として、併設・一般高校と短大の同系列分野(情報など)に対して単位互換協定を結び、高校生対象の短大講座や体験授業を実施している。また、併設校との連携で、高校生向けCAD検定の資格対策講座の実施、リメディアル教育を高校教員が担当などのトレードオフなどの具体的紹介があった。問題点としては時間割の調整、もっと難航したのが年間スケジュールの調整。何れも担当の先生と密に話し合いをして解決していった。また、臨時的な時間割変更、高校側で何か問題があるとショートホームルームの時間を長くしてやる、学年集会を入れるというような運用上の問題がいくつかでてきた。一番難しかったのは授業運営で、一学期間同じテーマでの話だとどうしても高校生は飽きてしまう。高校生相手の授業がいかに大変かということを経験した。また、成績評価の方針が違い、高校側は全部の授業に出てきたら単位を与えてほしいということだった。

こういった連携教育を通して見えてきたことは、中高生の短大に対する認知度が非常に低い、中学校の先生との情報交換においても、中学生は短大の事を考えていないと言われた。特に、中学の時に進路を考えている子は大学を考えている。そして短大志向の層はその時点では何も考えていない。入試間際にならないと短大への進学希望が出てこない。幼児保育科あたりは早くから考えているのではないかなと思うが、工業系は最後の最後にならないと出てこない。高校の先生も短大と専門学校の違いが良く分かっていない。つまり中高生の短大認知度が非常に低いということ、何か

うまい方法を使って打破することができれば、まだまだ生徒を短大へ引き込む事ができるのではないかな。

あたりまえの話だが高校生は大学生より若い、年々学生が入ってくると精神年齢が落ちていると感じている。高校生の授業を持ってみると理由がよく分かる。将来に対して全然考えていない。高校の先生達はきちんと授業をやっているので授業運営の力は短大の先生に比べて数段高い。今後、高校側と相談を十分行って高校生にとって魅力的な連携教育にする必要がある。最後にコンソーシアムの提案として高短連携教育で得た高校生の単位を他の短大でも互換単位として認めていくといった単位互換制度を確立できないだろうか。早めに囲いこみをしてしまえば短大への進学が増え、短大全体のメリットになるのではないかな。

第Ⅱ部②の報告では、城東高校の進路選択の経緯についての紹介、進路選択指導の実際、平成21年度の進路状況についてなどの紹介があった。

短期大学に求めるものとして「教育力」、「就職力」、「アピール力」がある。「教育力」としては、短期大学には実学教育を求めることが大きく、多くの短期大学が対策を取られている。しかし専門学校との境界が不明瞭になっているように感じる。教育を充実させながらも専門学校と異なり人間力、教養力の育成を実践していくことを明確にしていくことで短大の希望者が増えるのではないかと考える。

「就職力」については、就職率が高いというのが短期大学のアピールポイントだと思う。しかし、就職先を見ると大学卒並みの優良企業に就職している一方で、授業料から見ると専門学校の方が安いのに、専門学校卒・高校卒と同内容の就職先が目立っているようにも思われ、保護者から違うということを示してもいいのかなと思う。そのためにも就職率の向上も大事だが、就職先の充実を図る必要があるのではないかなとも思っている。

「アピール力」については、短期大学から高校、保護者、生徒に対するアピール力が専門学校に遅れをとっているように思う。広報物に関しても専門学校はアピールする点を前面に打ち出しているのに対し、短期大学はパンフレットの中に隠されているという感じがする。もっと見たいと感じにさせるために、もう一工夫必要があるのではないかなと思う。また高校に対するアピール力も弱い。個人情報保護

法の問題もあるが、卒業生の情報が短大から高校へ流れにくくなっているように思う。もっと積極的に活用してもいいのではないだろうか。高校側が進めたいと思う短大は、卒業生が生き生きと学生生活を送っている短大である。例えば、自分の母校に卒業生を送る方法もいいのではないかなと思う。卒業生の実際の姿をみて、生の声を聞くことがどの宣伝よりも効果がある。アピールという点に関しては、専門学校をよく研究し、戦略をたてて、まず高校、生徒、保護者に対して短大自体を理解してもらう方策が必要である。中学校の募集活動をする中で、短大をアピールしても中学生は興味を持っていないという言葉聞く。5カ年接続教育で実施したいと考えており、短大を希望する生徒がいたら城東高校へ送ってほしいといい、高校と中学校との連携を密にしている。実際に数年前より高校の先生が中学生に対して体験授業や高校の説明を行っている。本校は短大も大学もあるため、短大・大学の先生に中学の授業をしてもらう中で、少しでも短大や大学を意識してもらえよということに取り組んでいる。

第Ⅱ部③の報告では、前任校である中間市立中間南中学校での、10年間の間に少しずつ構築してきた「キャリア教育」の取り組みについての報告があった。

進路指導は、平成14年度の第1学年より総合的な学習の時間と関連させた啓発的体験活動に取り組みはじめ、3年間を見通した進路指導を目指した。特に、様々な人との出会いや体験活動を計画的にもつことを通して、自らの課題を見出し、将来の生き方を考える生徒の育成(自分を発見し、自らの未来をつかもう)という研究主題を設定した。

第1学年の取り組みから「生き方学び講座」の事例として、自然体験教室での「農業体験」、「職業人への直撃インタビュー」、プロの技を体験する「職業セミナー」、第2学年の取り組みとして、「高校の先の学習の場を見てみよう」などがある。生徒たちは3年間で延べ150人以上の大人と出会ってきた。生徒には「生き方学び講座」は進路学習であり、「他者との出会いの場」であるという意識も育った。一方、教師自身にとっても、生徒に「この人に会わせたい」という意識も高まり、普段から他の職種の人に積極的に関わりはじめたことも成果といえる。

事後に作成した報告レポートや感想文等は、ポートフォリオに綴じて3年間の成長記録として残す。また、今年度

の職場体験学習の報告では、報告レポートとは別に国語科と連携して表現活動の授業を行い、職場へのお礼のメッセージをVTRに撮影し、DVDにして事業所に報告レポートとともに配布した。このような取り組みによって、より確かな学びにすることができたと感じる。

この取り組みを通しての成果は、①進路学習と総合的な学習を関連づけて取り組んだのでより内容が深まった。また、身につけさせたい力を整理することができた。②各学年の総合的な学習の時間の担当や進路指導の担当教師が話し合っ、計画、実践、評価、修正をくり返し改善したので3年間を通して充実させることができた。③他者との出会いの繰り返しをすることで、生徒のコミュニケーション能力が高まった。

課題としては「生き方学び講座」が形骸化しないよう、また、取り組みの成果を検証するための卒業後の追跡調査を行う必要がある。地域の人材を活用した体験活動の実践を行う過程で、地域に様々な人材が豊富にあることがわかった。生徒は職業人の生の声を聞くことによって、「仕事に就ききっかけ」や「仕事の生きがい」など、生き方について深く考えることができた。出会いを通して地域の大人たち（親以外）に守られ、育てられているという意識が育ってきた。人材が蓄積され学校の財産化に帰することは成果であるが、大切なことは生徒の実態をふまえ、教師の「この人に会わせたい」という熱い思いであることを忘れてはならない。

趣旨説明

第Ⅲ部では、第Ⅰ部、第Ⅱ部での内容を確認しながら、特に短期大学の将来構想について議論したい。短期大学が社会の中で、そして、中学や高校の進路の先生にとってすら見えにくくなっており、これは相当大変な課題であるが、逆に高短連携事業に中学校をも含めていくことによって短期大学の役割を見出せるのではないかとという設定で議論していく。

キャリア教育とは、社会的、職業的な自立に向けて色々な力をつけなければいけないということだが、育ってほしい力として一番下には基礎的汎用的能力があり、上には専門的な知識・技能、創造力がある。一番基礎的な汎用能力、つまり人間関係形成、社会形成能力、自己理解自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力というよう

なもの学校教育で見過ごされてきた。特に人間関係形成能力だけでなく社会を形成する力が、今かなり議論されている。高大連携事業の全国調査報告や登壇者からの発言でも色々な取り組みがあったが、誰がリソースになって誰を教育するのか。短大の先生が高校生を教育していくというのが典型だが、反対に高校の先生に短大生を教育してもらうとか、高校生と短大生が交流することで高短連携の充実が可能になることなどいろいろな事例として指摘されていた。短大の授業という学習環境リソースから学ぶ、短大生から高校生が学ぶ、高校生から短大生が学ぶという双方向の教育効果もある。こういうような短大と高校の間で出来ることを考え、また、高校の先生や生徒に対して短大が提供できる固有のものとは何か、大学とは違う、専門学校とは違う、短期大学の高校にとっての価値、PRできる点などを見つけていき、連携をしていくことが大切であろうと思います。この点について意見を聞きたい。

小田先生 実践的な教育など、大学では座学でしかやらないことを短大では実際に物を見せて教育をしていく。専門学校と大学との中庸のところというのが短大のポジションだろうと思われる。連携教育のメリットとしては短大の2年間では時間的に育たないところを高校から短大のカリキュラムを一部おろしていくことで短大卒業時に焦点があうところが一つメリットかなと思う。

板倉先生 大学連続講座でみると、たとえば保育者になる為の学びとそれから卒業後にそれをどう学ぶかということに高校生は関心があって結構参加してくれる。推薦入試の面接で、保育士を目指した理由に中学校時代の保育所の職場体験が参考になっているという。しかし、入学後きちり教育していかなければならないという難しい問題があるが、中学校の職場体験はプラスになる面もある。我々自身の教育力が試されているのかなという思いで学生を受けている。

矢羽田先生 大学は4年間、短大は2年間、2年間早く社会に出ていくわけで、社会に出て行くにあたって大学と同等の就職先に行けるのであればかなり魅力は感じる。ところが色々聞いてみると専門学校とほとんど変わらないというのがあると思う。

竹口先生 教師でも保護者でもそうだが、大学、専門学校、短大について、中学校で学ぶというのは高校も決まってい

ば仕事も何につくか分からないのに職場体験なんかはしなくてもいいとなる。遠くを見通して段々近くの事を考えていくことが大切で、当然短大や大学、専門学校のことを知っておく必要がある。ただ、教師はほとんど4年大学に行っている短大の良さが分からないし、短大のイメージがまったく無いといってよい。専門学校や4年の大学との違いが分からない。2年であっても4年以上の価値があると人気があるのかと思うが、値打ちというかそれがどこなのか教えていただきたい。

(以下、ディスカッション内容を省略する)

まとめ

吉本先生から短期大学の固有の役割について、地域とのつながりが強いことやマンモス大学ではない適正規模での親身で丁寧な指導を実現しているなどの指摘があり、このような良さをもっと探して強調する必要があるとの助言があった。また、短期大学と高校間での単位互換などの可能性について小田先生より提案がなされ、短期大学コンソーシアム九州の今後の事業推進に係る意見が出された。

閉会挨拶

長崎短期大学学長安部先生から地域の短大が連携して、単位互換制度などのキャリア教育に通じるコンテンツを開発し、地域の高等学校に提供することで短大の理解が深まるのではないかと。また、短大は大学でも専門学校でもなく、よく見えない、中学生も高校生も進路選択肢に入れていないかもしれないが、近年の高等教育のユニバーサル化に反して、このようなアカデミックバージョンになじみにくい人もおり、高校から職業に結び付ける一つの選択肢として、2年間の短大の存在意義があるように思う。短期大学の学びは2年間で完結するものではなく、循環型学習社会を本場の意味で形成するのが短期大学の役目ではないかとも感じている。高校生、中学生、もっと下の子どもたちに短大を知ってもらい、理解をしてもらうのが短大の使命であり、この研究会の1つの役割ではないかと感じている、とのまとめがあり本研究会が盛会に終わった。

【報告】

合同 FD/SD 研修会「地域に愛される魅力ある短期大学」

Joint FD/SD Seminar “Attractive Junior College loved by the Community”

武藤 玲路*

Ryoji MUTO

要旨 本研究の目的は、短期大学コンソーシアム九州が2010年8月下旬に開催した合同 FD/SD 研修会の「成果と課題」を分析し、今後の FD/SD 活動の一助とすることである。分析の方法としては、「教職員レポート」「分科会・全体会報告書」「研修会アンケート」の3つの質的データを分類・整理して集計した。

まず、教職員レポートでは、テーマ別・短大別に分類し、重要と思われる事業内容や取り組みを示すキーワードを抽出して、その出現頻度を集計する方法で質的データのテキスト分析を行なった。その結果、「FD/SD 活動のレベル」が高い短大は、「入学生支援のレベル」と「卒業生支援のレベル」も高いことが示唆された。また、研修会終了直後のアンケートの集計結果は、いずれの設問についても十分満足のいく成果を示しており、研修会に参加したほとんど全ての短大関係者に対し、大変有意義な「情報交換」と「連携強化」の場を提供することができたと思う。

キーワード FD、SD、研修会、短期大学、コンソーシアム

1. 背景と目的

近年、教育の現場では、教育の質保証を目的とした FD (Faculty Development: 教員の資質向上・職能開発) と SD (Staff Development: 職員の資質向上・職能開発) の活動が、文科省の指導により盛んに実施されている。

FD に関する研究は、川島等 (2009) の研究グループによる体系的な取り組みをはじめ、日本高等教育学会シンポジウム (2009年) においても、佐藤、池田、羽田が再定義をしている。また、四国地区の大学コンソーシアムでは佐藤等 (2010年) が、九州地区の短大コンソーシアムでは石原、白川・藪 (2007年) が、FD/SD 研修会のプログラム開発について、その取り組みを報告している。

しかしながら、このような FD/SD 活動は各大学・短大

で多くの課題や問題を抱えており、現在はその方法を試行錯誤の手探り状態で模索しているのが実情のようである。

そこで、福岡・佐賀・長崎県内の9つの短大が加盟する「短期大学コンソーシアム九州」では、九州地区の短大の教職員が合同で FD/SD の研修会を開催することで、短大教育関係者全体の職能開発と短大全体の質の向上に取り組むことにした。具体的には、今、短大の教職員に求められている全学的で組織的な「教育力」と「学生支援力」の向上を図るとともに、参加者相互の「情報の共有」と「連携の強化」を目的とした。これにより、「地域に愛される魅力ある短期大学」への改革・改善を目指した。

この報告書では、上述の短期大学コンソーシアム九州が2010年8月下旬に開催した合同 FD/SD 研修会の「成果と課題」を分析し、今後の FD/SD 活動の一助とすることにした。

著者紹介

*長崎女子短期大学生活科学科准教授
〒850-8512 長崎市弥生町19-1
tel: 095-826-5344
e-mail: muto@nagasaki-joshi.ac.jp

2. 研修会の方法

研修時期：2010年8月18日～8月19日の1泊2日。
 研修会場：長崎全日空ホテル・グラバーヒルにて。
 参加者：九州地区の短大教職員、大学・高校の教員、計124名。男性74名(59.7%)、女性50名(40.3%)。教員83名(66.9%)、職員41名(33.1%)。短大数は、短期大学コンソーシアム九州加盟校の9短大を含めて、計14短大。
 研修日程：2日間の研修会の日程は、講演会、全体会・分科会、ポスター発表、懇親会で構成されている(資料1)。
 テーマ：統一テーマを「地域に愛される魅力ある短期大学—短大教職員の教育力と学生支援力のための合同FD/SD研修会—」とし、「入学生の多様化と短大での学び」「卒業生のキャリアと地域に愛される短大」「魅力ある短大のためのFDとSDの開発」の3領域9テーマについて、参加者が提出したレポートに基づいて討論した(資料2)。

3. 集計の結果

今回の研修会の成果と課題を検討するために、①教職員レポート、②分科会・全体会報告書、③研修会アンケートの3つの質的データを分類・整理して集計した。

3.1 教職員レポート

教職員レポートは、研修会参加者の全員が事前に9つのテーマの中から3つのテーマを選択して作成した。その教職員レポートをテーマ別・短大別に分類し、それぞれ重要と思われる事業内容や取り組みを示すキーワードを抽出し、その出現頻度を集計する方法で「質的データのテキスト分析」を行なった。以下にその集計結果を示す。

(1) 全体的な取り組み

図1は「教職員レポートのテーマ選択状況」である。参加者が個別に選択したテーマの中で最も多いのは、「初年次・教養教育49.2%」と「社会人基礎力63.7%」「FDの開発43.5%」である。

図2は「研修会参加短大の取り組み状況」である。短大別に積極的に取り組んでいるテーマは、「初年次・教養教育85.7%」「社会人基礎力78.6%」「FDの開発71.4%」で、消極的なテーマは「地域人材養成14.3%」「SDの開発14.3%」

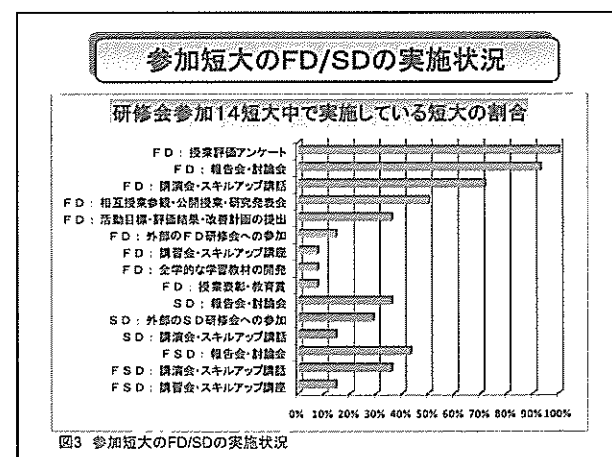
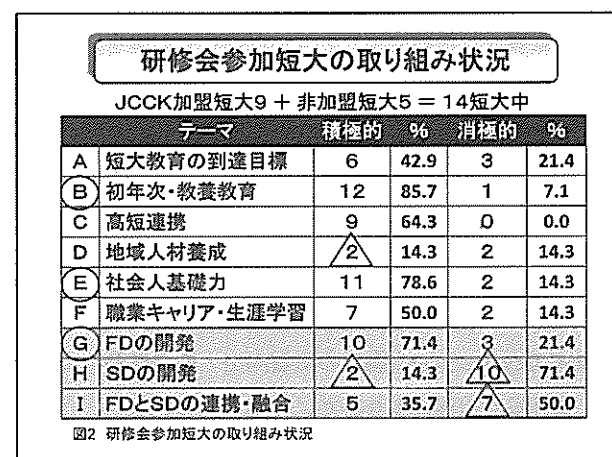
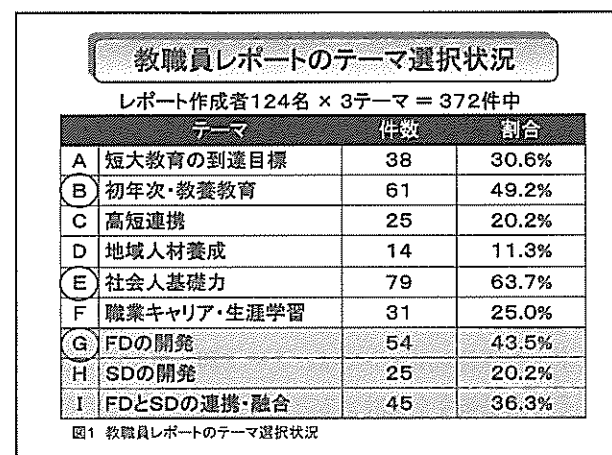
「FDとSDの連携・融合35.7%」である。

(2) FD/SDの取り組み

図3は「参加短大のFD/SDの実施状況」である。FD

で多い活動は、「授業評価アンケート100%」「報告会・討論会92.9%」「講演会・スキルアップ講話71.4%」「相互授業参観・公開授業・研究発表会50.0%」「活動目標・評価結果・改善計画の提出35.7%」の順である。SDでは「報告会・討論会35.7%」であり、FDとSDの連携・融合(以下FSD)でも同じく「報告会・討論会35.7%」である。

図4は「参加短大のFD/SDの成功点・成果」である。



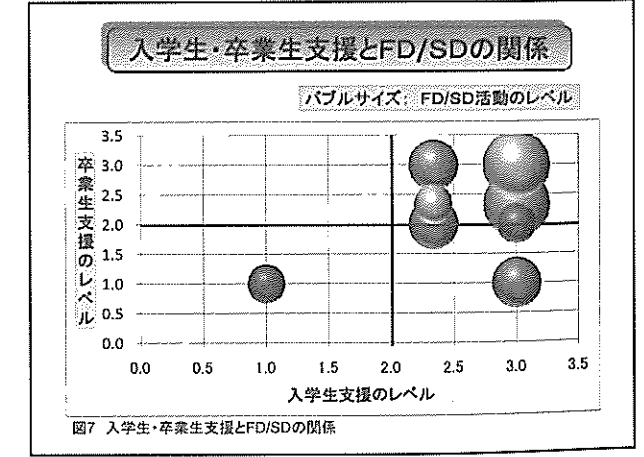
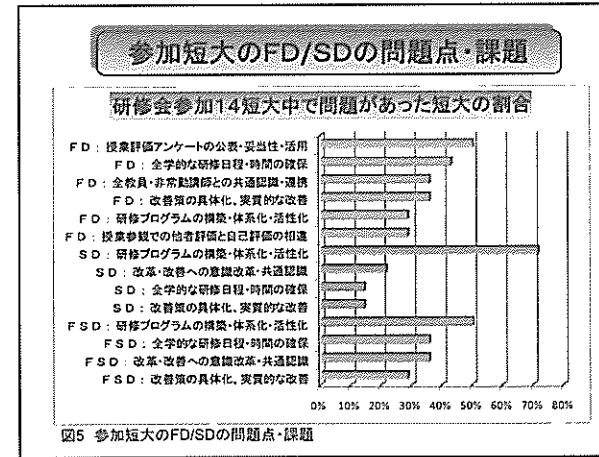
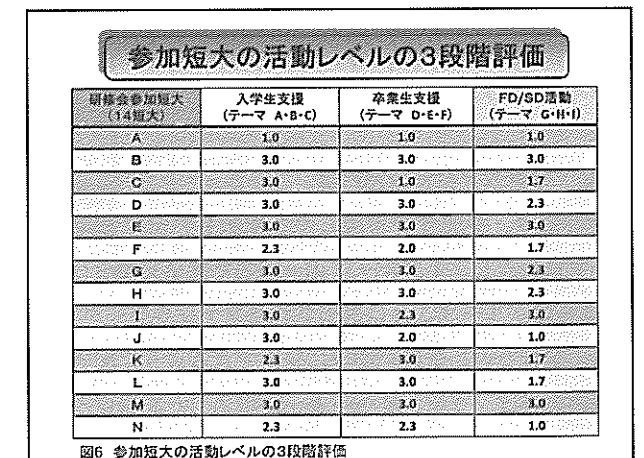
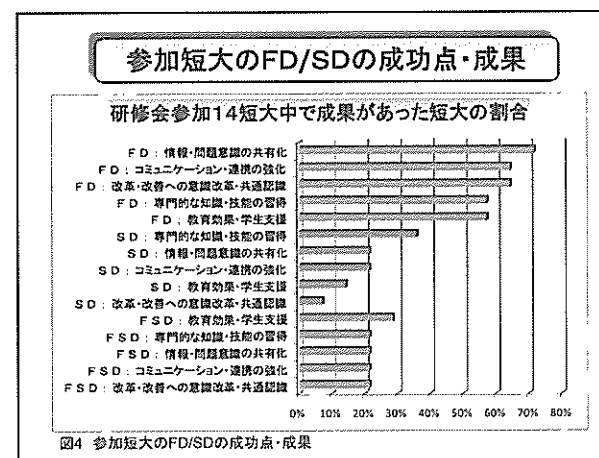
FDで多い活動は「情報・問題意識の共有化71.4%」「コミュニケーション・連携の強化64.3%」「改革・改善への意識改革・共通認識64.3%」「専門的な知識・技能の習得57.1%」「教育効果・学生支援57.1%」の順である。SDでは「専門的な知識・技能の習得35.7%」であり、FSDでは「教育効果・学生支援28.6%」である。

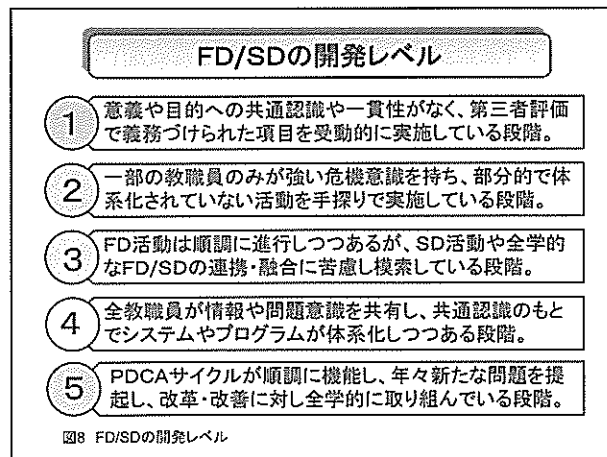
図5は「参加短大のFD/SDの問題点・課題」である。FDで多い活動は「授業評価アンケートの公表・妥当性・活用50.0%」「全学的な研修日程・時間の確保42.9%」「全教員・非常勤講師との共通認識・連携35.7%」「改善策の具体化、実質的な改善35.7%」「研修プログラムの構築・体系化・活性化28.6%」「授業参観での他者評価と自己評価の相違28.6%」の順である。SDでは「研修プログラムの構築・体系化・活性化71.4%」であり、FSDでは「研修プログラムの構築・体系化・活性化50.0%」「全学的な研修日程・時間の確保35.7%」「改革・改善への意識改革・共通認識35.7%」「改善策の具体化、実質的な改善28.6%」である。

(3) 入学生支援・卒業生支援とFD/SDの関係

図6は「参加短大の活動レベルの3段階評価」である。これは、研修会に参加した14の短大別に、「入学生支援」に関する3テーマ、「卒業生支援」に関する3テーマ、「FDとSD」に関する3テーマをそれぞれグループ化し、活動内容の種類を集計して、3段階で評価したものである。この図から短大間で取り組み方に大きな差があることが分かる。

図7は「入学生・卒業生支援とFD/SDの関係」である。これは、図6の数値をバブルチャートにしてグラフ化し、「入学生支援レベル」「卒業生支援レベル」「FD/SD活動レベル」の3つのレベルの関係を示したものである。この図から「FD/SD活動のレベル」が高い短大は、「入学生支援のレベル」と「卒業生支援のレベル」も高いことが分かる。また、これら三者間には、高い正の相関が認められた(FD/SD活動レベルと入学生支援レベル、 $r=.58$, $p<.001$) (FD/SD活動レベルと卒業生支援レベル、 $r=.59$,





p<.001) (入学生支援レベルと卒業生支援レベル、r=.55、p<.001)。

(4) FD/SDの開発レベル

図8は「FD/SDの開発レベル」である。これは、筆者が独自にFD/SDの開発レベルを5段階に分類して定義したものである。今回の教職員レポートから、短大の改革・改善のための当面の目標は、レベル5の「PDCAサイクルが順調に機能し、年々新たな問題を提起し、改革・改善に対し全学的に取り組んでいる段階」を目指すことであると考える。

3.2 分科会・全体会報告書

分科会は、参加者が希望した3領域9テーマを27のグループに編成し、1グループ10~15名で意見交換を行なった。進行はグループごとに選出されたファシリテーター(促進者)が行ない、全員が均等に発言できるように配慮した。討論の内容は、ファシリテーターが指名した記録係が所定の用紙に記録した。また、分科会直後の全体会では、グループごとに討論の内容を発表し、ビデオカメラとICレコーダーに記録した。分科会の記録と全体会の発表内容は、テーマごとに整理して簡潔にまとめた(資料3)。

3.3 研修会アンケート

今後の研修会の改善を目的として、今回の研修会の評価と意見を収集するアンケート調査を実施した。無記名方式のアンケート用紙は、研修会当日の配付資料に同封し、研修会終了直後に会場出口で回収した。

参加者124名中、提出者112名、未提出者12名で、回収率は90.3%であった。提出者の職種は、教員73名(65.2%)、

事務員39名(34.8%)であった。設問ごとに単純集計を行なったが、小数点以下第2位を四捨五入したため、丸め誤差により比率の合計が100%にならない場合がある。

(1) 全体的な評価

まず、図9の設問1「あなたの職務は?」と、設問4「この研修会への期待度は?」を除いた9つの設問の全体的な回答傾向を見てみる。最も多いのは次点評価(5段階中4)の「良かった・高い」で平均62.0%である。次に多いのは最高評価(5段階中5)の「非常に良い・非常に高い」の平均18.1%である。その他、「どちらでもない」は平均15.1%であり、「悪い」は5問に、「非常に悪い」は1問にのみの回答である。従って、全設問の最高評価の平均18.1%と次点評価の平均62.0%の合計は、全体の80.1%となり、今回の研修会のプログラムやテーマに対する参加者の評価は全体的に高いことが分かった。

(2) 期待度と満足度

次に、設問4「この研修会への期待度は?」と設問11「この研修会の満足度は?」を比較すると、参加前は「非常に高かった」が5.4%、「高かった」が45.5%で、期待度の合計が50.9%であったのに対して、参加後ではそれぞれ21.4%と69.6%となり、満足度の合計は91.0%に達した。従って、今回の研修会に参加する前の期待度に対して、研修会が修了後した直後の満足度は40.1%も上昇しており、非常に満足度の高い研修会であったと言える。

(3) 評価指標

また、今回の研修会の成果を評価する重要な指標として、設問9「ご自分の短大の改革・改善・充実につながる研修内容でしたか?」と、設問10「他の短大の教職員との交流や連携につながる研修内容でしたか?」を設定した。集計の結果、設問9では「非常に良い」が28.6%、「良い」が63.4%で、合計は92.0%であり、設問10では「非常に良い」が30.4%、「良い」が58.9%で、合計は89.3%であった。従って、今回の研修会は十分な成果を上げることができたと言える。

(4) 自由記述

一方、アンケートの自由記述で複数回答があった意見・要望は以下の点であった。①レポートや討論のテーマが漠然としていたため、具体的なテーマに絞り込んで欲しかった。②分科会の討論の時間は短く、現状報告で終わった部分があったため、長くして欲しかった。③分科会の会場は

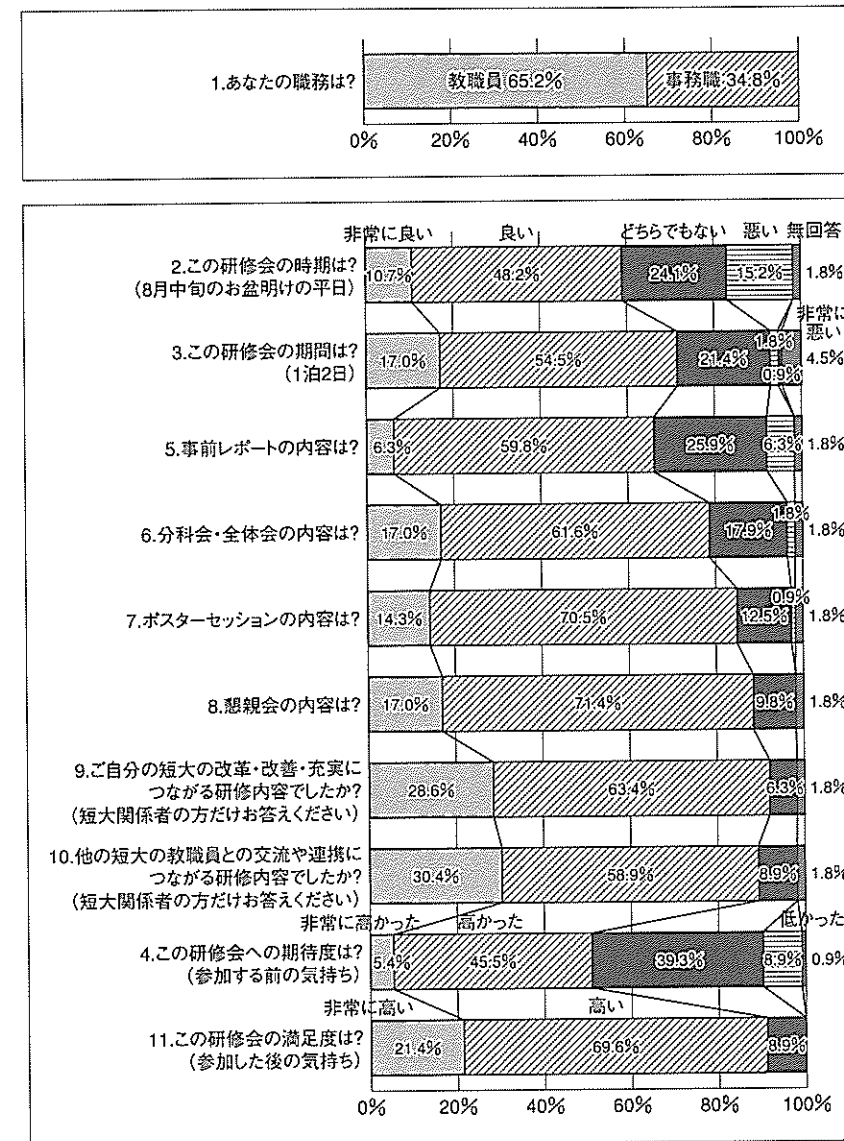


図9 アンケートの集計結果

広間だと他の分科会の会話が邪魔になるので、全て個室にして欲しかった。④短大改革に関する専門家や先進的な取り組みをしている短大の事例報告をして欲しかった。これらの点については、今後改善していく必要がある。

4. まとめ

本研究の目的は、短期大学コンソーシアム九州が2010年8月下旬に開催した合同FD/SD研修会の「成果と課題」を分析し、今後のFD/SD活動の一助とすることであった。研修会修了直後のアンケートの集計結果は、いずれの設問についても十分満足のいく成果を示しており、研修会に参加した殆ど全ての短大関係者に対し、大変有意義な「情報交換」と「連携強化」の場を提供することができたと思

う。
2010年に短期大学基準協会が示した自己点検・評価の新基準では、これからの短大教育や短大運営には、①学習成果の到達目標の設定、②学習成果を客観的に査定する評価指標の開発、③教育の質保証のための体系的で全学的なPDCAサイクルの確立が、ますます重要になってくることを指摘している。また、今回の研修会で、④情報の共有と一元化、⑤財的・人的資源の有効利用、といった短大運営にとって最も核心的と思われるキーワードも浮上してきた。
今後はこれらの点を踏まえて、H23年度以降の研修会を計画していく必要があると思う。また、現在の9短大によるコンソーシアムの連携をより一層強化するとともに、今回以上に参加短大を拡大し、毎年新たなテーマを掲げて、より多くの短大関係者にとって、短大の改革・改善に繋がるような研修会を実施していきたいと思う。

参考文献

- 1) 羽田貴史; FD概念の再構築と理論・実践の相互関係を考える, 日本高等教育学会第12回要旨集録, (2009), 142-143.
- 2) 池田輝政; トップマネジメントからみたFDの重要性, 日本高等教育学会第12回要旨集録, (2009), 140-141.
- 3) 石原好宏; アメリカにおけるGreat Teachers Movement, 平成16年度~平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書, (2007), 277-282.
- 4) 川島啓二(代); FD実質化のための提案 ~「FDマップ」 「基準枠組」の活用による教育改善~, 国立教育政策研究所, (2009), 1-106.
- 5) 佐藤浩章; 三層FD論, 日本高等教育学会第12回要旨集録, (2009), 138-139.
- 6) 佐藤浩章(代); 「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク」による大学の教育力向上 平成21年度活動報告書, 四国地区大学教職員能力開発ネットワーク, (2010), 1-439.
- 7) 白川圭子, 藪敏晴; 日本におけるグレート・ティーチャーズ・セミナーの導入, 平成16年度~平成18年度科学研究費補助金研究成果報告書, (2007), 283-29

研修会のプログラム

時間	8/18(水) 1日目内容	会場
13:00~13:30	受付	キャラリーロビー グラバールホールA
13:30~13:40	①全体会Ⅰ 開会の挨拶： 主担当 長崎女子短大 江畑功学長	
13:40~13:45	日程説明・連絡	
13:45~14:15	基調講演： 「地域に愛される短大に向けて」 —コミュニティ・カレッジを目指すFD/SD— 研究センター長 九州大学教授 吉本圭一氏	
14:15~14:30	移動	
14:30~15:20	②分科会Ⅰ(テーマ別グループ編成) 「入学生の多様化と短大での学び」	グラバールホールA：①班 グラバールホールB：②③④⑤班 ふじ：⑥⑦班、さくら：⑧⑨班
15:20~15:50	コーヒーブレイク チャットタイム	ホワイエ キャラリーロビー
15:50~16:40	③全体会Ⅱ：分科会Ⅰの「知恵の共有」	グラバールホールA
16:40~16:55	移動	
16:55~17:45	④分科会Ⅱ(テーマ別グループ編成) 「卒業生のキャリアと地域に愛される短大」	グラバールホールA：①班 グラバールホールB：②③④⑤班 ふじ：⑥⑦班、さくら：⑧⑨班
17:45~18:00	移動	
18:00~18:45	⑤ボクスターセッション：「接点の交換」(質疑応答) 懇親会受付(出席のクジ引き)	ホワイエ キャラリーロビー
19:00~20:30	⑥懇親会：分科会Ⅱの「知恵の共有」 乾杯の挨拶： 副担当 福工大短大 山崎啓学長 「知り合おう・語り合おう、明日のために」	グラバールホールA・B
7:00~9:00	朝食	会場
	チェックアウト	レストラン「バグエ」(2F) キャラリーロビー
	⑦全体会Ⅲ 日程説明・連絡 「教職員レポートからの知見」と「前日の振り返り」	グラバールホールA
9:00~9:05		
9:05~9:20		
9:20~9:35	移動	
9:35~10:25	⑧分科会Ⅲ(テーマ別グループ編成) 「魅力ある短大のためのFDとSDの開発」	グラバールホールA：①班 グラバールホールB：②③④⑤班 ふじ：⑥⑦班、さくら：⑧⑨班
10:25~10:40	移動	
10:40~11:10	⑨分科会Ⅳ & コーヒーブレイク(短大別グループ編成) 「今後の短大の努力目標のまとめ」	グラバールホールA：①班 グラバールホールB：②③④⑤班 ふじ：⑥⑦班、さくら：⑧⑨班 東山手(2F)：⑩班
11:10~11:25	移動	
11:25~12:25	⑩全体会Ⅳ 「発見と今後の努力目標」(短大別発表) 閉会の挨拶： 副担当 香蘭女子短大 塚原康秀学長	グラバールホールA
12:25~12:30		

教職員レポートのテーマ

課題1. 「入学生の多様化と短大での学び」に関する「取り組み」「困った事」「上手いこと」

テーマ「A」: 「短大教育の到達目標」

短大教育の成果を十分に把握し教育改善を実施する取り組み、または、短大卒業の最低条件について検討し、短大教育が目指す到達目標を定める取り組み。

テーマ「B」: 「初年次・教養教育」

特色ある初年次教育や教養教育についての取り組み、または、地域のステークホルダーに意見を聞く機会を設け、地域のニーズに対応する短大独自の初年次教育や教養教育を開発する取り組み。

テーマ「C」: 「高短連携」

高校の職業・キャリア教育講師への教員の講師派遣や、母校である高校に学生を派遣して高校生との交流を行なう事業を通じて、高校と短大のキャリア教育の連携プログラムを開発する取り組み。

課題2. 「卒業生のキャリアと地域に愛される短大」に関する「取り組み」「困った事」「上手いこと」

テーマ「D」: 「地域人材養成」

地域雇用政策の推進者や企業等の人事担当者の短大教育に対する要望や評価を収集し、地域関係者と意見を交換しながら、地域が必要とする人材養成プログラムを開発する取り組み。

テーマ「E」: 「社会人基礎力」

社会人として必要な一般常識やマナーを育成するための活動や学生間の交流を図って、学生の社会人基礎知識とコミュニケーション能力の向上を目指す取り組み。

テーマ「F」: 「職業キャリア・生涯学習」

地域を支える人材として地域で働く卒業生のために、就職やリカレント教育の情報に関するネットワーク事業を実施し、短大卒業生のキャリアアップを支援する取り組み。

課題3. 「魅力ある短大のためのFDとSDの開発」に関する「取り組み」「困った事」「上手いこと」

テーマ「G」: 「FDの開発」

Faculty Development, 教育の資質向上・職能開発を目指した活動

テーマ「H」: 「SDの開発」

Staff Development, 職員の資質向上・職能開発を目指した活動

テーマ「I」: 「FDとSDの連携・融合」

FDとSDが一体となった資質向上・職能開発を目指した活動

分科会・全体会報告書の要約

◇分科会Ⅰ: 課題1「入学生の多様化と短大での学び」の内容

テーマA: 「短大教育の到達目標」
短大教育の成果を十分に把握し教育改善を実施する取り組み、または、短大卒業の最低条件について検討し、短大教育が目指す到達目標を定める取り組み。

①専門学校との差別化の必要性からも、社会人としての条件を早く身につけることが大切である。

②多様な学生に対する対応の難しさ。色々なレベルの学生の到達目標をどうしてあげたいのか、また、留学生には「日本語能力レベルの違い」や「支援が必要」の問題があり、卒業までの到達目標ということどうすればいいのかわからない。

③「学生カルテ」を導入して学生の情報を教職員の間で共有している。

④「課外活動の充実」により社会人としての基礎能力を育成する。

⑤「学力低下による色々な面での困難性」学力の二極化等、学生への対応が多様化しており、学校として一人ひとりが充実出来るように支援する。学力低下については高校でも非常に強く問題化している。高校短大に限らず、更に小さな世代にまで及んでおり、「社会的な現象」としてとらえないと解決は困難である。

⑥FDの「目標の明確化」と「具体化」をより具体的に示すべきであり、それらを全教職員が共有する。「FDとSDをどう上手く結びつけるのか」が問題である。

⑦「学生との密な関わり合い」というのが到達目標を達成する為の大きな道筋になるのではないのか。「卒業研究のありかた」もその重要な要素の一つである。

テーマB: 「初年次・教養教育」

特色ある初年次教育や教養教育についての取り組み、または、地域のステークホルダーに意見を聞く機会を設け、地域のニーズに対応する短大独自の初年次教育や教養教育を開発する取り組み。

①「初年次教育・導入教育のあり方」は、現状まだ大学に差がある為、解決するには統一目標となるような教育基準を定める必要がある。

②学生の多様化に対応していく為には、「教職員のコミュニケーションを重んじて、学生に対してどういう風に教職員全体で対応していくのかを、報告・連絡・相談したりすることが必要」である。

③「教員自身の意識付けの問題」として、教員間の授業内容の統一性、授業内容の保証をどうしてあげたいのかをどの大学の先生も悩んでおり今後勉強していきたい。ある短大では「2年生による1年生の指導」ということを行っており、非常に良い結果が見られるとの事例報告があった。

④「キャリアノート」を独自に作り学生に指導していく。ただし現状は専門教員が不在であり困難でもある。「カリキュラワー」を設け、その中で就職指導・授業の受け方とかをやっているが「単位化されていない」ということで、これを単位化した場合の問題がある。

⑥入学後すぐコンピュータを専門的に勉強させる。ある大学ではネットの授業が行われているが、内容を同時に理解させることや年間行事が大学によって違うということもあり、難しいのが現状である。

⑦全員必修で「茶道文化」の授業を実施。技術を勉強させるよりも、カウンスリング的な形で、問題がある時にはクラスアドバイザーへ報告し、アドバイスをしていくといった話があった。

⑧「学力低下、分散」への対応について、問題点として「参加して欲しい学生が来てくれない」「指示待ちの子が増えてきた」、また「長年やってきてくることによるマンネリ化」等がある。そこに新2年生が加わることで、「マンネリを打破していくつもりでフレッシュなことが出来る」といった報告があった。

⑨「ブレリ・ミニナリクス・ルーリング」[入学時のオリエンテーション]で学生を取り込んだ熱心な取り組みの報告があった。

⑩アイデアの勝負とマンパワーをどう使っていくのかが課題である。

テーマC: 「高短連携」

高校の職業・キャリア教育講師への教員の講師派遣や、母校である高校に学生を派遣して高校生との交流を行なう事業を通じて、高校と短大のキャリア教育の連携プログラムを開発する取り組み。

①「出席授業を行っている」として、どの程度反応があるのかという所ではちょっと疑問がある。どうしても学科・学期等の紹介で終わってしまい、それが進学後の職業にどう結びついているのかが今後の課題である。制限が厳格あることも問題である。また物理的な問題も厳格となっており、高校が50分授業で短大の方は90分授業といった場合等や、移動の距離、教員の負担等もある為、こういったものを一つ一つ解決していくことが重要である。

②「出席課題」に参加することは、その中に大学生を参加させることで、教員が教えるよりもより親身に聞いてくれるといった点がある。

③「単位互換」については、「学力の分散化」ということが問題の一つであり、「高校生用に授業を新しく考えなければいけない」といった負担が大きくなってきている。

④これら①~③の活動に長く取り組んでいる学校があれば、まだ手探りの状態という学校もあるのが現状である。これら①~③への取り組みが「広報活動」として行われていることが多い短大で見られた。「高短連携」の成果に向けては、「高校と短大の間の信頼関係を作っていく」ということが非常に重要である。「組織的な取り組み」であることが大切ということ、短大にとって単調に広範囲の意味でなく、今後、高校一短大への接線ということで、教育的な目的で行わなければならないのではないかという意見があった。高校側としても「共同で開講する意義」というものをお互いに出していかなければならないと温度差が出てしまう。高校側のニーズをしっかりと受け入れた上で情報交換を常にやっていくということが必要である。

⑥今後の方向としては、やはり地元を重視していくということが大事である。近隣高校との密接な関係を構築していくことで、短期大学の使命が解決していくのではないかと。

◇分科会Ⅱ: 課題2「卒業生のキャリアと地域に愛される短大」の内容

テーマD: 「地域人材養成」

地域雇用政策の推進者や企業等の人事担当者の短大教育に対する要望や評価を収集し、地域関係者と意見を交換しながら、地域が必要とする人材養成プログラムを開発する取り組み。

①地域に根ざしてニーズを汲み取る為に卒業生・就職先へアンケートを実施、必ずしも全ての就職先がアンケートに協力的ではないことが問題点である。専門職と一般職の職種では、アンケートへの協力の差が大きい。相違している為、テクニックが必要と思われる。これらテクニックの情報を短大間で共有していくのが今後の課題である。

②地域を担う人材を育てる為の「公開講座」を実施する。短大の未来を知ってもらうと共に、外部から地域の講師を招き、学生へ話してもらうと同時に短大の発表について外部の目を知ってもらうことも重要ではないか。③短大は分野の専門家の集団なので、この価値をどのように地域に活かしていくか、短大の地域での評価を向上させる為に、短大の価値を広く広めていく必要があるのではないかと。

テーマE: 「社会人基礎力」

社会人として必要な一般常識やマナーを育成するための活動や学生間の交流を図って、学生の社会人基礎知識とコミュニケーション能力の向上を目指す取り組み。

①各短大で色々な取り組みを実施しているが目的は同じところにある。外部講師を招聘しての基礎力講習や地域交流で能力を培うということもあった。また問題点として、「社会人基礎力の定義」については様々だ」といことがあった。具体的定義がまだイメージできておらず、評価の難しさに繋がっているのではないかと。また、「問題解決能力」が大事ではないかと、「前に進もうとする力」「考えようとする力」「チームで働くこととする力」を学生に持たせたらどうなのかということ、教職員も意識するということが大事ではないか。②「社会人基礎力」を高めていく為に、指導のやり方について色々な議論がある。多様な学生に対してどう対応すべきか、「社会の厳しさを教える為には厳しすぎではないか」が非常に重要ではないかと。

か。
 ⑤高校でも同様の取り組みがなされているとの紹介があった。高校と短大での情報の共有化というものも重要ではないか。
 ⑥「コミュニケーション能力」をテーマとした場合、一般常識やマナーの問題点が色々出て来た。どこまで短大の教職員がフォロー・指導していくかについて議論したが結論までには至らなかった。
 ⑦ビジネスマナー、キャリア形成講座等、より実践的なものを考え、取り組んでいくことが必要である。「社会人基礎力」の大切さを学生に考えさせ、我々の為でなく、学生の為の取り組みをしていきたい。なるべく興味と関心を学生に持たせたいという取り組みを各短期大学で行っていくことが大事。
 ⑧地域の方、教職員を含めたたくさんの方と接するということで「社会人基礎力」を向上させる」ということごとく地域イベントに参加し、地域交流を通して地域に育っていただくという取り組みも実施されている。
 ⑨マナーの悪さが自立つ学生が抱えてきているのではないかと、特に服装の乱れに関してはマナーの悪さだけではなく「心の乱れ」とも関係しており、その心のケアが必要となってくる。一方、教職員間で共通意識を形成して指導のブレを無くす試みも重要である。
 ⑩全学的にFDやSDの研修を実施して、学生への指導のあり方を考える。
 ⑪「学生カルテ」を作成して教職員間で情報を共有していく。

テーマF:「職業キャリア・生涯学習」
 地域を支える人材として地域で働く卒業生のために、就職やリカレント教育の情報に関するネットワーク事業を実施し、短大卒業生のキャリアアップを支援する取り組み。

- ①「職業キャリア」については「卒業教育としての各種講座」等、様々な取り組みを実施している学校がある。今後はアメリカの大学のサマーカーキャンプ等を参考に、世界に目を向ける必要があるのではないかと意見があった。成功事例としては、管理栄養士受験対策講座、保育士リカレント教育、就職先訪問や早期の同窓会を開く等の就職後のケアの実施。他にはケアマネ受検対策講座。特にPC・WEB関係は市場があり、ニーズが高い。
- ②「生涯学習」については、学校ではなくて職場へ向けて公開講座を開く。また、県民講座へ登録して開学していく等が挙げられた。
- ③色々な事例があるが、在籍時からの手厚いフォローアップがその後の成功に繋がる。
- ④問題点としては、卒業講座等を行う際の「告知のタイミング」が非常に難しい。広報活動の仕方と費用、人件費等も含めた金銭面の問題がある。
- ⑤卒業生に学び続けたいという思いを共有して、成長して欲しいという共通した思いを確認することが出来た。

分科会III: 課題3 「魅力ある短大のためのFDとSDの開発」の内容
 テーマG:「FDの開発」
 Faculty Development, 教育の質向上、職能開発を旨とした活動。

- ①各校での取り組みとしては、「授業改善報告書」「FD 研修会」「学生の研究活動」「リアルタイム授業評価」「活動の自己目標設定」「外部講師によるFD 研修や講演」「学内小グループの研修による知見共有」「学科ごとに授業の計画書・報告書を出し」「教育懇話会(学生、保護者、チューター、主任の四者面談)」等々が実施されている。
- ②授業評価の高い教員が全教員参加の模範講義を行い、他校の教員も参考としている例もある。授業公開・参観については、実施者の心理的・物理的負担等の問題もある。
- ③授業評価アンケートについては、実施終了後、学生が携帯電話で入力し、授業アンケートがリアルタイムで見られるシステムを構築。このシステムに多数の教員参加を呼びかけている短大もあり、「リアルタイム授業評価」「授業計画書・報告書」の有効性が認められる。ただし、教員の抵抗感、負担感があつたのが問題であり、また、学生の評価の信頼性も問題である。
- ④学生の多様化(学力、心理的、家庭環境など)については、多様化に配慮した授業、学生指導、支援(チューター制など)に対する各短期大学の努力が伺える。今後はそれをどう発展させていくかが課題である。

⑤学生の発達問題については、分煙、禁煙対策や、カウンセラー、保健室との連携を実施し学生の健康を守る。
 ⑥事務職員と教職員の間には、良好な関係を築くために、教員からの働きかけが必要である。

テーマH:「SDの開発」
 Staff Development, 職員の資質向上、職能開発を旨とした活動。

- ①各短大の取り組みの報告では、事務職員の資質を向上させるような研修システムが整っておらず、また実施されてない短大もあれば、SDの開発が進んでいない短大もあった。
- ②問題点としては、職員全員が出席する機会を作るのが難しい、部署単位でのテーマを設定するのが難しい。SDの目的は業務改善、スキルアップであるが、全体で共有する内容(研修、補助金など)と、部署単位でのテーマをそれぞれで考える必要がある。
- ③課題点として、実施時期の設定、SDの組織の構築、テーマ設定をどうするか等が挙げられた。
- ・実施時間を設けることが難しい。
- ・個人によってスキルアップしたいテーマがバラバラのため、テーマ設定が難しい。
- ・組織として実施する際の体制構築の必要性。課と課の連携を強化し、様々な問題に関して互いに同一認識を持たなければならない。
- ・取り組みが効果的に個人差があり、意識改革の必要性がある。教員と事務職員が一体となって学生支援を行い、資質向上・職能開発を目指す活動に取り組んでいかなければならない。

テーマI:「FDとSDの連携・融合」
 FDとSDが一体となった資質向上、職能開発を旨とした活動。

- ①取り組みができていないとの報告も多数あつたが、取り組み例では下記のものも挙げられた。
- ・授業評価の高い先生の公開授業を実施している。
- ・3~4名の教員のグループに分け、お互いの授業を見えることを開始した。
- ・FD、SDの区別なく研究会と一体で実施している。外部講師を招き、発達障害の講演を開催している。教職員が授業に参加できるようにしている。授業が終わると学生が携帯電話で授業を評価できる(SD)
- ・財務状況の開示を行った。4年大と短大の事務局を統合したことにより、父母懇談は、短大から4年大への取り組みに広がった。
- ・職員は他校(法人内)での異動があるので、SDにも取り組みでいる。
- ・法人で行われている。内容については公募。
- ②効用としては、研修会を開催することで、学生指導上の課題等を共有・展開できる。
- ③課題としては、非常勤等の対応、情報共有の方策が挙げられた。
- ・時間が少ないのでなかなか研修が行えない。
- ・各教科において情報交換会を年度当初に行っているが、それを総括する機会はない。
- ・学科ごとであれば、小さな組織であり、理念・情報共有がしやすい。
- ・FD、SDの発端が多いが、情報の共有が図れているが、FDとSDの連携・融合とまではいっていない。
- ・教員と職員のコミュニケーションはできていないが、組織化ができていない。学生が持っている問題は、事務職員の方が見つけられるので、事務職員と教員が情報交換を行うことが重要である。事務職員と教員との意識の差は、やはり存在しておりここが問題である。設置基準上は、教育的な面について保障することは当然であるが、厚生面・生活指導面等についても教員・職員が連携して取り組むことが求められている。教員と職員が知恵や情報を共有して取り組むことが大切である。
- ・FDとは何か等を理解できていない。教員がほとんどなので原点に戻り、学び直す必要がある。
- ・FD、SDの概念がはつきりわからない為、どういった行動・教育をすべきかの基礎を築くべき。

以上

【報告】

地域人材養成フォーラム
「短期大学から発信する地域との協働」

A Forum for Cultivation of Community Human Resources

“Cooperation of Community and Junior College, proposed by the Junior College”

川邊 浩史*1 永田 誠*2

Hirofumi KAWABE Makoto NAGATA

要旨 短期大学関係者、事業所関係者などが集い、地域が必要とする人材養成のあり方と短期大学教育の果たす役割について意見交換を行う目的で「地域人材養成フォーラム」を開催した。そこで、①短大卒業生(就業者)のキャリア支援としてのリカレント教育と短期大学(教育)の役割、②就職先企業・事業所のニーズを踏まえた短期大学におけるキャリア教育の在り方、③地域と短期大学の協働による人材養成のためのコーディネート機能・役割について討議された。

キーワード 地域人材養成、地域連携

1. 趣旨

現在、高等教育は大きな転換期に直面しており、特に平成23年度からは「社会的・職業的自立に関する指導」が大学設置基準に位置づけられ、実践的な職業教育の充実や社会的・職業的自立のための基盤的能力の育成、そして生涯を通じた持続的な就業力の育成と機会の提供が求められている。

そうした中で、これまで地域における専門職の担い手を育成してきた短期大学教育は、全入時代に対応するため、資格の知識技能の修得のみに偏ることなく、個性豊かで魅力ある教育の構築に取り組み、地域の教育機関としての機能と役割の明確化を図り、地域のニーズに応えうる教育活動の創出が期待されている。

そこで、今回、佐賀県 福岡県 長崎県の9つの短期大

学より戦略的パートナーシップの下に組織された「短期大学コンソーシアム九州」が主催し、「地域人材養成フォーラム」を開催する。本会では大学・短期大学関係者、事業所関係者、市民が一堂に会し、地域における中堅人材育成に向けた短期大学教育に対する要望や評価をもとに、地域が必要とする人材養成の在り方と短期大学教育の果たす役割について意見交換を行う。

2. 主催

短期大学コンソーシアム九州

3. 共催

佐賀県立生涯学習センター アバンセ

4. 後援

佐賀県、佐賀県教育委員会、長崎県教育委員会、佐賀新聞社、NHK 佐賀放送局、STS サガテレビ、NBC ラジオ佐賀、エフエム佐賀、ぶんぶんテレビ(順不同)

* 著者紹介
 *1 西九州大学短期大学部准教授
 *2 西九州大学短期大学部講師
 〒850-0806 佐賀市神園3-18-15
 tel: 0952-31-3003
 e-mail: kawabeh@nisikyu-u.ac.jp

5. 日時
平成23年2月11日（金・祝）13:00~17:00
(受付12:30)

6. 会場
佐賀県立生涯学習センター アバンセ ホール
(佐賀県佐賀市天神3丁目2-11)

7. 対象者
短期大学教育関係者及び地域の事業所関係者・市民一般

8. 参加者
192名
<内訳>

所 属	人 数
・短期大学コンソーシアム九州連携校教職員 ・研究センター関係者	115名
・事業所関係者 ・連携校外短大・大学教職員 ・一般参加者等	52名
・登壇者 ・スタッフ等	25名
合 計	192名

9. 地域人材養成フォーラムプログラム

12:30 受付

13:00 開会の挨拶
福元 裕二 (西九州大学短期大学部学長)
大草 秀幸 (佐賀県立生涯学習センターアバンセ館長)

13:10 短期大学コンソーシアム九州 活動紹介
安部 恵美子 (長崎短期大学学長)

13:20 基調講演
「地域に貢献する短期大学教育の可能性」
佐藤 弘毅 (日本私立短期大学協会会長・目白大学短期大学部理事長・学長)

15:00 パネルディスカッション
「地域を担う人材育成における地域と短期大学の連携・協働の可能性を探る」
◆司会・進行；

高尾 兼利 (西九州大学教授)

◆コメンテーター；
吉本 圭一 (九州大学教授・短期大学コンソーシアム九州研究センター長)
佐藤 弘毅 (日本私立短期大学協会会長・目白大学短期大学部理事長・学長)

◆パネラー；
①短期大学関係者
1. 短期大学卒業生就職先に対するアンケート調査結果の報告
川邊 浩史 (西九州大学短期大学部准教授・短期大学コンソーシアム九州推進委員)
2. 地域と連携・協働した短期大学教育の事例紹介—教育 GP における実践教育プログラム—
竹内 裕二 (東海大学福岡短期大学准教授)

②事業所関係者
3. 現場で活躍する人材を育てるために
<専門職事業所より>
朝野 卓也 (長崎県・学校法人日野幼稚園理事長)
<一般職事業所より>
横尾 敏史 (佐賀県・NPO 法人鳳雛塾事務局長)

16:50 閉会の挨拶
山田 直行 (短期大学コンソーシアム九州運営協議会会長・佐賀女子短期大学学長)

17:00 閉会

10. フォーラムの概要

地域人材養成フォーラムでは、開会の挨拶として、まず短期大学コンソーシアム九州の連携校を代表して、主担当校である西九州大学短期大学部の福元学長、次に本フォーラムを共催いただいた佐賀県立生涯学習センターアバンセより大草秀幸館長からご挨拶をいただいた。

次に、長崎短期大学の安部恵美子学長より短期大学コンソーシアム九州の活動紹介が行われた。安部学長は、当コンソーシアムの推進委員長であるとともに、コンソーシアムの前身ともなった「短期大学の将来構想に関する研究会 (略称:CC (Community College) 研究会)」の中心メン

バーの一人であり、そうした歴史的な経緯等も踏まえ、「短期大学コンソーシアム九州」の活動についてご紹介をいただいた。

基調講演では、目白大学短期大学部理事長兼学長であり、日本私立短期大学協会会長として、全国の私立短期大学全体を牽引されておられるとともに、中央教育審議会委員等も歴任される佐藤弘毅先生に「地域に貢献する短期大学教育の可能性」と題してご講演をいただいた。佐藤先生からは、まず全国ならびに海外の短期大学・高等教育の現状と課題について、具体的なデータや事例をもとに解説をいただいた。

次に、地域連携の枠組みについて、日本私立短期大学協会より発刊の『短期大学教育の再構築を目指して—新時代の短期大学の役割と教育機能—』(平成21年1月)より、①短期大学士課程、②専攻科の活用、③非学位課程の3点よりご提起いただいた。いずれにおいても、教育の質保証は担保しつつも、各短期大学の教育理念や地域的特色を背景とした教育の特色を活かす多様かつ柔軟な教育課程の創出、そして、そうした教育課程を生み出すための短期大学のアイデンティティ確立に向けた方途を常に模索し続ける教職員の不断の努力による教育改善の必要性が提起された。

最後に、「私の夢」という前提の上で、今後の短期大学教育の進むべき方向性について、という難しい命題に対してご提起いただいた。

私の狭い知見の上での解釈でまとめると、これまで短期大学が蓄積してきた教養教育と専門教育の適度なバランスと、人間教育を基本とした実務教育などの学位課程を引き継ぎつつ、また、一方で社会の加速度的な流動化に対応しつつ、短期大学の地理的特色を活かしたアクセスがよく、

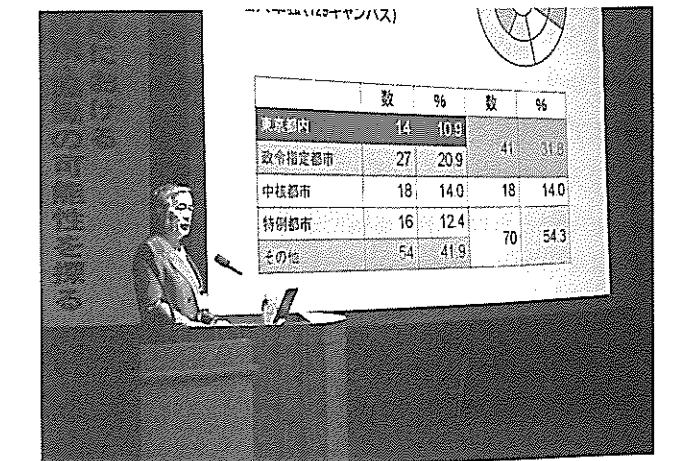
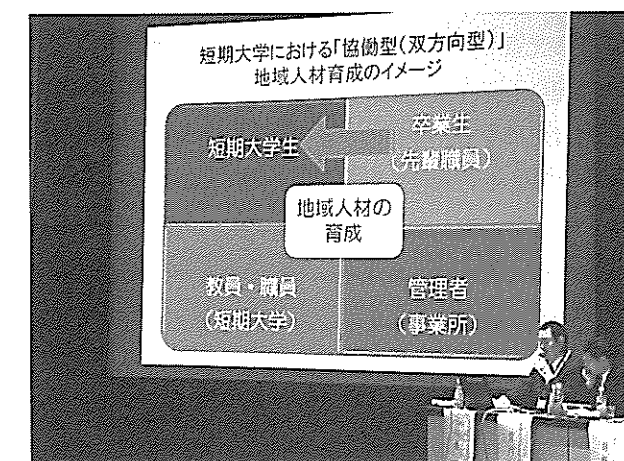
またきめ細やかな地域の「コミュニティ・カレッジ」(地域の生涯学習拠点としての短期大学)へ移行していく中に、四年制大学とも、専門学校とも異なる、短期大学の固有の役割が潜在する可能性があることが提起されたのではないだろうか。

この佐藤先生のご提起は、我々短期大学教職員に、今後、進むべき方向性をご示唆頂いただけでなく、逆に、そうした理念・方向性を、日常の教育活動の中でいかに我々自身が具体的なものとしていくかという問いと期待が、佐藤先生より投げかけられたのではないだろうか。

パネルディスカッションでは、九州大学教育学部教授(専門:教育社会学)で、国内外の高等教育ならびに職業教育の研究にてご活躍されるとともに「短期大学コンソーシアム九州」の研究センター長をお務めいただいている吉本圭一先生、先ほど基調講演をいただいた佐藤弘毅先生の2名をコメンテーターに迎え、地域との協働による人材養成をキーワードに、福岡、佐賀、長崎の3県より4名の方に事例報告をお願いした。なお、司会進行は、昨年度まで「短期大学コンソーシアム九州」の推進委員であり、また「短期大学の将来構想に関する研究会」等において取り組まれた「短期大学ステークホルダー調査」にも関わられた高尾兼利先生をお願いした。

まず、①短期大学卒業生就職先に対するアンケート調査結果(川邊)を議論の口火として、大学側が中心として地域と協働した②東海大学短期大学における教育 GP で取り組まれた実践教育プログラム(竹内)の事例を、短期大学側よりご報告いただいた。

次に、地域・事業所側からのご意見・事例をご報告いただいた。まず、専門職の就職先事業所として短大卒保育者



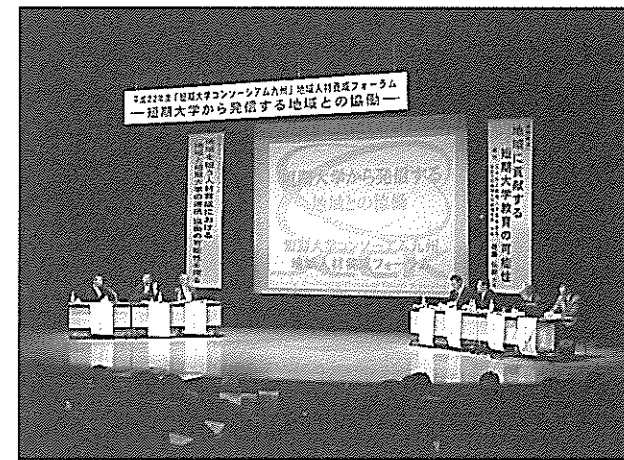
のりカレント教育の一環として短期大学の専攻科と連携した現職者研修に取り組み、いっしょの学校法人日野幼稚園より朝野卓也理事長にご登壇いただき、短大の人材育成（保育者育成）の良さや不足、改善の方向性についてご指摘いただいた。次に、一般職の就職先事業所及び地域におけるキャリア教育実践の事例として、NPO 法人鳳雛塾より横尾敏史事務局長にご登壇いただき、「起業家精神（アントレプレナーシップ）＝自ら学び、自ら考え、自ら行動する能力（生きる力）」を小・中・高校生向けにアレンジし、佐賀県内を中心に学校で取り込まれるキャリア教育の事例についてご報告をいただくとともに、そのご経験をもとに地域との協働などをキーワードにご提言いただきました。



4人の登壇者からのご報告を受け、まずコメンテーターの吉本先生、佐藤先生の両名より、4人のご報告に対する補足質問をお願いした。その上で、時間的な関係上、「地域との協働による短期大学教育の充実と可能性」について焦点化し、4名のパネラーの方々とコメンテーターの先生方を交えた総括討議を行った。紙幅の関係から議論となったポイントのみについてご紹介すると、①短大卒業生（就業者）のキャリア支援としてのりカレント教育と短期大学、（教育）の役割について、②就職先企業・事業所のニーズを踏まえた短期大学におけるキャリア教育の在り方について、③地域と短期大学の協働による人材養成のためのコーディネート機能・役割について、の3点であった。

最後にまとめとして、吉本先生からは、①短大・企業（事業所）・行政・地域といった各セクターのもつ特色を活かす可能性を対話の中から探り、ネットワーク化していき、実践を積み重ねる中で、セクター間をつなぐ共通の価値を

創り上げる過程の重要性、②短期大学の教育活動（教育的営為）の社会的価値の有用性の見直しと、そのための短大ステークホルダーを通じた人材養成の成果の検証の必要性、の2点が提起された。



佐藤先生からは、短期大学と社会及び他学校種及び結節（articulation）による人材養成の基盤であるという認識を前提として、①短期大学とセクター間のより緊密な連携・協働の必要性、②人材養成の目標及び到達点として、学生のpotentialityを養う体験的教育の可能性、③九州という地域文化やコミュニティ要件を踏まえた地域連携組織の拡充と成果発信の必要性、という3点について評価いただき、パネルディスカッションは終了した。

最後に、短期大学コンソーシアム九州運営協議会会長である山田直行佐賀女子短期大学学長より閉会のご挨拶をいただいた。

フォーラムには、九州内外より、また短大関係者だけでなく、企業・行政関係者もご参加いただき、時間を超過するほど、熱気に満ちた会となった。終了後にも、ロビーにて、名刺や情報を交換する姿、会の内容について引き続き議論する光景も多く見られた。また、後述の参加者アンケートの感想にも見られるように、多くの方にご満足をいただいただけではなく、今日のフォーラムの内容を、各自が持ち帰り、新たな可能性を模索するための一つの材料となり得たことが見て取れる。

これもひとえに、ご多用中にもかかわらず、東京からご登壇いただいた佐藤先生をはじめ登壇の先生方、そして190名を超えるご参加いただいた方々お一人お一人のお力添えがあってこそ、本会を盛会の内に終了することができたと思っております。最後になりますが、ここに関係者一同、

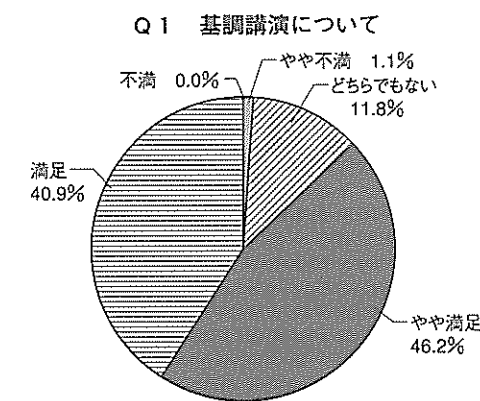
感謝申し上げます。

11. 参加者アンケートの結果

回答者数：93名（有効回答率：48.7%）

Q1 基調講演「地域に貢献する短期大学教育の可能性」について

	不満	やや不満	どちらでもない	やや満足	満足	総計
人数	0	1	11	43	38	93
割合	0.0%	1.1%	11.8%	46.2%	40.9%	100.0%



● 自由記述（抜粋）

〈肯定的意見〉

- ・「大学と短大の違いは？」という質問に、佐藤先生が「短大で職業教育の追及が中途だったため、専門学校との競合となった。」という回答が参考になりました。
- ・これからの短大のあり方、将来像は地域密着が大切であることを再確認させられた。
- ・地域に根付いた短期大学を作っていく事の大切さを学んだ。
- ・新時代の短大について、その役割の中に日々、自分自身が考えていた漠然としたものが、少しヒントとなるものを見出した。
- ・地域に於ける生涯学習の拠点となる短大は本学の課題でもあり、参考になった。
- ・厳しい現実を抱える短大ではあるが、短大としての役割をきちんと考える必要があると痛感した。
- ・短大の役割の多様化について、目標としても認識することができた。海外の様子も知ることができた。
- ・短大がいかにして、現代から未来社会に生きていくのか、

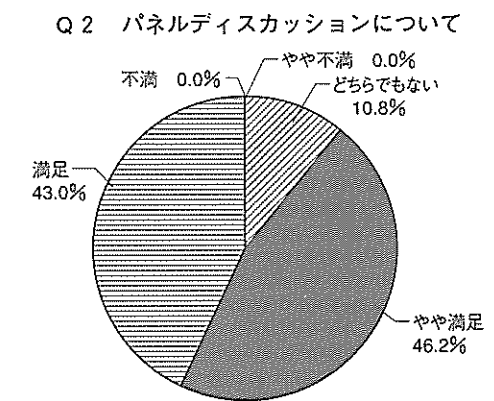
問題意識をもとに展開された基調はいろいろ適用できるものだと思います。

〈否定的意見〉

- ・講演のご準備は大変だったと存じますが、一般論が多く“九州地区”への貢献が見えにくかった。
- ・短期大学、四年制大学、専門学校の可能性の違い（住み分け）については、はっきり示されなかった。
- ・地域密着型にするにはどのような方法があるのか具体的に教えてもらいたい。

Q2 パネルディスカッション「地域を担う人材育成における地域と短期大学の連携・協働の可能性を探る」について

	不満	やや不満	どちらでもない	やや満足	満足	総計
人数	0	0	10	43	40	93
割合	0.0%	0.0%	10.8%	46.2%	43.0%	100.0%



● 自由記述（抜粋）

〈肯定的意見〉

- ・多様な取り組みの事例をうかがうことができ、とても参考になりました。私自身エネルギーがわいてきた。
- ・現場に向かいに行くことが、様々な学びにつながる。地域から学ぼうとする姿勢を学ぶ。これらのキーワードを今後意識したいと思う。
- ・キャリア教育の導入について、教育効果よりもむしろ意識づけのために導入する方が良いというように感じた。
- ・短大のキャリア教育支援は就職活動支援に片寄りがちだが、東海短大のような方法で、起業家教育の出来るのではないかと、違った方向が見えた。
- ・キャリア教育コーディネーター、仮想会社の取り組みは

興味深かった。

- ・横尾さんのような外部の生き活きた活動を小中高からの一貫的教育の流れで聞けて良かった。
- ・経済界や、小中高との連携で地域に必要とされる短期大学になってほしい。
- ・様々な場での取り組みについて知ることができ、新鮮だった。質疑応答で質の深い議論を聴くことができ、貴重な場だった。

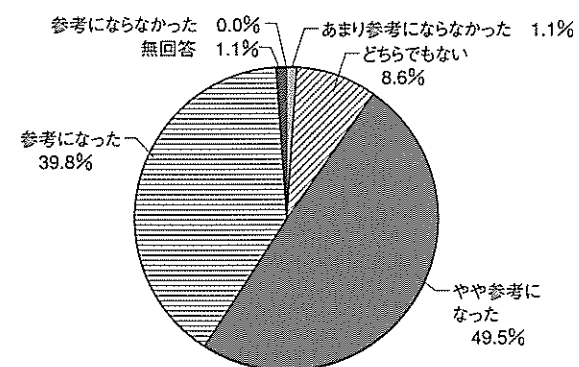
〈否定的意見〉

- ・パネリストに一般企業人の参加がいなかったことが残念である(就職46%が一般)。短大側のウエイトが大きかったのではないかな。
- ・人材育成はまず地域からと言いますが、その前に家庭での役割がそう生かされているか知りたい。

Q3 フォーラムは、学校・職場等での人材養成の改善・充実にむけた参考となったか

	参考にならなかった	あまり参考にならなかった	どちらでもない	
人数	0	1	8	
割合	0.0%	1.1%	8.6%	
	やや参考になった	参考になった	無回答	総計
人数	46	37	1	93
割合	49.5%	39.8%	1.1%	100.0%

Q3 改善・充実にむけた参考となったか



● 自由記述 (抜粋)

〈肯定的意見〉

- ・出す側(送り出す側)の責任と学校、就職先との連携について考えるきっかけとなりました。学生もスムーズに就職活動、就職、現場での実践ができるよう考えていき

たいと思います。

- ・現場は息詰まることばかりなので、学生の実践行動力を高める取り組みを多数紹介されたので、ちらっと希望が見出せた。
- ・より取り組みが行われているように感じたが、教員個々の能力に頼った面が大きく、大学として導入していくための課題が見えた気がした。
- ・本日の論議は現代社会のいろいろな局面、課題解決に適用された有益なものだった。

〈否定的意見〉

- ・何となく可能性が見えた気がしますが、実現にはまだまだ問題が多いと思います。
- ・窓を広げる事、地域で連動したい方々は多くいます。
- ・学科教育と社会人教育のバランスを持った教育を望む。
- ・熱心にこういう取り組みがされていることが、地域へ知られていない気がします。もっと広く呼び掛けてはどうでしょうか。

Q4 短期大学教育や地域の人材養成にむけた事業所や地域の各団体等の協働について【自由記述】(抜粋)

〈肯定的意見〉

- ・小学生から事業所の中で「働く」ことを、身を持って経験すること。事業所の従業員がそれぞれの仕事の役割、仕事の大切さを伝える～つながり～が社会という場で学べる良さはとても大切。保育学科の学生も「中学生の職場経験で……」と進学してきた学生も少なくない。教育・保育実習だけの期間で保育の仕事のやりがい、大変さは実感できないまま終わってしまう。横尾氏の話は大変興味深いものでした。
- ・相互に話し合える場を頻繁に設ける。
- ・社会人となる為のコミュニケーションの取り方等々、地域での活性につなげたら良いかと思います。
- ・厳しい社会情勢の中、各方面、様々な困難を抱えていると思います。苦しさ故、外へ目を向ける余裕は失われるばかりですが、苦しいからこそ、ボールや壁を1枚とりはらって、各方面集まって正直な所で話をしてみれば何か見えてくるのでは、と明るい気持ちになりました。
- ・このように養成組織だけでなく、現場へ声をかけて頂いたことが大変心強いことで、これこそ協働である。
- ・社会・産業界への働きかけ、また、参加の必要性を痛感

しました。

- ・企業・大学・短大・義務教育・行政など、それぞれ「つながる」ことが大切ですね。義務教育では、その「基本的資質」を育成しています。

〈否定的意見〉

- ・企業側から見るとインターンシップは、それなりに負担になり、営業上のリスクを伴う。リスクに対する「対価」が学生に「アルバイト的作業」しか任せない、という状況を生んでいるので、そのリスクに対する保障とリスクを最小限に抑える教育というのが、今後必要となるように思う。(インターンシップ活性化のため)
- ・横尾先生、竹内先生の話に興味深く聞かせてもらったが、一般の教員が彼らのような働きが出来るかという点については疑問がある。
- ・全学生に事業所実習、地域活動ボランティアを数時間でも必須としたらどうでしょう？
- ・短大と、ひとくくりしてしまいがちですが、学科内容によって、かなり事情が異なるのではないかと思います。そのへんのきめの細かい研究、活動を期待します。

Q5 今後の短期大学コンソーシアム九州の活動について【自由記述】(抜粋)

- ・今回の東海大短大部のGPのような他大学のGP活動の内容などを紹介してほしい。
- ・学生個人のコンソーシアム連携校間でのつながりを考えていく。WEB上で何時でもコミュニケーションがとれるなど(SNSで行う等)。
- ・短期大学でなければできないこと、短期大学の可能性は何かについて聞きたかった。
- ・各大学でそれぞれの取り組み内容を実践していくためのサポートセンターが必要な気がします。
- ・私は一市民です。経済界、行政、教育機関、一般市民の参加を呼びかける。高校生であっても良い。

【報告】

社会人基礎講座合同宿泊研修会 実践報告

Report of the Training Program for being a Member of Society

秋好 晴彦*1 横山 卓*2

Haruhiko AKIYOSHI Takashi YOKOYAMA

要旨 2010年9月13日(月)～14日(火)の1泊2日で、社会人基礎講座合同宿泊研修を実施した。「短期大学コンソーシアム九州」加盟9校の学生、総勢180名がグローバルアリーナ（福岡県宗像市）に一堂に会し、「短大生活とリーダーシップ」というテーマのもと各種取組を行い、社会人として求められる基礎的能力について考察した。プログラムは大きく5つの要素（①レクリエーション的な「コミュニケーションワーク」、②チームの結束を固める「プレゼンテーションラウンド」、③リーダーシップを考察する「ワークショップ：プロジェクト9」、④チームの成果を披露し合う「ファーストステージ」&「ファイナルステージ」、⑤今後の具体的な行動目標を立てる「アクションプラン5」）から構成されている。レクリエーション活動のプロである佐藤靖典先生の働きかけのもと、当初は不安を抱いていた学生たちも研修が進むにつれて積極的に臨むようになり、研修後の満足度も高く、一定の成果を得ることができた。

キーワード 社会人基礎、短大生活、リーダーシップ、ワークショップ、行動目標

1. 本研修会の目的

本研修会は、「短期大学コンソーシアム九州」に加盟する9短期大学の学生が、社会人としての基礎的能力を培うべく、「短大生活とリーダーシップ」をテーマとする各種取組を通してさまざまな“気づき”や知見を得、またコミュニケーションのノウハウを獲得して、今後の短大生活に活用していくこと、また、参加学生がここで得たものを各短大に持ち帰って一般学生にも伝え、一般学生もそれを活用していくことを目的として実施した。

2. 本研修会のユニークな点

社会人に求められる能力についてはさまざまな領域で提示されているが、その最たるものは経済産業省の「社会人

基礎力」であろう。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」という3つの能力から成り、多様な人々で構成される職場や地域社会のなかで活動をしていくために必要な能力だとされている。この点を鑑みると、在籍する短期大学（背景）を異にする初対面の学生同士で編成された「チーム」単位で、ある一定の「課題」に取り組みせ、その成果を相互に「発表」させるプログラムが、参加学生にとってきわめて有意義であると考え、実践した。参加学生は、性別・学年・所属学科不問で各短大から選出され、課題に取り組むためのチームは、各短大1名ずつの計9名をもって編成した（計20チーム）。

3. 本研修会のプログラム

プログラムは添付資料に掲載の通りである。1泊2日で、参加学生は、これまでの短大生活を想起しながら「リーダーシップ」や「リーダーとフォロワーとの関係」などをめぐるディスカッションを行い、「リーダーシップ」とは何か、

著者紹介

*1 福岡女子短期大学保育学科教授

*2 福岡女子短期大学文化コミュニケーション学科准教授

〒818-0193 太宰府市五条4-16-1

tel: 092-922-4034

現代社会にあって強く求められる「社会人としての基礎的能力」とは何かについてイメージし、卒業後の生活を見据えて、これからの短大生活(就職活動含む)における「具体的な行動目標」を立てた。そこには5つの活動が含まれる。

- ①レクリエーション的な「コミュニケーションワーク」
- ②チームの結束を固める「プレゼンテーションラウンド」
- ③リーダーシップを考察する「ワークショップ：プロジェクト9」
- ④チームの成果を披露し合う「ファーストステージ」&「ファイナルステージ」
- ⑤今後の具体的な行動目標を立てる「アクションプラン5」

4. 実施の体制

日時：2010年9月13日(月)13:00~14日(火)12:40

場所：グルーバルアリーナ(福岡県宗像市吉留46-1)

参加者：「短期大学コンソーシアム九州」加盟校9校から各々20名の合計180名の学生(性別・学年・所属学科不問)及び教職員20名

講師：佐藤靖典先生(NPO 法人福岡県レクリエーション協会専務理事)

アシスタント：大久保優美子先生/原田弘美先生/黒田幸子先生/龍孝志先生

担当校：福岡女子短期大学(主担当校)

佐賀女子短期大学/精華女子短期大学(副担当校)

5. 本研修会の評価の観点

- ①短大生活の振り返りを軸とする本研修会を通して「リーダーシップ」について考えを深めることができたか。
- ②卒業後の生活を見据え、今後の短大生活(就職活動含む)における具体的な行動目標を立てることができたか。
- ③初対面の他短大生との交流が十分に図れたか。

6. 成果—アンケート結果から—

6.1 リーダーシップの考察

学生たちはさまざまなワークショップを通して、「リーダーシップ」について考え、それをチームメイトや他のチームに披露し、互いの意見に耳を傾けながら、気づきを得、そのイメージを深めていくことができた。今回の研修会を通して「リーダーシップ」についてどれほどイメージでき

たかを10段階(10に近いほど「イメージできた」)で問うたところ、7段階以降との回答が最も多く(計86.9%)、一定の成果が得られた(評価の観点①)。

6.2 満足度

研修会前の各学生のスタンスはさまざまであった。「参加したくない・帰りたい等」(19.3%)、「不安・心配・緊張等」(45.5%)、「面倒・きつそう等」(19.9%)といった気持ちで臨んだ学生が多かったようである。しかしながら、研修会のプログラムのそれぞれが楽しかったようで、2日目終了後には9割を超える学生が満足したと回答している(「大いに満足した」64.1%、「まあまあ満足した」30.8%)。そして、今回の研修会は今後の短大生活に役立つ内容であり(「かなり役に立つ」70.5%、「まあまあ役に立つ」28.8%)、こうした研修会があるならば今後も参加したい(63.5%)との回答が多かった。自分なりに意味ある行動目標を各々立てることができた様子が窺えた(評価の観点②)。

6.3 他短大生との交流

初対面の他短大生との交流については、「あまり話せなかった」1.3%、「少しは話せた」19.2%、「積極的に話せた」40.4%、「連絡先を交換した」26.3%、「いつか遊ぶ約束をした」12.8%との回答であり、かなりの交流を図ることができた様子が窺えた(評価の観点③)。

9月13日(月)		9月14日(火)	
13:05~13:30 オープニング セレモニー	◆開会の挨拶 ◆講師紹介 ◆プログラム紹介 ◆オリエンテーション	9:00~9:10 ◆モーニング・ストレッチ	
13:30~14:10 オープニング メッセージ	◆「メッセージソング」に私に人生と、いえるものがあるなら、あなたと過ごした、この秋の日々」と言えるような2日間にしよう。 ◆いま自分が身につけているものを見てください。「すべて自分で作った」というものがありますか?何もない。我々は1人で生きているのではなく多くの人のおかげで、いまこうして生きている。このことをまず覚えておいて欲しい。 ◆「限りある人生のかけがえのないひととき」、「新友」との出会いがあり、「親友」が生まれることを期待している。 ◆「ラ」の音で挨拶を。「笑顔」を添えて。明るく挨拶しよう。挨拶はコミュニケーションの基本。あかるく、いつも、さきに、つづけて。 ◆拍手は惜しみなく。強く・激しく・小刻みに! ◆リーダーには、Giver=「やる気を起こさせる人」とTaker=やる気をなくさせる人がいる。相手を気持ちよくさせ、やる気を起こさせる+のストロークを惜しみなく出そう。	9:10~10:00 ◆「短大時代に身につけておきたいリーダーシップ」チーム発表会(5チーム1組で計4組編成し、組単位で実施)。 ①各組内で5分間プレゼンテーション。 ②3分間質疑応答。 ③各組の代表チーム決定(「シール貼り」投票による。1人2枚まで貼れる。但し、自分たちの作品にはシールを貼れない)。 10:10~11:20 ◆短大時代に身につけておきたいリーダーシップ」代表4チーム+教職員3チーム発表会 ①5分間プレゼンテーション。 ②3分間質疑応答。 ※佐藤講師：この200人あまりの中で質問をするということは勇気があることだが、「自己アピール」の絶好のチャンスである。質問にチャレンジしてみよう。 ※発表が進むにつれて学生たちから質問が次々と出始める。特に先生たちの発表には、本質的・意外性ある多くの質問がでた。 ③佐藤講師ミニコメント ※組単位での発表からわずか15分あまり、どのチームもプレゼンテーションのレベルが一気にあがっていて驚かされた。	ファースト ステージ
13:40~14:10 コミュニケーション ワーク①	◆アイスブレイキング ①名札の色が違う人と2人組をつくり両手をつなぐ。下から支えている人=支え上手、上から手を乗せている人=甘え上手。甘え上手の人が支え上手の人の周りを、手を離さないで1回り。その逆。支え上手の人が回る。 ※固かった雰囲気が一気に和やかに変わり、自然に笑い声・歓声・拍手があちこちで起こる。 ②「なべ・鍋底抜け」の歌にあわせて返返しになる、戻る。 ③フォークダンス：4人組となり、レッドウィング(2回行う)。※一気に盛り上がる。ミキシングで相手を求めて会場騒然となる。 ④4人組で自己紹介。血液型当て。 ⑤2人組同士向かい合い、右・左飛び。同じ方に飛んだら座る。	11:20~11:40 ◆今日から始める私のアップアクションプラン ①「社会人として輝く・魅力アップする5つの誓い・アクションプラン」を各自リストアップ ②チーム内発表・交換会。 ※チーム発表後、アシスタントミニ講評、学生への期待を述べる。	ファイナル ステージ
14:25~15:35 コミュニケーション ワーク②	◆チームになろう ①チーム毎に身長順に9人整列。 ②円になり、軽く氏名・学校名を自己紹介。 ③チーム対抗ゲーム(サークルにダッシュ・じゃんけん)。9人リレー方式。9人目が早く勝ったチームの勝ち(2回行う)。 ④額縁写真館(9人の顔が入る額縁を模造紙一枚で作る記念写真)。チームの個性溢れる額縁ができる。額縁に全員の顔を入れて記念写真。 ※絵を描く、全体デザインするなど、いろんな才能が垣間見え始める。	11:40~12:05 ◆講評&まとめのミニ講義 ①幹事校の佐賀女子短期大学、精華女子短期大学、福岡女子短期大学の代表1名ずつ ②佐藤講師まとめ ▼リーダーシップの3機能「リードする・サポートする・フォローする」説明。 ▼社会人になったとき、リーダーシップの前にまず求められるのは「メンバーシップ」。 挨拶する、与えられた仕事を責任持ってする、ホウ・レン・ソウ=報告・連絡・相談がきちんとできる、言葉使い、自分の立場やTPOをわかまえているなど、社会人として当たり前のことが求められる。 ▼夢や自己実現、自分のやりたいことを成し遂げるには、良いメンバーシップ=社会人の基礎力を磨くことも大切である。 ▼自立=セルフスタンディングの前に、自律=セルフコントロールが求められる。協調性が大切だ。 ▼始めよう5つのアクションプラン。日々のささやかな積み重ねが魅力的なあなたを作っていく。	アクション プラン5
			総括

9月13日(月)続き		9月14日(火)続き	
15:50~16:00	◆リフレッシュ・エクササイズ	12:05~12:20	◆閉会の挨拶
16:00~16:40	◆3分でチームをアピールするには? ~チーム名、リーダー、メンバーの魅力アピールプラン作成&練習~	◆出発(たびだち)のついで「ここから始まる、いつの時代も」、「新友→親友→心友となった仲間との出会いから始まる出発」	◆エンディングセレモニー
プレゼンテーションラウンド①	①こんなリーダーであって欲しい!リーダーへの8つの期待をリストアップ。 ②リーダーに対してメンバー8つの誓い(メンバーシップ=チームの一員として果たすべき約束、役割)をリストアップ。 ③チーム名、リーダー、メンバーの魅力アピール等に①、②を加味してデザイン、模造紙一枚にまとめ、5分間プレゼンテーション練習。	①「メッセージソング」に私に人生と、いえるものがあるなら、あなたと過ごした、この秋の日々」と言えるような2日間でしたか。 ②「限りある人生のかけがえのないひととき」を一緒に過ごしたこの二日間、「新友」との出会い深め、「親友」が生まれましたか。更に交流が深まり「心友」が生まれることを期待している。 ③世界に一つだけの花を咲かそう! 「世界に一つだけの花 一人ひとり違う種を持つその花を咲かせることだけに 一生懸命なればいい」。欠点ばかりに目がいきがちであるが、自分の長所・いいところ・持ち味を大切にしよう。その長所、才能、個性に日々を磨きをかけていこう。日々のトレーニングが大切。 ④欠点も・未熟なところもたくさんあるが、がんばって生きている自分に拍手を! 自分自身に時々褒美をあげよう。 ⑤この2日間、みるみる成長していく姿を見て「若いて、すばらしいな」と感じた。人生は選択の連続。いまここにいるのも自分の選択の結果。これまでの人生は変えられないが、これからの人生は変えられる。主役は自分。そしてどんな人生を歩むか、脚本・演出も自分。そして監督も自分。しっかり自分の人生作って行って欲しい。 ⑥「自分の可能性に勝手に蓋をしないで」 “夢は心のエンジン”、夢や目標を大切に	
16:55~17:50	◆「チームをアピールする!」 ※5チーム1組で4組編成	◆最後のメッセージ 「短期大学は、最終目的地ではない。通過点である。最終ではないが、「就職」というのは、長い勉学の一つの目的地である。「就職」、そしてその後の人生を生き活きと過ごしてもらいたい。一緒に参加しておられる各学校の先生の願いでもある。「就職」=職場は一人でない。集団・組織=チームやグループ=みんなでやる場である。そこで求められるもの、自分の夢を実現させるために短大で学んでおきたいこと、身につけておきたいことはどんなことがあるだろう? それを一緒に考えてみようというのが昨日と今日であった。「夢は心のエンジンだ!」というが、ガソリン=情熱・自分の内からわき上がってくるエネルギーと共に、エンジンをうまくまわす知識と技術が必要である。夢実現のための「知識と技術」を一緒に学んできた二日間でもある。集団・組織で行動する、仕事するときに、保育士であれば「保育する」時に求められるものにどんなものがあるだろう? 1. たとえばみんなとうまくやっていく「コミュニケーション力」「メンバーシップ力」	
プレゼンテーションラウンド②	①プレゼンテーションラウンド①の作品をもとに組内で5分間プレゼンテーション(チーム名、リーダー、メンバーの魅力) ②分間質疑応答(進行状況に応じて調整) ③アシスタントによるミニコメント ◆佐藤講師ミニコメント ①声は聞いている人に届いているか。届いていなければ、プレゼンテーションしていることにはならない。 ②視線をあげる。誰かに語りかけるように。 ③言葉に力があるか。“聴いて欲しい”という思いがこもっているか。 ④すべてが見られている。ノンバーバル(非言語的)コミュニケーションが印象を決める(93%)、立ち居振る舞い、仕草、声の大きさ、トーンなどに気をつけよう。 ⑤自分たちの作品がNo.1との誇りを持って。 ⑥プレゼンテーションで作品の価値を高めるようにしよう。		
18:00~19:20	◆夕食・入浴(40分ずつ。先に夕食摂るグループと入浴するグループに分けて)。		
19:30~22:00	◆「短大生活とリーダーシップ」 ~短大時代に身につけておきたいリーダーシップとは~		
ワークショッププロジェクト9	①具体的な名前を5人ずつ挙げる。 ②なぜその人を選んだのか、理由を考える。 ③3人1組で情報交換(各自花火みたいに書き加えていく)。 ④話し合いの結果をチーム内で発表・情報交換 ※夕食・入浴の後で、この30分学生たちは、けだるいようであった。無理せず。 ⑤社会人に求められる基礎力、短大卒業後社会人となったときに求められるもの、期待されている「リーダーシップ・資質」を各自5つピックアップ。 ⑥なぜそのリーダーシップ・資質をピックアップしたか、理由を述べながら、3人1組で情報交換(各自花火みたいに青ボールペンで書き加えていく。自分が書いたものと同じものがあれば青ボールペンで丸を付けていく)。		

9月13日(月)続き		9月14日(火)続き	
	⑦話し合いの結果をチーム内で発表・情報交換 ※リストアップの数が50項目近くあるチームがいくつも出てきた。 ⑧チームの人数分ずつに絞り込む。 ⑨以上をまとめ、「短大時代に身につけておくべき社会人の基礎力・リーダーシップ」発表作品作り。 ⑩できたチームから佐藤講師がチェック。コミュニケーション力、信頼感といった抽象的なものを具体的な事例を挙げながらプレゼンテーションすること等をアドバイス。完成したチームから机の上に作品を置いて解散。1日目終了。		2. 今日のテーマである「リーダーシップ力」。2人以上居れば必ず発生するのがリーダーとリーダーシップである。リーダーとは「よいリーダーシップを発揮できる人」である。 3. 「社会人の基礎力」=ルール、マナー、おもいやり、権利と義務など 4. 自分の思い、すばらしさ、持ち味、やりたいこと、夢などをきちんと伝える・効果的にアピールする力=プレゼンテーション力 5. そして学校で学んでいる専門力、などがあるであろう。 「教育」というのは独り立ちして自分で生きていく術、力を教えること。 皆さんの教育担当者である先生方の共通目標である。さあ始めよう! 仲間との出会いに感謝し、共考、共働、共感、共伸し「独り立ちして自分で生きていく術、力」アップする二日間得たものをエネルギーにして。 ◆佐藤講師のリードで“がんばったぞー”の四部合唱、最後に“お疲れさん・いえい! のかけ声で終わる” ◆佐藤講師 トメッセージソング「君は私の夢だから、大空あゝの空、力の限り、はばたいて!」



編集後記

外を見渡せば2010年度は実に多難な1年であった。夏場には容赦のない酷暑が長く全国を覆い尽くし、多方面に影響を及ぼした。そしてようやく爽やかな秋を迎えたと思ったら、今度は冬場に繰り返し押し寄せる寒波が、農作物などに甚大な冷害をもたらした。それに追い打ちをかけるように、春3月には宮城県沖で巨大地震が発生し、東北・関東地方に壊滅的な大災害をもたらした。さらにその二次災害として福島原発の爆発事故をも引き起こし、かつて経験したことのない放射能汚染と被害が心配されている。

このような年度に我々のプロジェクトは第2年度目を迎えて、多様な活動が各短大の教職員や学生だけでなく、地域その他多くのステークホルダーを巻き込んで、繰り広げられた。そして年度末近くに企画されたのが、この研究紀要の発刊であった。押し詰まってからの原稿執筆は時間の制約もあって極めて大変であったと推察されるが、4編の論文と6編の各種報告が寄せられた。これらは本プロジェクトの今年度の活動の全容を余すところなく反映しているとは必ずしも言えない。しかし、多彩な活動の諸側面を豊かに描き出していると思う。

この創刊号には本来載せるべき記事がすべて揃っているわけでは必ずしもなく、あるべき姿からはほど遠いかも知れない。しかし、それは第2号以降の課題としたい。まずは本号に掲載された論文・報告をお読みいただき、我々の活動の一端をご賢察いただければ幸甚である。(YL記)

短期大学コンソーシアム九州紀要 第1号

2011(平成23)年3月25日印刷
2011(平成23)年3月31日発行

発行所 短期大学コンソーシアム九州 研究センター
〒840-8550 佐賀市本庄町大字本庄1313番地
佐賀女子短期大学内
TEL: 0952-23-5145 FAX: 0952-23-2724
E-mail: tandai-con@asahigakuen.ac.jp

印刷 株式会社昭和堂
〒849-0921 佐賀市高木瀬西3-9-1
TEL: 0952-33-1221 FAX: 0952-34-1144

※平成22年度 文部科学省大学教育充実のための戦略的大学連携

「地域の人材育成に貢献する短期大学の役割と機能の強化のための戦略的短大連携事業」

